

岩渡小谷(2)遺跡

－東北縦貫自動車道八戸線(青森～青森)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

2001年3月

青森県教育委員会

岩渡小谷(2)遺跡

—東北縦貫自動車道八戸線(青森～青森)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2001年3月

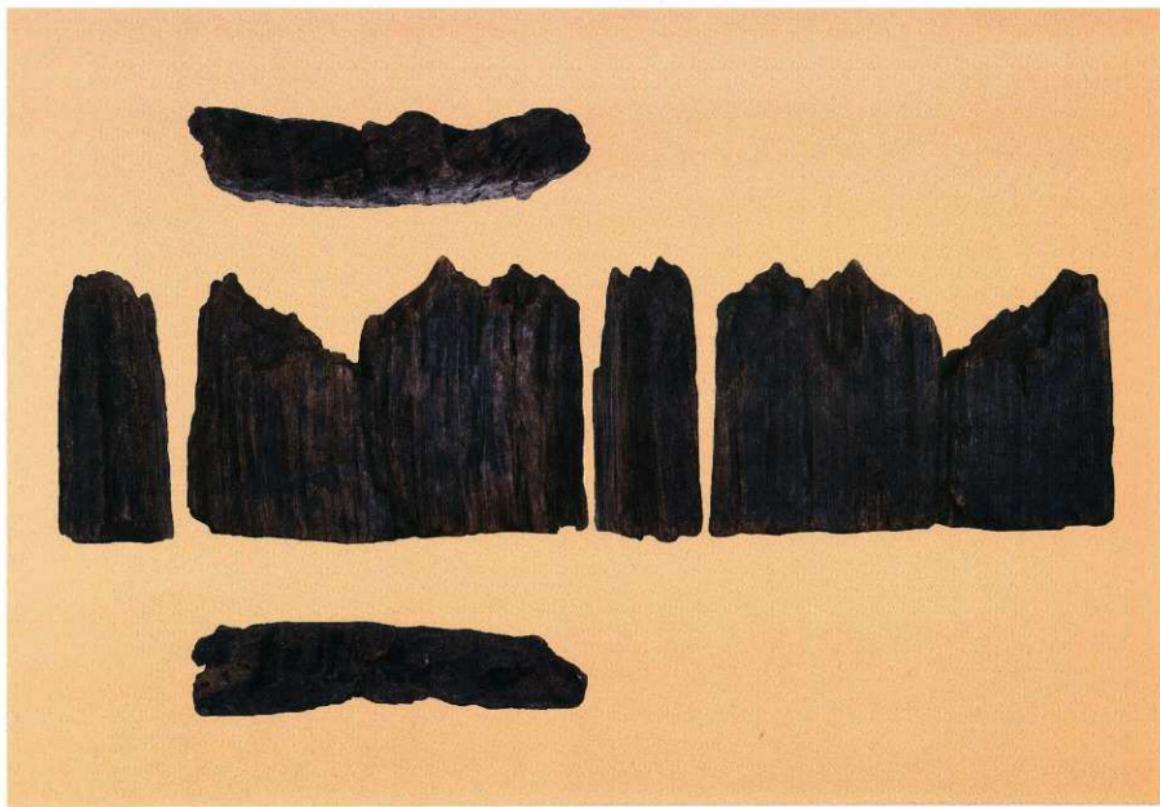
青森県教育委員会



岩渡小谷(2)遺跡と沖館川の流れ(→)



岩渡小谷(2)遺跡全景(上空から)



第7号竖穴住居跡柱穴出土柱材

序

青森市西部に広がる丘陵地には、国の特別史跡三内丸山遺跡をはじめ、多数の遺跡が確認されています。

近年、発掘調査が行われたものでも、熊沢遺跡、岩渡小谷(4)遺跡、三内丸山(6)遺跡、安田(2)遺跡、朝日山(2)遺跡などが挙げられます。

これらの遺跡と近接する岩渡小谷(1)～(4)遺跡については、これまで発掘調査が行われていませんでしたが、平成11年度に、東北縦貫自動車道八戸線建設事業の実施に伴い、日本道路公団から委託を受けて当センターが、岩渡小谷(2)遺跡の一部を発掘調査しました。

調査の結果、縄文時代、平安時代の住居跡や土器、石器が出土し、近接する遺跡との関連を検討したり、地域の歴史を知る上で貴重な資料が得られました。

この発掘成果が、広く文化財の保護と研究に活用され、また、地域社会の歴史学習や地域住民の文化財保護の意識の高揚につながることを期待したいと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施と報告書作成にあたり御協力、御指導を賜りました関係各位に対しまして、厚く御礼を申しあげます。

平成13年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島邦夫

例　　言

- 1 本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設事業に伴い平成11年度に実施した青森市岩渡小谷(2)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 この遺跡は、平成10年3月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』刊行後に、遺跡番号01300として登録された。
- 3 執筆者の氏名は各節末に記してある。
- 4 資料の分析、鑑定については、下記の方に依頼した（敬称略）。

石器の石質鑑定	県立八戸南高等学校教諭 佐々木辰雄
放射性炭素年代測定	㈱地球科学研究所
プラント・オパール分析	株式会社 古環境研究所
樹種同定	高橋利彦（木工舎「ゆい」）
- 5 本書に掲載した地形図は、国土地理院平成9年発行の5万分の1地形図を複写したものである。
- 6 採図の縮尺は、図ごとにスケールを付した。
- 7 遺物図版に使用したスクリーントーンの凡例は図毎に示した。遺構図版に使用したスクリーントーンの凡例は特に断りがない限り下記の通りである。



- 8 遺物写真の縮尺は不統一である。
- 9 堆積土の色及び土器の色については『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄 1993）を用いた。堆積土中の混入物の大きさについては便宜的に次のとおり表記し、それ以外のものは適宜形状と大きさを記した。

粒状のもの	「粒」=粒径2mm以下のもの、「中粒」=2~5mm程度のもの、「大粒」=5~10mm程度のもの
塊状のもの	「小塊」=粒径10mm以下のもの、「中塊」=10~20mm程度のもの、「大塊」=20~50mm程度のもの
- 10 遺構番号は発見順に付した。番号を付したもののが精査の結果遺構と認定できなかったものについてはその番号を欠番とした。
- 11 本稿で使用した遺構の略号はS I = 積穴住居跡、S B = 挖立柱建物跡、S D = 溝跡、S K = 土坑、S X = その他とした。
- 12 遺物観察表の凡例は遺物観察表直前頁（72頁）に示した。
- 13 引用文献については、第5章の後に収めた。
- 14 発掘調査における出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

序

例言

目次

挿図目次・表目次・写真図版目次

第1章 発掘調査の概要	1
第1節 調査要項	1
第2節 調査の方法	2
第3節 調査の経過	2
第2章 遺跡の環境	3
第1節 周辺の遺跡	3
第2節 基本土層	6
第3章 遺構と遺物	7
第1節 概要	7
第2節 縄文時代の検出遺構と遺構内出土遺物	7
第3節 平安時代の検出遺構と遺構内出土遺物	17
第4節 その他の検出遺構	23
第5節 遺構外出土遺物	51
1 土器	51
2 石器	55
第4章 自然科学分析	81
第1節 放射性炭素年代測定結果	81
第2節 青森市岩渡小谷(2)遺跡出土材の樹種	84
第3節 岩渡小谷(2)遺跡のブラント・オバール分析	89
第5章 考察とまとめ	93
第1節 岩渡小谷(2)遺跡の縄文土器について	93
第2節 第7号竪穴住居跡出土の柱材について	94
引用・参考文献	97
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡	4	図29 第7号竪穴住居跡	38
図2 基本土層	6	図30 第7号竪穴住居跡カマド	39
図3 遺構配置図	8	図31 第7号竪穴住居跡掘り形	40
図4 第11号竪穴住居跡	12	図32 第7号竪穴住居跡関連遺構 (SD-01・SB-01) 断面	41
図5 第12号竪穴住居跡	12	図33 第8号竪穴住居跡	42
図6 第13号竪穴住居跡	13	図34 第9号竪穴住居跡	42
図7 繩文時代土坑 (SK-11~13)	13	図35 第10号竪穴住居跡及び同掘り形	43
図8 繩文時代土坑 (SK-16~18)	14	図36 第10号竪穴住居跡カマド	43
図9 繩文時代遺構内出土遺物 (SI-11・12)	15	図37 平安時代土坑 (SK-01~04・06・07)	44
図10 繩文時代遺構内出土遺物 (SI-13・SK-11~13・16・17)	16	図38 平安時代土坑 (SK-08~10・14・15)	45
図11 第1号竪穴住居跡	25	図39 第1号敷石遺構	46
図12 第1号竪穴住居跡炭化材等出土状況	26	図40 平安時代遺構内出土遺物 (SI-01・02)	47
図13 第1号竪穴住居跡掘り形	26	図41 平安時代遺構内出土遺物 (SI-03~05)	48
図14 第1号竪穴住居跡カマド	27	図42 平安時代遺構内出土遺物 (SI-05~07)	49
図15 第2号竪穴住居跡	28	図43 平安時代遺構内出土遺物 (SI-07・SD-01・ SB-01・SI-10・SK-10)	50
図16 第2号竪穴住居跡掘り形	28	図44 遺構外出土土器 (1)	56
図17 第2号竪穴住居跡カマド	29	図45 遺構外出土土器 (2)	57
図18 第3号竪穴住居跡A(上)・B(下)	30	図46 遺構外出土土器 (3)	58
図19 第3号竪穴住居跡カマドA	31	図47 遺構外出土土器 (4)	59
図20 第3号竪穴住居跡カマドB	32	図48 遺構外出土土器 (5)	60
図21 第3号竪穴住居跡掘り形	32	図49 遺構外出土土器 (6)	61
図22 第4号竪穴住居跡	33	図50 遺構外出土土器 (7)	62
図23 第4号竪穴住居跡カマド	33	図51 遺構外出土土器 (8)	63
図24 第5号竪穴住居跡	34	図52 遺構外出土土器 (9)	64
図25 第5号竪穴住居跡カマド	35	図53 遺構外出土土器 (10)	65
図26 第6号竪穴住居跡	36	図54 遺構外出土土器 (11)	66
図27 第6号竪穴住居跡カマド	36		
図28 第7号竪穴住居跡関連遺構 (SI-07・SD-01・SB-01)	37		

図55 遺構外出土石器（1）	67	図58 遺構外出土石器（4）	70
図56 遺構外出土石器（2）	68	図59 遺構外出土石器（5）	71
図57 遺構外出土石器（3）	69		

表目次

表1 周辺の遺跡	5	表5 遺構内出土石器	80
表2 遺構内出土縄文時代土器	73	表6 遺構外出土石器	80
表3 遺構外出土縄文時代土器	73	表7 第7号堅穴住居跡出土木柱	80
表4 平安時代土器	79		

写真図版目次

写真1 調査区全景他	写真11 第7号堅穴住居跡及び関連遺構（4）
写真2 第11～13号堅穴住居跡（縄文時代）	写真12 第8～10号堅穴住居跡
写真3 第11～13・16～18号土坑（縄文時代）	写真13 第1～4・6・7号土坑
写真4 第1号堅穴住居跡	写真14 第8～10・14・15号土坑・第1号敷石遺構
写真5 第2・3号堅穴住居跡	写真15 遺構内及び遺構外出土縄文時代土器
写真6 第3・4号堅穴住居跡	写真16 遺構外出土縄文時代土器
写真7 第5・6号堅穴住居跡	写真17 遺構外出土縄文時代・弥生時代土器
写真8 第7号堅穴住居跡及び関連遺構（1）	写真18 縄文時代石器
写真9 第7号堅穴住居跡及び関連遺構（2）	写真19 平安時代遺物
写真10 第7号堅穴住居跡及び関連遺構（3）	

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査要項

1 調査目的

青森市における東北縦貫自動車道八戸線建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する岩渡小谷(2)遺跡の埋蔵文化財発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成11年4月20日～平成11年9月17日まで

3 遺跡名及び所在地 岩渡小谷(2)遺跡（県遺跡番号01300）

青森市岩渡字小谷自衛隊演習場内

4 調査対象面積 8,500m²

5 調査委託者 日本道路公団

6 調査受諾者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関 青森市教育委員会

9 調査体制

調査指導員 市川 金丸 青森県考古学会会長（考古学）

調査協力員 池田 敬 青森市教育委員会教育長

調査員 遠藤 正夫 青森市教育委員会埋蔵文化財対策室室長（考古学）

調査員 工藤 一彌 県総合学校教育センター指導主事（地質学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島 邦夫

次長（調査第一課長兼務） 成田 誠治

総務課長 成田 孝夫（現工業振興課課長補佐）

調査第一課

文化財保護主査 太田原 潤

文化財保護主事 斎藤由美子

調査補助員 西方 敏子、中村 敦子

森川真佐子、神 健太郎

第2節 調査の方法

岩渡小谷(2)遺跡の発掘調査におけるグリッドは、平面直角座標第X系に基づいた4mメッシュの方眼とした。X=88900、Y=-12580を基点とし、北から南に向けて4m毎に0から順に算用数字を、西から東に向けて4m毎に二桁の大文字アルファベットを配した。アルファベットは4m毎にAからYまでの25文字を繰り返すこととし、1順目のアルファベットの前にはAを、2順日のアルファベットにはBを付し、基点からAA、AB・・AX、AY、BA、BB・・と表記した。

グリッド名は、該当する4mメッシュの北西角の記号をアルファベット、数字の順の組み合わせで読むこととし、AB-05、AS-36のごとく呼称した。図示した方位は全てこの座標系に基づいたものである。

遺構検出は隨時行い、発見順に遺構名を付し、原則として1/20で実測図を作成した。遺構以外の出土遺物の取り上げは、グリッド単位で行った。

調査にあたっては、土層の堆積状況を観察するため適宜セクションベルトを設定し、土層注記は『標準土色帖』を用いた。土層の名称は、基本層序については表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を付した。

写真撮影は適宜行うこととし、カラー・リバーサル、ネガカラー、モノクロームの各種類のフィルムを使用した。

(太田原 潤)

第3節 調査の経過

今回の調査は東北縦貫自動車道八戸線建設事業に伴う発掘調査であるが、路線上には本遺跡以外にも複数の遺跡が点在している。本遺跡と並行して調査が実施された安田(2)遺跡、三内丸山(6)遺跡は前年度以前からの継続調査であり、調査済み部分については既に報告書が刊行されている（青森県教育委員会 1999、2000）。また、現縦貫道との分岐点に所在する熊沢遺跡は青森市教育委員会が調査をしている（青森市教育委員会 2000）。他に、1999年度に柴山(3)遺跡（青森県教育委員会 2001）、2000年度に岩渡小谷(3)、(4)遺跡が当センターにより調査が実施されている。

本遺跡の発掘調査は平成11年4月20日に着手した。調査区は起伏に富み、進入路も限定されることから、まず進入路奥にあたる調査区西側の平坦地から表土除去を開始し、表土除去を先行させながら遺構の検出、精査を行った。遺構外の遺物にも留意しながら、引き続いて調査区中央付近の斜面部、東側の尾根頂部付近と順次面積を広げて調査を行った。

遺跡は陸上自衛隊の演習場の中ということで人退場等に制限があった。特に大規模な演習時には場内立ち入り禁止となるため、3～5日程度連続で調査ができないこともしばしばであった。そうした制限はあったものの調査自体は比較的順調に進み、9月前半までに遺構確認および精査を終えた。9月16日に空中写真撮影を実施し、その後危険個所の埋め戻し等を行い、9月17日までに全ての作業を終了した。

(太田原 潤)

第2章 遺跡の環境

第1節 周辺の遺跡

岩渡小谷(2)遺跡は青森市西部に広がる丘陵地に位置する。丘陵中には幾筋かの小河川が流れ、それらが開析した多数の谷が発達している。

小河川は合流を重ねながらやがて陸奥湾に注ぐが、そのうちの一つである沖館川流域には多数の遺跡が分布する。下流右岸には小三内遺跡、三内丸山遺跡、三内遺跡が、左岸には三内沢部(1)～(4)遺跡が連なり、三内遺跡と三内丸山遺跡の間に合流部をもつ支流沿いには、三内丸山(3)～(6)遺跡、安田(2)遺跡が所在する。その合流部よりさらに1.2kmほど上流でもう一本の支流が合流するが、岩渡小谷(1)～(4)遺跡は本流とその支流に挟まれた丘陵地に立地する。(2)遺跡は支流左岸、(3)、(4)遺跡は本流右岸に、(1)遺跡は間の尾根上に位置する。熊沢遺跡は(4)遺跡の対岸である。

以上は河川を中心にみた周辺の遺跡の状況であるが、以下に時期的に本遺跡に関連する遺跡を中心に概観してみる。

岩渡小谷(2)遺跡から出土した遺物は縄文時代前期～晩期、弥生時代、平安時代のものであるが、縄文時代前期及び弥生時代のものは量的に少ない。時期が判明した遺構は主として縄文時代晩期と平安時代であり、遺構外出土遺物で最も量が多いのも縄文時代晩期のものである。

縄文時代前期では本遺跡の南西約0.8kmに位置する熊沢遺跡、北東約3kmに位置する三内丸山遺跡が代表的な遺跡である。前者では昭和50～51年度の調査で円筒下層b式期の集落跡が検出され、捨て場から大量の遺物が出土した。同遺跡では平成9年度の発掘調査でも良好な資料が出土し、隣接地の岩渡小谷(4)遺跡でも平成12年度の調査で同期の集落跡が検出されている。

縄文時代中期の遺跡としては三内丸山遺跡、三内沢部遺跡、近野遺跡などがある。三内丸山遺跡は本遺跡の北東約1.5kmに位置し、膨大な遺構、遺物が出土している。菅江真澄による江戸時代の記録も残るが、近年刊行された著作物も数多い。近野遺跡は中期後半の大型住居跡が検出された遺跡としても著名である。

縄文時代後期の遺跡には三内丸山(6)遺跡、近野遺跡などがある。前者は本遺跡の北東約1kmに位置し、本遺跡と同じ調査原因の遺跡であるが、平成9～11年度の調査で足形付土版、熊形土製品、柱材などが出土して話題となった。

縄文時代晩期の遺物が出土した遺跡として遺跡地図に登録されているのは、新城山田遺跡、浪館(2)遺跡、近野遺跡、三内丸山(5)遺跡、細越遺跡、孫内遺跡等である（青森県教育委員会1998）。細越遺跡からは大洞BC、C1、C2期を中心とした良好な資料や土笛等の土製品、土偶等が出土している。

平安時代の遺跡も多く、三内丸山遺跡、近野遺跡、細越遺跡、朝日山遺跡、安田(2)遺跡等から平安時代の集落が確認されている。細越遺跡からは竪穴住居跡の構築材が確認されている。本遺跡第7号住居跡出土の柱材とともに、当時の建築技術を知る上で興味深い。第7号住居跡のような外周溝と掘立柱建物跡が伴う住居跡は、三内丸山遺跡、近野遺跡、朝日山(3)遺跡などにみることができる。

（太田原 潤・土岐 耕司）

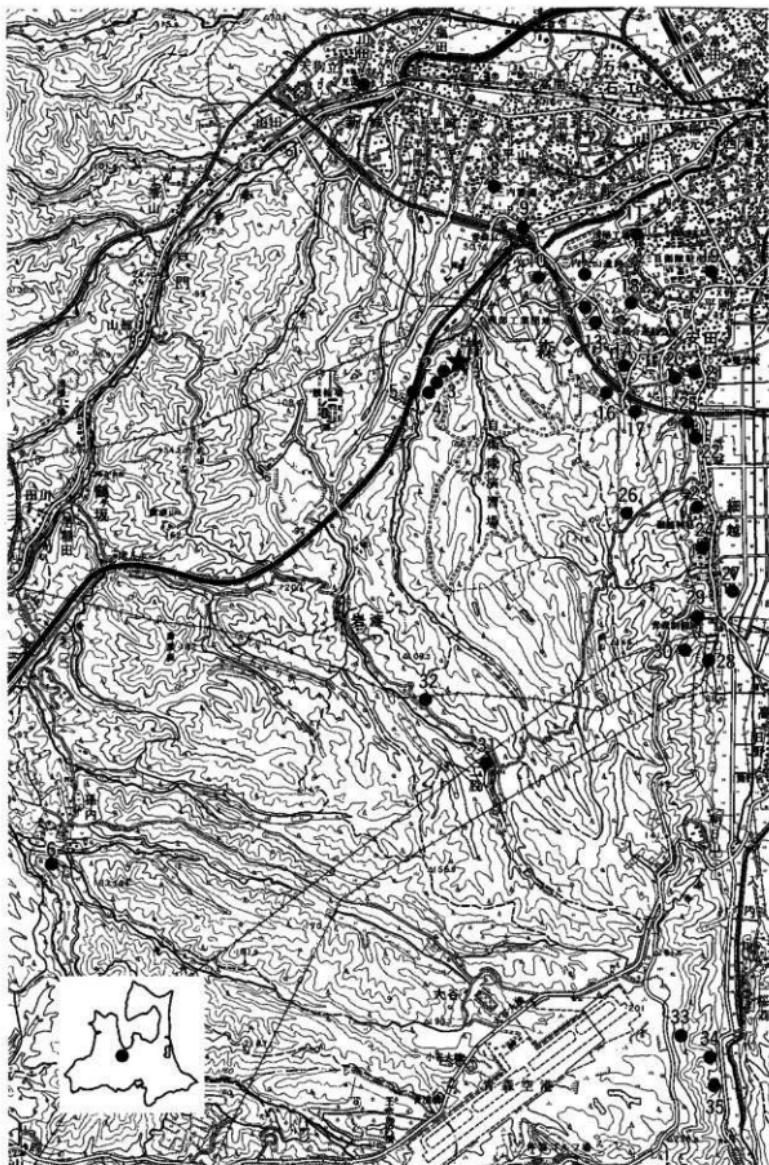


図1 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1 : 50,000)

表1 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時期	報告書等	刊行年	著者または発行者
1	岩瀬小谷(2)	縄文(前・晚)、平安	岩瀬小谷(2)遺跡(本篇)	2001	青森県教育委員会
2	岩瀬小谷(1)	縄文、平安			
3	岩瀬小谷(3)	縄文(中)	平成12年度青森県埋蔵文化財免掘査報告会資料	2000	青森県埋蔵文化財免掘査センター
4	岩瀬小谷(4)	縄文(前・晚)	平成12年度青森県埋蔵文化財免掘査報告会資料	2000	青森県埋蔵文化財免掘査センター
5	船沢	縄文(早・後)	船沢遺跡	2000	青森県教育委員会
6	船内	縄文(後・晚)	県内遺跡免掘査報告書	1973	青森県教育委員会
7	新城山田	縄文(晚)、平安	「青森市新城山田遺跡」『遺址』	1981	相馬 実
8	三内墓園	縄文(前・中)	二内墓園調査報告概要	1962	青森市教育委員会
9	三内武部(1)	縄文(早・後)、平安	三内武部遺跡免掘査報告書	1978	青森県教育委員会
10	三内	縄文(前・後)、平安	青森市三内遺跡	1978	青森県教育委員会
11	小三内	縄文(前・後)、平安	小一内遺跡免掘査報告書	1994	青森県教育委員会
			三内丸山(2)、小二内遺跡免掘査報告書	1994	青森県教育委員会
12	三内丸山	縄文(前・後)、平安	三内丸山遺跡調査概要	1970	青森県教育委員会
			三内丸山1:遺跡免掘査報告書	1988	青森県教育委員会
			三内丸山2:遺跡免掘査報告書	1993	青森県教育委員会
			三内丸山3:小三内遺跡免掘査報告書	1994	青森県教育委員会
			三内丸山4:小三内遺跡免掘査報告書	1996	青森県教育委員会
			新野遺跡免掘査報告書(Ⅲ)・三内丸山(Ⅳ)遺跡免掘査報告書	1977	青森県教育委員会
			新野遺跡免掘査報告書(Ⅳ)	1979	青森県教育委員会
			三内丸山2:遺跡II	1994	青森県教育委員会
			三内丸山2:遺跡III	1994	青森県教育委員会
			三内丸山2:遺跡IV	1995	青森県教育委員会
			三内丸山3:遺跡V	1996	青森県教育委員会
			三内丸山3:遺跡VI	1996	青森県教育委員会
			三内丸山3:遺跡VII	1997	青森県教育委員会
			三内丸山3:遺跡VIII	1997	青森県教育委員会
			三内丸山3:遺跡IX	1998	青森県教育委員会
			三内丸山3:遺跡X	1998	青森県教育委員会
			三内丸山3:遺跡XI	1998	青森県教育委員会
			三内丸山3:遺跡XII	1998	青森県教育委員会
			三内丸山3:遺跡XIII	1999	青森県教育委員会
			三内丸山3:遺跡XIV	2000	青森県教育委員会
			三内丸山3:遺跡XV	2000	青森県教育委員会
			三内丸山3:遺跡XVI	2000	青森県教育委員会
			三内丸山3:遺跡XVII	2000	青森県教育委員会
13	三内丸山(3)	平安			
14	三内丸山(4)	縄文(前・中)、平安			
15	三内丸山(5)	縄文(中・晚)	三内丸山(5)遺跡	1999	青森県教育委員会
16	三内丸山(6)	縄文(中・後)	一内丸山(6)遺跡I	1999	青森県教育委員会
			三内丸山(6)遺跡II	2000	青森県教育委員会
17	安田(2)	縄文(前・後)、弥生、平安	安田(2)遺跡	1999	青森県教育委員会
18	近野	縄文(前・晚)、平安	近野遺跡(Ⅰ)免掘査報告書	1974	青森県教育委員会
			近野遺跡免掘査報告書(Ⅱ)	1975	青森県教育委員会
			近野遺跡免掘査報告書(Ⅲ)・三内丸山(Ⅳ)遺跡免掘査報告書	1977	青森県教育委員会
			立野遺跡免掘査報告書(Ⅳ)	1979	青森県教育委員会
			近野遺跡V	1997	青森県教育委員会
19	漁館(2)	縄文(中・晚)			
20	安川近野(1)	縄文(前・後)、平安			
21	安田(1)	縄文(前)			
22	細崎	平安	「津軽半島における縄文土器の新資料」『北緯考古学』	1971	北林 八郎晴
23	栄山(1)	平安			
24	栄山(2)	縄文、平安			
25	栄山(3)	縄文、弥生、平安	栄山(3)遺跡	2001	青森県教育委員会
26	安山(4)	平安			
27	船越	縄文(後)、平安	船越遺跡	1979	青森県教育委員会
28	朝日山	縄文、平安、中世	朝日山遺跡	1984	青森県教育委員会
			朝日山遺跡II	1993	青森県教育委員会
			朝日山遺跡III	1994	青森県教育委員会
29	朝日山(1)	縄文、平安	朝日山遺跡II	1993	青森県教育委員会
			朝日山遺跡III	1994	青森県教育委員会
			朝日山(1)遺跡	2001	青森県教育委員会
30	朝日山(3)	縄文、平安	朝日山遺跡II	1993	青森県教育委員会
			朝日山遺跡III	1994	青森県教育委員会
			朝日山(3)遺跡	1995	青森県教育委員会
			朝日山(3)遺跡	1997	青森県教育委員会
31	二段(1)	縄文	市内遺跡詳細分布調査報告書	1996	青森県教育委員会
32	二段(2)	縄文	市内遺跡詳細分布調査報告書	1996	青森県教育委員会
33	龜山(1)	縄文(後・晚)	市内遺跡詳細分布調査報告書	1996	青森県教育委員会
34	龜山(2)	縄文(前・中)	市内遺跡詳細分布調査報告書	1995	青森県教育委員会
35	龜山(3)	縄文(晚)	市内遺跡詳細分布調査報告書	1995	青森県教育委員会

第2節 基本土層

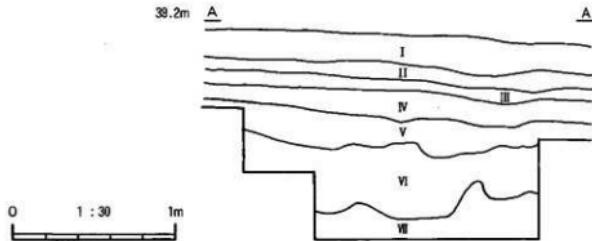
今回の調査区は大別すると谷部と尾根部、その間の斜面部からなる。谷部は沖館川に開口するもので、本遺跡付近において比較的浅くなり若干の平場を形成する。平安時代の住居跡等の遺構はそうした平坦部付近から検出されている。尾根部は沖館川とその支流に開析された残存部と思われ、尾根線はそれらの合流点に向かって伸びる。縄文時代の遺物は尾根線付近に多くみられた。標高は尾根頂部で約48m、谷部の平場で約36mである。

調査前の遺跡の現状は山林であったが、一帯は陸上自衛隊の演習場として使用されており、立入が禁止されていた区域内である。広範な掘削等は見られなかったが、沖館川とその支流の合流部付近へ続く道路部分は人為的に削平されていた。

堆積土の状況は場所により大きく異なっていた。尾根から斜面部にかけては概して黒色土の堆積は薄く、しばしば表土直下に堅い粘質土がみられた。それに対して平坦部から谷部にかけては黒色土の堆積が厚く、黒色土自体が数枚に分層可能な程であった。これは尾根から斜面部にかけての土が風雨等自然の營力により流出し、平坦部から谷部にかけて再堆積した結果と思われる。平坦部付近では黒色土の下位に千曳浮石に相当すると思われる層も確認されたが、堆積は安定したものではなかった。

図2は谷部にあたるAK-49グリッドにおける基本土層である。

(太田原 潤)



基本層序		
I 層	黒色	10YR2/1 黒土
II層	黒色	10YA1.7/1 褐色粒5%、全層中最も黒い
III層	黒褐色	10YR3/2 砂土粒1%、Ⅱ層と似るがやや黄白色味をおびる
IV層	黒褐色	10YR2/2 砂土粒1%、ローム粒1%、炭化物粒1%含む
V層	黒褐色	10YR2/3 ローム粒5%、ローム中塊20%、赤色粒3%、崩落層
VI層	明黄色	10YR5/8 砂土10%、粗石粒(10YR6/3)、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 大塊(60mm四方)含む
背層	黄褐色	10YR8/6 槌性が強く、しまりがよくない

図2 基本土層

第3章 遺構と遺物

第1節 概要

岩渡小谷(2)遺跡で確認された遺構は、竪穴住居跡12軒、土坑17基、溝跡1条、掘立柱建物跡1棟、敷石造構1基である。竪穴住居跡は3軒が縄文時代で、他は平安時代である。溝跡、掘立柱建物跡はそれぞれ独立するものではなく、平安時代の竪穴住居跡（第7号竪穴住居跡）に付随するものである。従って、第1号溝跡、第1号掘立柱建物跡については第7号竪穴住居跡関連遺構として同住居跡に統けて記載する。土坑の多くは帰属時期の判定が困難であったが、出土遺物や火山灰の堆積状況、形態等から縄文時代と推定したものが6基、平安時代と推定したものが4基である。残る7基は時期決定の決め手を欠くものであるが、堆積土の状況、周辺の遺構、遺物の状況から判断し、可能性の考えられる時期としてさしあたり平安時代に帰属させた。敷石造構の時期は不詳であるが他の遺構よりは新しいものと思われる。

出土遺物は縄文時代前期、中期、後期、晚期、弥生時代、平安時代の各期のものが出土している。縄文時代晩期の遺物が特に多く、縄文時代前期、弥生時代の遺物は量的に少ない。石器には石鎌、石斧などが含まれる。平安時代の遺物は土師器、須恵器の甕、壺の破片等が確認されているが、特筆されるのは第7号住居跡の柱材である。伏流水の水脈に達していたと思われる柱穴から検出されたもので、約20cm程の長さで残存し、断面形は長径約35cm程の長方形となるものである。この柱材については第5章第2節で若干の考察を試みた。

遺構、遺物の分布状況をみると時代による違いが明らかである。平安時代の遺物は主として遺構内から出土し、遺構は主として丘陵裾の緩斜面から谷部の平坦面にかけて分布しているのに対し、縄文時代の遺物は遺構外からの出土が多く、その大半は尾根頂部付近に集中する傾向が見られた。最も遺物量の多い縄文時代晩期の遺物は尾根付近に集中する傾向をみせる。

（太田原 潤）

第2節 縄文時代の検出遺構と遺構内出土遺物

第11号竪穴住居跡

〔位置〕 AP-29~30・AQ-29グリッドで確認されている。確認面の標高は約35.1mである。

〔平面形〕 不整な円形である。

〔壁・床面〕 谷沿いの道の下から検出されたこともあって遺存状態はあまりよくない。床面は比較的平坦ではあるが、緩い傾斜がみられる。壁面は僅かに残る程度であるが、緩く外傾するようである。掘り形底面は床面に比べて不整形である。

〔規模〕 確認面での大きさは長軸約300、短軸約280cm、床面までの深さ約5cmである。

〔施設〕 標高が高い東半部に周溝が巡る。標高が低い西側に二箇所の小ピットが検出された。出入り口施設の可能性も考えられる。住居ほぼ中央部には土器が埋設されていた。

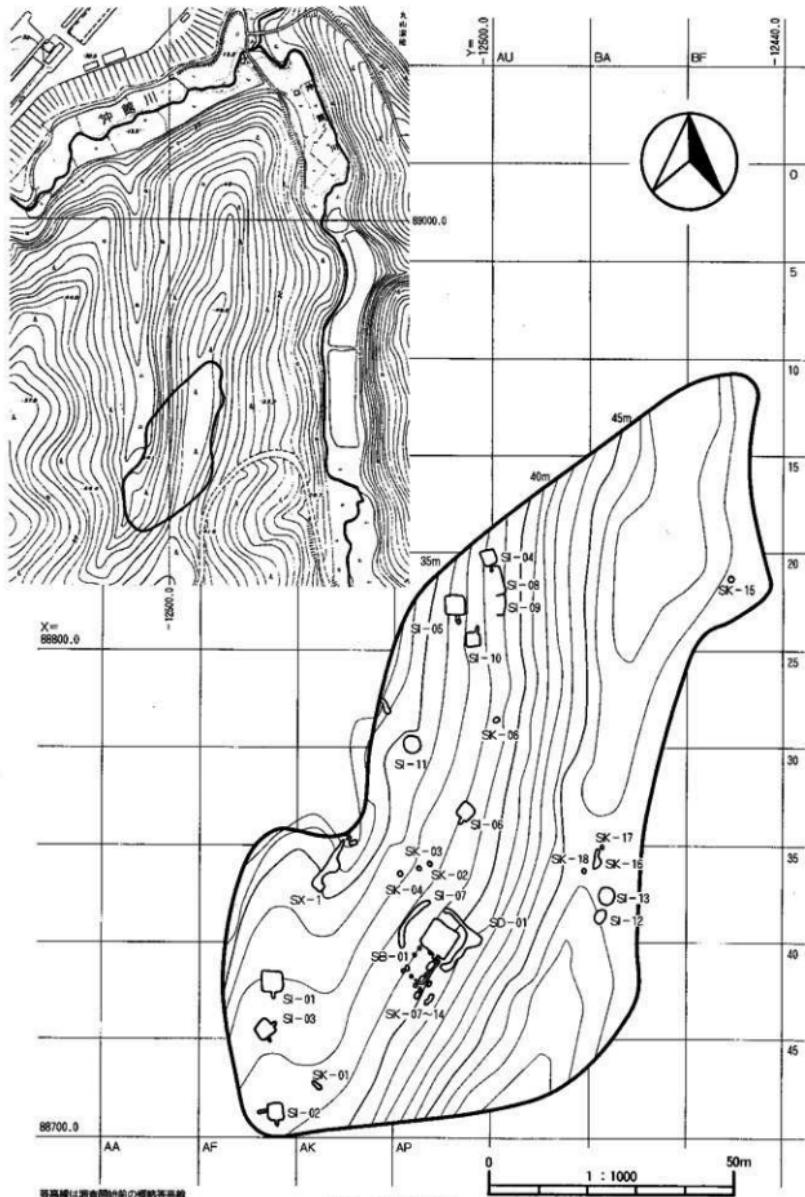


図3 遺構配置図

[遺物] 図9-1は口縁部と底部の径の差が大きい縄文時代晩期のものと思われる深鉢形粗製土器の下半部である。器形のバラスが悪く、焼成も良くない。器面にみられる条痕は、横位・斜位の擦れたようなものと、縦位の明瞭なものとがある。恐らく前者は整形のためのみのものであり、後者は文様を意識して二次的に施されたものと考えられる。調整による胎土中の砂粒の移動はさほどみられない。口縁部付近は欠損しているが、埋設土器としてはほぼ完形であると思われる。2も深鉢形粗製土器の下半部で、土器の内面及び外面、特に内側の底部付近に赤色顔料が付着している。状況からみて顔料の容器として使用された可能性が高い。器面にはR.L.が縦走し、内面には縦方向のナデ痕がみられる。

[堆積土] 自然堆積と思われる。

[時期] 埋設土器から縄文時代晩期と推定されるが、その土器は口縁部を欠いているため明言はできない。

第12号堅穴住居跡

[位置] BA-38~39グリッドで確認されている。確認面の標高は約45.7mである。

[平面形] 不整な方形であるが、木の根の影響もあり必ずしも判然としない。

[壁・床面] 床面は若干の起伏があり、壁の遺存状態は悪い。

[規模] 確認面での大きさは長軸約280×短軸約250cm、床面までの深さは約16cmである。

[施設] 柱穴、周溝等は確認できなかった。

[遺物] 図9-4・5・7はいずれもR.L.縄文を施した縄文時代晩期の土器である。3は縄文時代中期のものと思われ、結束第1種とみられる羽状文が展開する。6は底部近くの細片であったものが、付近の遺構外II層土から出土した破片と接合した。器面には木板状工具による縦位の条痕が施され、炭化物が付着している。縄文時代晩期のものと思われる。

[堆積土] 自然堆積と思われる。

[時期] 出土遺物から縄文時代晩期の可能性が考えられる。

第13号堅穴住居跡

[位置] BA~BB-37グリッドで確認されている。確認面の標高は約45.8mである。

[平面形] 不整な円形であるが、木の根の影響もあり必ずしも判然としない。

[壁・床面] 床面は僅かに起伏があり、壁面は緩く外傾して立ち上がる。

[規模] 確認面での大きさは径約300cm、床面までの深さ約27cmである。

[施設] 柱穴、周溝等は確認できなかった。

[遺物] 縄文時代晩期の土器が出土した。図10-8は深鉢形粗製土器で、地文としてR.L.が縦走している。口縁部は横位平行沈線が巡る部分の接合面からきれいに削落している。接合しなかった口縁部破片の中には補修孔をもつものもみられた。9は鉢形土器で、小波状口縁の下には横位平行沈線がみられる。復原破片の約半数が住居覆土中からの出土であり、残りは住居周囲のII層土からの出土である。肩部には貼瘤があり、外面には炭化物が付着する。10・11の器面には縦位の条痕が施され、11の内面には炭化物が付着する。

[堆積土] 自然堆積と思われる。

[時期] 出土遺物から縄文時代晩期の可能性が考えられる。

第11号土坑

- 【位置】 AQ～AR-41グリッドで確認されている。確認面の標高は約40.6mである。
- 【平面形】 不整な方形である。1号掘立柱の周溝と重複しているが、本土坑の方が古い。
- 【断面形】 底面は比較的平坦で、壁面は僅かに外傾して立ち上がる。
- 【規模】 確認面での大きさは長軸約200×短軸約168cm、深さ約35cmである。
- 【堆積土】 自然堆積と思われる。
- 【時期】 詳細な時期は判別不能であるが、縄文土器片が1点出土していること、重複する平安時代の第7号竪穴住居跡及び関連遺構より古いと考えられることから、縄文時代のものと推定した。但し、土師器片も出土しているので断定はできない。

第12号土坑

- 【位置】 AP-41グリッドで確認されている。確認面の標高は約40.0mである。
- 【平面形】 ややいびつな楕円形である。
- 【断面形】 二重構造となっており、南側が深い。壁面は僅かに外傾して立ち上がる。
- 【規模】 確認面での大きさは長軸約97×短軸約65cm、深さ約15cmである。
- 【堆積土】 自然堆積と思われる。
- 【時期】 縄文時代のものと思われる叩き石が出土していることから縄文時代のものと推定したが、土師器も混入しており断定はできない。

第13号土坑

- 【位置】 AQ-41・AP-42グリッドで確認されている。確認面の標高は約40.5mである。
- 【平面形】 ややいびつな楕円形である。
- 【断面形】 底面は比較的平坦で、壁面は緩く外傾して立ち上がる。
- 【規模】 確認面での大きさは長軸約158×短軸約85cm、深さ約26cmである。
- 【堆積土】 自然堆積と思われる。
- 【時期】 縄文時代前期円筒下層式期のものと思われる土器片が2点出土している。単軸絡条体第1A類が施され、胎土には纖維が混入されており同一個体と思われる。それらから縄文時代の遺構と推定したが、土師器片も出土しているので断定はできない。石皿も1点出土している。

第16号土坑

- 【位置】 BA-35グリッドで確認されている。確認面の標高は約45.3mである。尾根頂部付近で長軸を尾根線に平行させている。
- 【平面形】 不整な長楕円形である。所謂溝状土坑に属する。
- 【断面形】 U字状に近い断面形で、壁面は底面付近から直立ぎみに立ち上がり、上半部で外傾して立ち上がる。
- 【規模】 確認面での大きさは長軸約375×短軸約60cm、深さ約70cmである。
- 【堆積土】 自然堆積である。
- 【時期】 遺構の構築時期は明確ではないが、縄文時代後期のものと思われる無文の鉢形土器が出土している。口縁は波状を呈し、残存する2箇所の波頂部の位置から4単位以上になるも

のと考えられる。器面には斜～横方向の調整痕がみられる。非常に薄手で焼成は良好であるが、全体的な作りは雑である。胎土に細砂が僅かに混入する。

第17号土坑

- [位 置] BA-35グリッドで確認されている。確認面の標高は約45.3mである。
- [平面形] ややいびつな円形である。
- [断面形] 底面はほぼ平坦で、壁面は緩く外傾して立ち上がる。
- [規 模] 確認面での大きさは径約68cm、深さ約28cmである。
- [堆積土] 自然堆積である。
- [時 期] 出土した土器片から縄文時代と推定した。図10-19は平口縁で、2条の横位平行沈線を有する。

第18号土坑

- [位 置] AZ-36グリッドで確認されている。確認面の標高は約45.7mである。
- [平面形] ややいびつな円形である。
- [断面形] 底面はほぼ平坦で、両端はほぼ直立に立ち上がる。
- [規 模] 確認面での大きさは径約135cm、深さ約68cmである。
- [堆積土] 自然堆積と思われる。
- [時 期] 遺物が出土していないので断言はできないが、付近にある遺構がいずれも縄文時代のものと推定されること、周辺に分布する遺構外の遺物も縄文時代のものがほとんどであることから、他の時期よりは縄文時代の可能性が高いものと判断した。

(太田原 潤・齋藤 由美子・土岐 耕司)

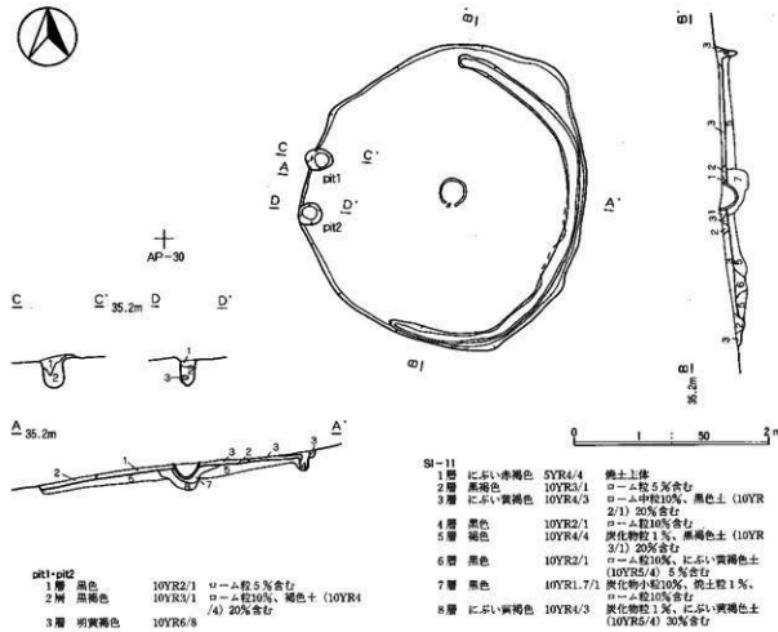


図4 第11号竪穴住居跡

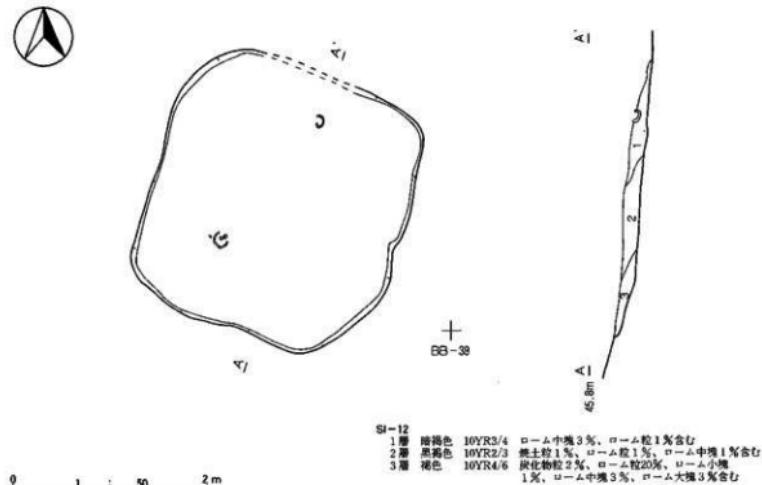


図5 第12号竪穴住居跡

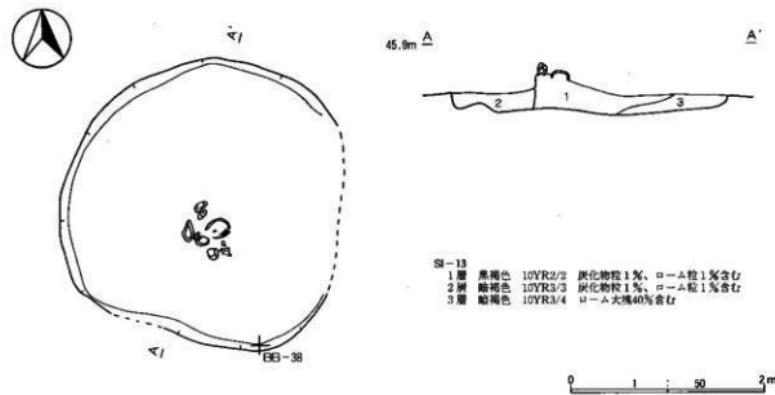


図6 第13号竪穴住居跡

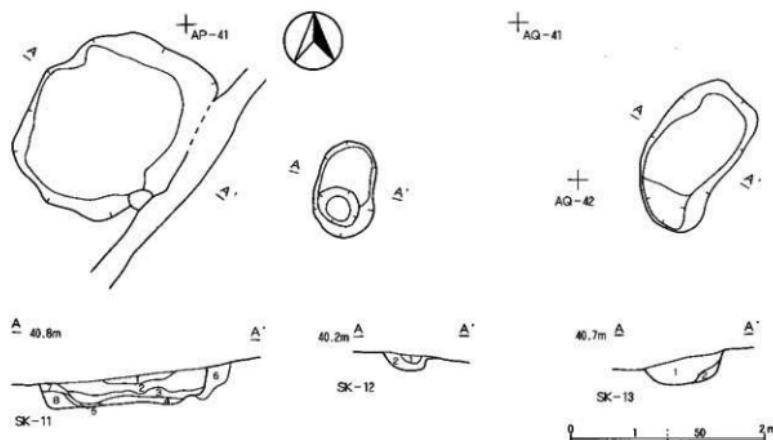
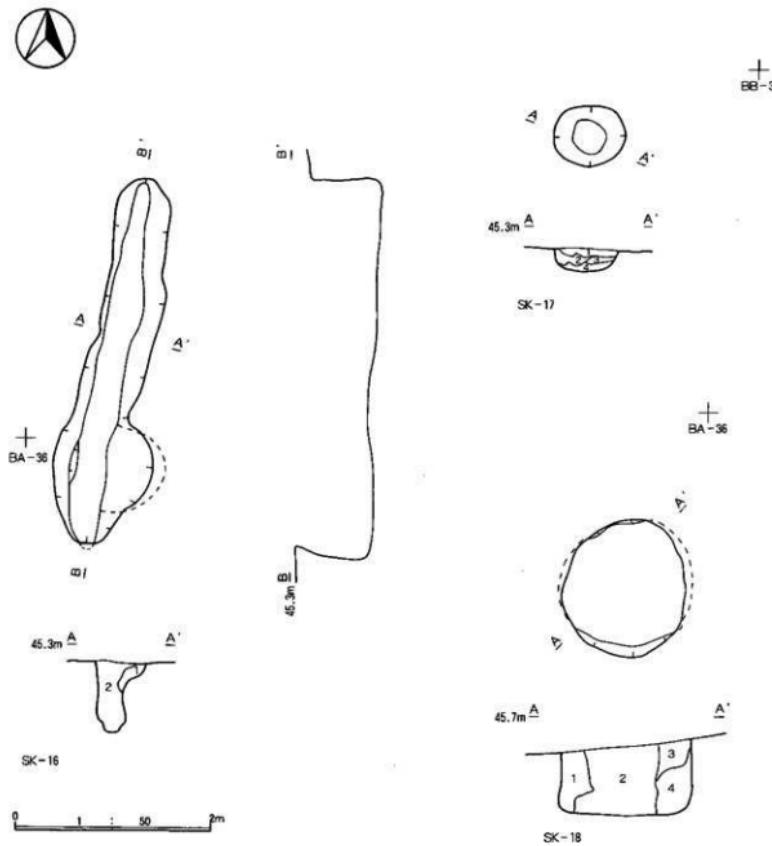


図7 繩文時代土坑 (SK-11~13)



SK-16	褐色	10YR4/4	燒土1%、ローム50%含む
	黒褐色	10YR2/3	焼土1%、ローム粒3%、ローム中塊10%含む
SK-17	褐色	10YR4/6	炭化物2%、ローム粒5%含む
	褐色	10YR4/6	炭化物粒1%、ローム粒3%含む
	灰褐色	10YR5/8	粘土質ローム粒2%含む
	黄褐色	10YR5/8	3層に似るかや赤が帶つてゐる
SK-18	褐色	10YR4/4	ローム粒5%、ローム大塊30%含む
	暗褐色	10YR3/4	炭化物小塊3%、ローム粒5%、ローム中塊5%、ローム大塊5%含む
	褐色	10YR4/4	炭化物粒2%、ローム大塊40%含む
	黄褐色	10YR5/6	炭化物粒1%、ローム大塊50%含む

図8 繩文時代土坑 (SK-16~18)

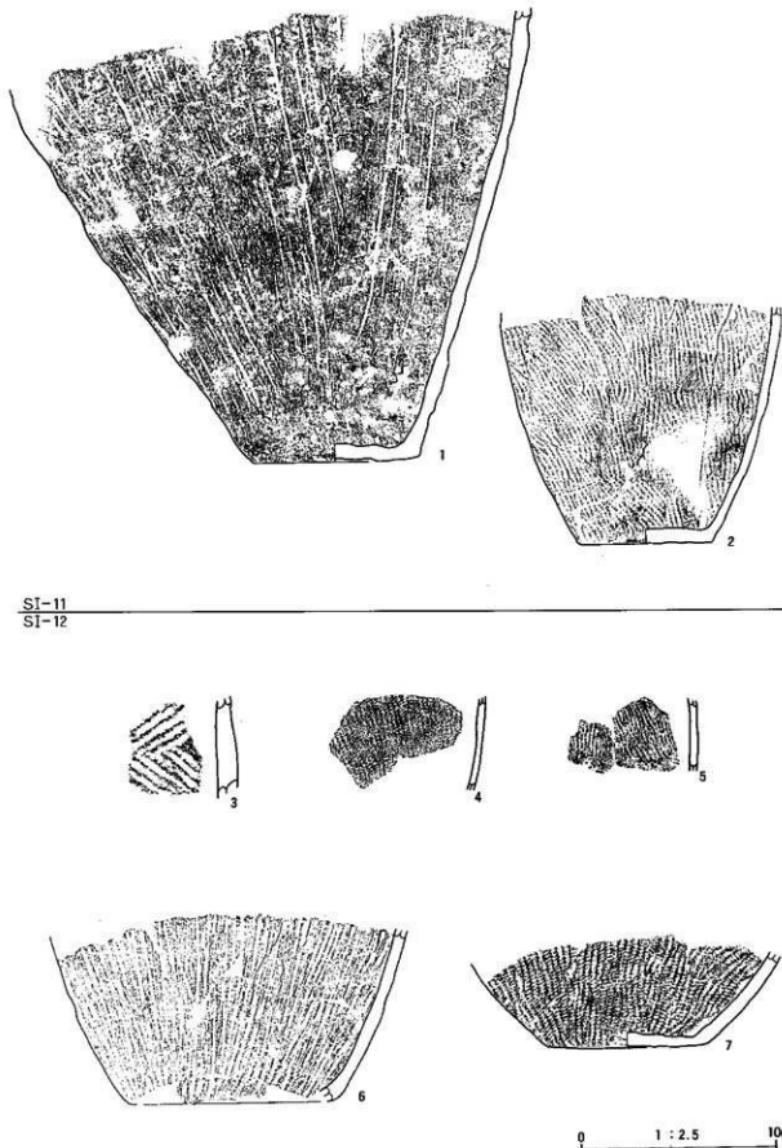


図9 繩文時代遺構内出土遺物 (SI-11・12)

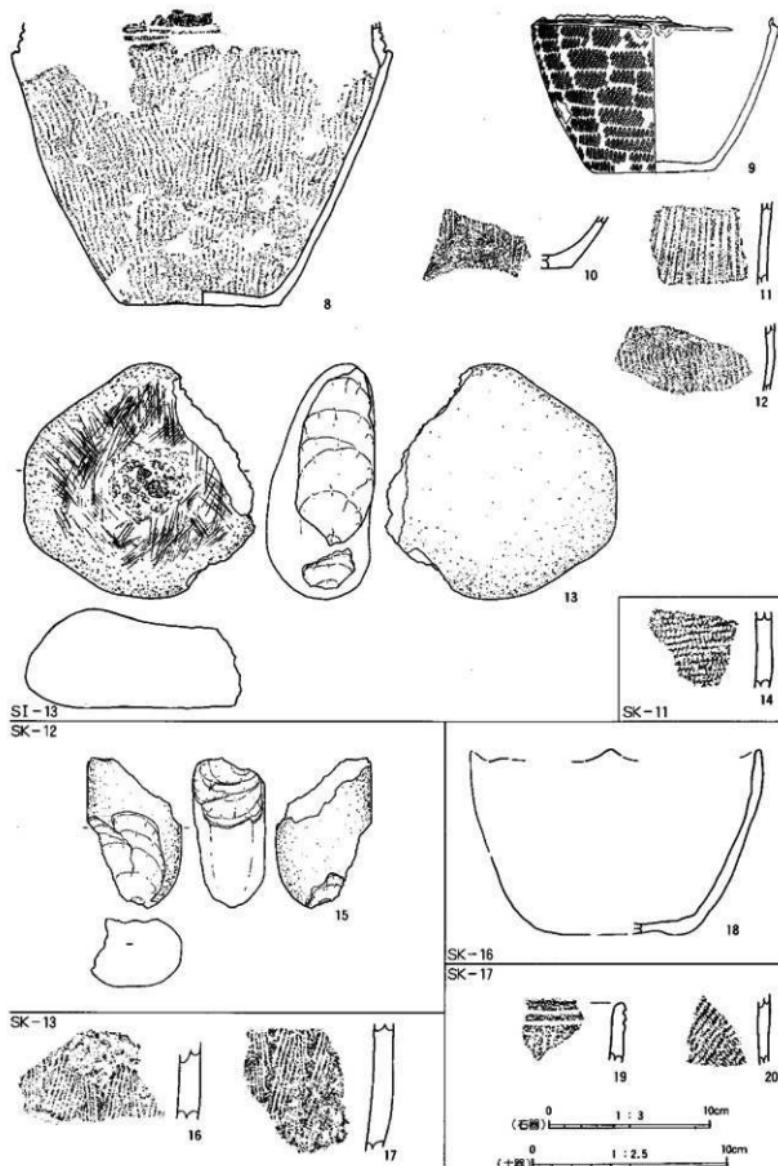


図10 繩文時代遺構内出土遺物 (SI-13・SK-11~13・16・17)

第3節 平安時代の検出遺構と遺構内出土遺物

第1号堅穴住居跡

- 〔位置〕 AI～AJ-41～42グリッドで確認されている。確認面の標高は約37.2mである。
- 〔平面形〕 ややいびつな方形である。西壁に張り出しが見られるが、本住居跡より古い遺構である可能性も考えられる。
- 〔壁・床面〕 床面はほぼ平坦で、両端はほぼ直立する。床面には炭化材、炭化物、焼土が広がっていることから、焼失家屋の可能性が考えられる。
- 〔規模〕 確認面での大きさは長軸約370×短軸約360cm、床面までの深さ約40cmである。
- 〔施設〕 カマドは南壁の中央東寄りに作られる。壁講はほぼ全周に渡って壁際に巡る。カマド西隣と住居北西角にピットが2基確認された。柱穴状のピットは住居北西部に1基のみ確認された。
- 〔遺物〕 土師器甕等が出土している。カマド内及びその周辺に遺物が集中する傾向をみせる。図40-5はカマド中央に底部を上にして設置された状態で出土していることから、支脚として用いられたものと思われる。
- 〔堆積土〕 自然堆積と思われる。白頭山・苦小牧火山灰が挟在する。

第2号堅穴住居跡

- 〔位置〕 AI～AJ-48グリッドで確認されている。確認面の標高は約38.4mである。
- 〔平面形〕 ややいびつな方形である。
- 〔壁・床面〕 床面はほぼ平坦で、壁は緩く外形して立ち上がる。掘り形底面は不整形である。
- 〔規模〕 確認面での大きさは長軸約300×短軸約290cm、確認面から床面までの深さは約20cmである。
- 〔施設〕 カマドは南壁中央やや西寄りに位置する。住居中央から西側に伸びる溝は排水溝の可能性が考えられる。明確な柱穴は確認することができなかった。
- 〔遺物〕 土師器甕等が出土している。
- 〔堆積土〕 自然堆積と思われる。床面付近で白頭山・苦小牧火山灰が検出されている。

第3号堅穴住居跡

- 〔位置〕 AI-43～44・AH-44グリッドで確認されている。確認面の標高は約37.8mである。
- 〔平面形〕 ほぼ長方形である。カマドが2箇所確認されたが、2軒の堅穴住居の重複ではなく、堅穴を共有したままカマドを付け替えたものと推定される。カマドAが新期、カマドBが古期と思われる。
- 〔壁・床面〕 床面はほぼ平坦で、壁面はごく僅かに外傾して立ち上がる。掘り形底面は不整形で、二箇所のカマド付近が深く掘り込まれている。
- 〔規模〕 確認面での大きさは長軸約410×短軸約340cm、確認面から床面までの深さは約50cmである。
- 〔施設〕 2箇所確認されたカマドの内、カマドBは、堅穴の外側にかかる部分は使用時に近い状態を留めているが、内側にかかる部分は削平されていた。カマドA構築時に床面を整形し

直したようであるが、その時にカマドBのソデは床面に近いレベルまで下げられ、それより深かった火床面付近は埋め立てられたものと思われる。僅かに残ったカマドBのソデを切るように周溝が掘られていることから、周溝もカマドA構築時に掘り直されたようである。柱穴状のピットは3箇所確認されたが、配置に規則性も見られず明言はできない。

〔遺物〕 土師器壺、甕等が出土している。

〔堆積土〕 自然堆積と思われる。僅かではあるが、白頭山・苦小牧火山灰が確認されている。

第4号竪穴住居跡

〔位置〕 AT～AU-19～20グリッドで確認されている。確認面の標高は約38.2mである。

〔平面形〕 ほぼ方形であるが、各辺とも直線的ではない。

〔壁・床面〕 床面はほぼ平坦であるが、部分的に若干の段がある。東壁は外傾して立ち上がる。貼り床をした形跡はない。

〔規模〕 確認面での大きさは長軸約330×短軸約300cm、確認面から床面までの深さは約50cmである。

〔施設〕 カマドは南壁中央やや東寄りに位置する。ソデ部分は粘土等で新たに構築したものではなく、地山を掘り残して作ったようである。煙道部分も同様で、地山をトンネル状に掘削し、末端部に煙出し部を設けている。周溝、柱穴等は識別できなかった。

〔遺物〕 カマド内から土師器壺、鉢が、カマド外からは土師器甕片等が出土している。

〔堆積土〕 自然堆積と思われる。堆積土中に白頭山・苦小牧火山灰が含まれる。

第5号竪穴住居跡

〔位置〕 AR～AS-22～23グリッドで確認されている。確認面の標高は約36.5mである。

〔平面形〕 ほぼ長方形である。

〔壁・床面〕 床面はほぼ平坦で、住居東半の壁はほぼ直立ぎみに、北壁は外傾しながら立ち上がる。南東角付近は部分的にオーバーハングする。

〔規模〕 確認面での大きさは長軸約430×短軸約420cm、確認面から床面までの深さは約70cmである。

〔施設〕 カマドは南壁東寄りに位置する。煙道は地山をトンネル状に掘り抜いたものである。周溝はカマド付近を除いてほぼ全周に巡る。住居南西角の小ピットが柱穴である可能性も考えられるが明確ではない。

〔遺物〕 カマド付近を中心に土師器壺、甕等が出土している。このうち壺1点は内面黒色処理のものである。他に須恵器甕片、砥石も出土している。

〔堆積土〕 自然堆積と思われる。

第6号竪穴住居跡

〔位置〕 AS～AT-32～33グリッドで確認されている。確認面の標高は約38mである。

〔壁・床面〕 長方形である。

〔断面形〕 床面は比較的平坦であるが、掘り形底面は地山の傾斜を反映している。住居東側の壁面はほとんど失われているが、西壁は緩く外傾して立ち上がる。

〔規模〕 確認面での大きさは長軸約350×短軸約330cm、確認面から床面までの深さは約30cmである。

ある。

[施設] カマドは南壁西寄りに位置する。周溝、柱穴等は確認されていない。

[遺物] 土師器坏が出土している。

[堆積土] 自然堆積と思われる。

第7号竪穴住居跡

[位置] AQ～AS-39～40グリッドで確認されている。確認面の標高は約40.8mである。

[平面形] 方形である。

[壁・床面] 住居が構築されたのは緩傾斜地であるが、標高の低い北西側は壁面がほとんど遺存していない。反対側の壁はごく僅かに外傾して立ち上がる。床面は平坦であるが、掘り形底面は地山の傾斜を反映している。

[規模] 確認面での大きさは、長軸約640×短軸630cm前後、確認面から床面までの深さ約30cmである。

[施設] カマドは南壁東寄りに位置する。周溝は住居南東角から北壁中央付近まで巡っているのが確認されている。住居中央付近にも溝が確認されたが、これは間仕切りの痕跡である可能性も考えられる。柱穴は4基確認されている。Pit 4とした柱穴内からは柱材が出土した。住居に使用された柱が、柱穴に設置された状態で検出された例として特筆される。これに関しては第5章第2節で若干の考察を試みた。住居内床面からは炭化材、炭化物、焼土が出土していることから、焼失家屋であった可能性が考えられる。炭化材は住居の構築材であった可能性を考え、それらの一部の年代測定、樹種同定を試みた。分析結果は第4章第1節、第2節に示した。カマド西側で列状に検出された炭化材は細越遺跡や三内遺跡で検出されたような（青森県教育委員会 1979、1978）壁材である可能性が高い。

[遺物] 土師器坏、甕等が出土している。坏のうち3個体は内面黒色処理のもの、1点は灯明具として用いられた可能性が考えられるものである。他に須恵器坏も出土したが、それには刻書がみられる。カマド付近から僅かに擦痕がみられる円蹠も出土している。

[堆積土] 自然堆積と思われる。白頭山・苦小牧火山灰が認められる。

第1号溝跡（第7号竪穴住居跡関連遺構）

[位置] AP～AQ-37～40・AR～AT-38～41グリッドで確認されている。確認面の標高は最高位で42.1mである。第7号竪穴住居跡に付随する溝跡と思われる。

[平面形] 2条に分かれるが、第7号竪穴住居跡を囲むように検出された。住居の北側は部分的に途切れ、南側は大きく開口し、その間に第1号掘立柱建物跡が位置する。東側の溝をa、西側の溝をbと仮称する。a溝の末端部は土坑状に深く掘り込まれている。

[断面形] ほぼU字状を呈し、底面にはわずかに平坦部がある。底面の幅はa溝が狭いのに対し、b溝は広い。

[遺物] 土師器坏が出土している。刻書のある須恵器甕片が出土し、第10号土坑の破片と接合している。図示した以外にも土師器坏、甕の小片が出土している。

[堆積土] 自然堆積と思われる。白頭山・苦小牧火山灰が含まれる。

第1号掘立柱建物跡（第7号竪穴住居跡関連遺構）

【位置】 AP～AQ-40～41・AR-41グリッドで確認されている。確認面の標高は40.5mである。

第7号竪穴住居跡に付随する掘立柱建物跡と思われる。

【平面形】 長方形で、第7号竪穴住居跡のカマド側に隣接し、第1号溝跡の開口部に位置する。

【施設】 8基の柱穴が確認された。標高が高い側の東側には周溝が巡る。

【時期】 図示できないが、Pit 5内から須恵器壺片が出土している。柱穴内ではないが、建物の範囲内からは土師器壺片等も出土している。

第8号竪穴住居跡

【位置】 AU-21～22グリッドで確認されている。確認面の標高は約38.5mである。

【平面形】 本来的には方形と思われるが、標高の低い西側の半分以上は失われている。第9号竪穴住居跡と重複している。本住居跡の方が新しいと思われるが明確ではない。

【壁・床面】 残存する床面はほぼ平坦である。壁面の遺存状況はよくないが、残存部はほぼ直立する。

【規模】 確認面での大きさは南北約530cm、確認面から床面までの深さ約20cmである。

【施設】 カマドは確認されなかったが本来はあったものと推定される。浅い周溝が巡り、柱穴状の小ピットは周溝上に4基、床面に2基確認された。

【遺物】 遺物は出土しなかった。

【堆積土】 自然堆積と思われる。

第9号竪穴住居跡

【位置】 AU-22～23グリッドで確認されている。確認面の標高は約38.5mである。

【平面形】 本来的には方形と思われるが、標高の低い西側の半部以上は失われている。第8号竪穴住居跡と重複している。本住居跡の方が古いと思われるが明確ではない。

【壁・床面】 残存する床面はほぼ平坦である。壁面は僅かに残る程度であるが、残存部はほぼ直立する。

【規模】 確認面での大きさは南北で500cm以上になるものと思われる。

【施設】 カマドは確認されなかったが本来はあったものと推定される。住居南東角で柱穴状の小ピットが確認された。

【遺物】 遺物は出土しなかった。

【堆積土】 自然堆積と思われる。

第10号竪穴住居跡

【位置】 AS～AT-24グリッドで確認されている。確認面の標高は約36.8mである。

【平面形】 ほぼ長方形である。

【壁・床面】 床面は比較的平坦で、壁面は僅かに外傾して立ち上がる。掘り形底面は起伏がある。

【規模】 確認面での大きさは長軸約330×短軸約250cm、確認面から床面までの深さは約20cmである。

【施設】 カマドは北壁東端に位置する。周溝は北西角付近から南東角まで巡る。柱穴は確認されなかった。

- 〔遺物〕 土師器鉢、須恵器坏等が出土している。須恵器坏には刻書がみられる。
 〔堆積土〕 自然堆積と思われる。

第1号土坑

- 〔位置〕 AK～AL-47グリッドで確認されている。確認面の標高は約38.2mである。
 〔平面形〕 不整形である。
 〔断面形〕 底面はほぼ平坦で、壁面は緩く外傾して立ち上がる。
 〔規模〕 確認面での大きさは長軸約310×短軸約140cm、深さ17cmである。
 〔堆積土〕 自然堆積と思われる。白頭山・苦小牧火山灰が確認された。
 〔時期〕 遺物は出土していないが、火山灰の堆積状況から平安時代のものと推定される。

第2号土坑

- 〔位置〕 AQ-35～36グリッドで確認されている。確認面の標高は約37.0mである。
 〔平面形〕 ややいびつな円形である。
 〔断面形〕 底面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。
 〔規模〕 確認面での大きさは径72cm、深さ17cmである。
 〔堆積土〕 自然堆積と思われる。
 〔時期〕 遺物が出土していないため明言はできないが、周辺で確認された遺構、遺物から平安時代の可能性を考えた。

第3号土坑

- 〔位置〕 AQ-36グリッドで確認されている。確認面での標高は約36.6mである。
 〔平面形〕 ややいびつな円形である。
 〔断面形〕 底面は比較的平坦で、両端は外傾して立ち上がる。
 〔規模〕 確認面での大きさは径71cm、深さ12cmである。
 〔堆積土〕 自然堆積と思われる。
 〔時期〕 遺物が出土していないため明言はできないが、周辺で確認された遺構、遺物から平安時代の可能性を考えた。

第4号土坑

- 〔位置〕 AP-36グリッドで確認されている。確認面の標高は約36.2mである。
 〔平面形〕 不整な橢円形である。
 〔断面形〕 底面に若干起伏があり、東の壁はほぼ直立、他は若干外傾して立ち上がる。
 〔規模〕 確認面での大きさは長軸約75×短軸約55cm、深さ約29cmである。
 〔堆積土〕 自然堆積と思われる。
 〔時期〕 遺物が出土していないため明言はできないが、周辺で確認された遺構、遺物から平安時代の可能性を考えた。

第6号土坑

- 〔位置〕 AU-28グリッドで確認されている。確認面の標高は約37.7mである。
 〔平面形〕 不整な橢円形である。
 〔断面形〕 底面はほぼ平坦であるが緩く傾斜しており、壁面はほぼ直立して立ち上がる。

- 〔規模〕 確認面での大きさは長軸約85×短軸約40cm、深さ約10cmである。
〔堆積土〕 自然堆積と思われる。白頭山・苦小牧火山灰が検出された。
〔時期〕 遺物は出土していないが、火山灰の堆積状況から平安時代のものと推定される。

第7号土坑

- 〔位置〕 AQ-42グリッドで確認されている。確認面の標高は約40.8mである。
〔平面形〕 不整な椭円形である。
〔断面形〕 底面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。
〔規模〕 確認面での大きさは長軸約75×短軸約62cm、深さ約23cmである。
〔堆積土〕 自然堆積と思われる。
〔時期〕 遺物、火山灰等が検出されず時期決定の決め手を欠く。

第8号土坑

- 〔位置〕 AP～AQ-42グリッドで確認されている。確認面の標高は約40.6mである。
〔平面形〕 ややいびつな椭円形である。
〔断面形〕 底面には起伏があり、壁面の立ち上がりも部位により異なる。
〔規模〕 確認面での大きさは長軸約74×短軸約56cm、深さ約17cmである。
〔堆積土〕 自然堆積と思われる。
〔遺物〕 遺物、火山灰等が検出されず時期決定の決め手を欠く。

第9号土坑

- 〔位置〕 AQ-42グリッドで確認されている。確認面の標高は約40.8mである。
〔平面形〕 不整な円形である。第10号土坑と重複しているが、本土坑の方が新しい。
〔断面形〕 底面は比較的平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。
〔規模〕 確認面での大きさは径約120cm、深さ約50cmである。
〔堆積土〕 自然堆積と思われる。
〔時期〕 遺物、火山灰等が検出されず時期決定の決め手を欠く。

第10号土坑

- 〔位置〕 AP～AQ-42グリッドで確認されている。確認面の標高は約40.8mである。
〔平面形〕 不整形である。第9号土坑と重複しているが、本土坑の方が古い。
〔断面形〕 底面は比較的平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。
〔規模〕 確認面での大きさは長軸約200×短軸約134cm、深さ約30cmである。
〔堆積土〕 自然堆積と思われる。
〔時期〕 刻書がみられる須恵器甕に接合する口縁部片が出土していることから平安時代と推定した。

第14号土坑

- 〔位置〕 AQ-42～43グリッドで確認されている。確認面の標高は約41.4mである。
〔平面形〕 不整形である。
〔断面形〕 底面、壁面とも不整形である。
〔規模〕 確認面での大きさは長軸約340×短軸約100cm、深さ約30cmである。

[堆積土] 自然堆積と思われる。

[時期] 遺物、火山灰等が検出されず時期決定の決め手を欠く。

第15号土坑

[位置] BH-21グリッドで確認されている。確認面の標高は約46.1mである。尾根頂部付近で平安期のものと判断できたのは本遺構のみである。

[平面形] ややいびつな円形である。

[断面形] 底面はサラダボール状を呈する。

[規模] 確認面での大きさは径約105cm、深さ約24cmである。

[堆積土] 自然堆積と思われる。白頭山・苦小牧火山灰が検出された。

[時期] 遺物は出土していないが、火山灰の堆積状況から平安時代のものと推定した。

(太田原 潤・斎藤 由美子)

第4節 その他の検出遺構

第1号敷石遺構

[位置] AK-37、AL-35~37、AM-34~36グリッドで確認されている。谷から平坦面に上がるための斜面部において確認された。

[平面形] 道路状に伸びる。2列並行している様子が伺えるが、東側の列は断続的である。

[断面形] 掘り込みや整地の痕跡は確認されず、疊が地面にめり込んでいる感じであった。

[規模] 長軸は約14.5m、短軸は約3mである。敷石の構成疊はコブシ大前後の大きさを主体とし、人頭大に近いものも散見される。細疊も多量に含まれる。

[堆積土] 地表面直下で確認されている。

[時期] 繩文時代の配石遺構である可能性も考えたが、遺跡内に本来的に存在しない砂疊が多量に含まれることから、疊のみの運搬ではなく、疊と砂疊が混じった状態で搬入されたものと推定される点、持ち込まれた疊の大きさ、形態とも選択性が高くなかった点、配置にも規則性が見られない点、確認面が地表面直下である点等から、繩文時代の配石遺構である可能性は低いものと思われる。疊の列が轍に沿うように伸びる点、疊が確認されたのは比較的急な斜面部のみである点、演習場内の道路の斜面部に、しばしば同じような構成の疊が散かれている点、周囲から砲弾が採集されている点等から考えると、断言はできないが極めて新しいものである可能性も考えられる。

第1号焼土

図示しなかったが、AK-45グリッド付近で焼土が確認されている。周囲との境界は不明瞭で、掘り込みも確認できなかった。類似した焼土は、本遺跡の第7号竪穴住居跡と同様の外周溝と掘立柱建物が付随する竪穴住居跡が確認された遺跡でしばしば検出される。浪岡町羽黒平(1)遺跡、同野尻(1)遺跡で報告された焼土遺構も同種のものと思われるが(青森県教育委員会 1995・96、1998)、前者では遺構や火山灰との切り合い関係により平安期の遺構に先行するものであることが確認されている。

集落形成直前の開地、焼畑、建物火災、焚き火、落雷、野火等の人为的、自然的要因がいくつか考えられるが、その性格は不明である。今回その由来を探る一助としてプラントオバールによる分析を試みた。分析に供した試料は次のとおりである。

No.1～No.4 図2の基本層序のI層～IV層に対応。

No.5 焼土と同一面でその分布範囲に隣接するAJ-45グリッドの黒色土。

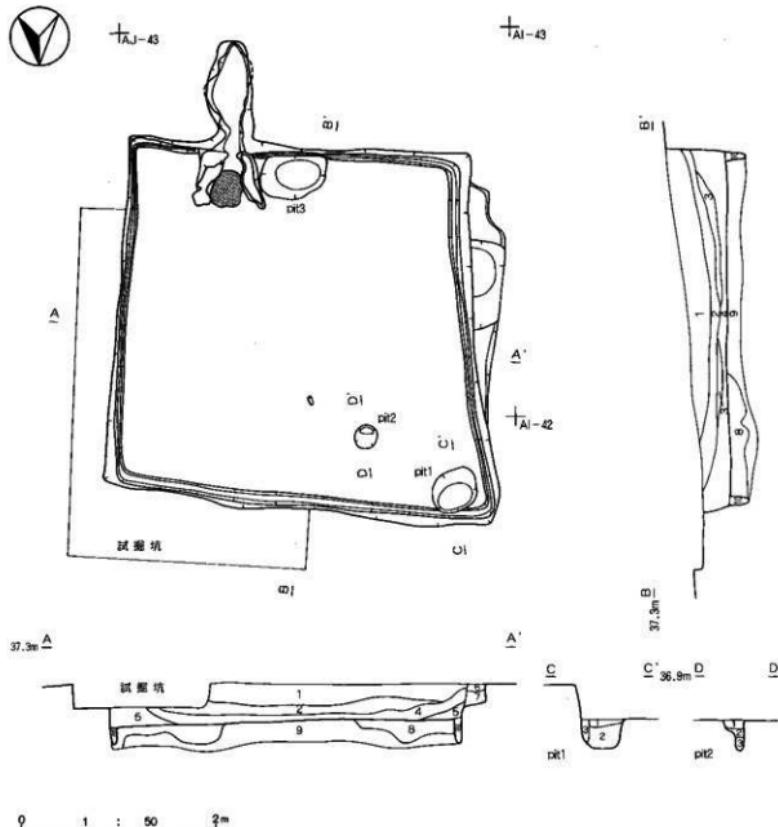
No.6 AK-45グリッド内の純度の高い焼土。

No.5は焼土(No.6)と同時期、同地区の比較試料、No.1～No.4は同地区における時期毎の変化を知るための比較試料である。

分析の詳細は第4章第3節に譲るが、各試料ともクマザサ属が卓越し、ススキ属も高密度であることがわかった。これは現在の環境とほぼ共通するものと思われ、この付近の環境が長い間大きな変化がなかったことを意味するものと思われる。No.6の焼土も基本的にはそれらと同じであるが、それにヨシ属が加わる。これは焼土部分のみの特徴で、分析によると周辺からの混入の可能性が考えられるものとのことである。分析結果に加えて、焼土の分布する範囲が不整形で掘り込みの痕跡もなく、地形的にも周辺に比べて若干低いことを考え合わせると、この焼土は、その場で焚かれた火に由来するのではなく、周辺部から流れ込んでそこに堆積したものである可能性が考えられる。流れ込みであるならばその起源地はより標高の高い場所に求められるが、ヨシ属のプラントオバールが含まれていたとなると東の尾根側からの流れ込みとは考えがたく、湿地的な環境がある谷の谷頭側、即ち南側からの流れ込みと考えられる。従って、自然か人为かは不明だが、本遺跡の南側で何らかの要因で焼土が形成されたものと推定される。

羽黒平(I)遺跡、野尻(I)遺跡等で報告された焼土遺構の検出状況も本遺跡と共通する様子が伺えたことから、この種の焼土は、遺構とするよりも流れ込みのものと認識し、その由来を別途検討すべきものかも知れない。

(太田原 潤)



SI-01	
1層	黒色
2層	黒色
3層	黒色
4層	黒褐色
5層	黒褐色
6層	黒褐色
7層	褐色
8層	褐色
9層	黄褐色
10層	黒褐色
pit1	
1層	黒褐色
2層	褐色
3層	黒褐色
pit2	
1層	にぶい黄褐色
2層	にぶい黄褐色
3層	にぶい黄褐色

10YR1.7/1 ローム・中粒1%含む
10YR2/1 ローム・粒10%含む
10YR1.7/1 ローム・粒1%含む
10YR1/2 水化粘土粒20%、ローム・中粒20%、B-Tm火山灰大塊5%含む
10YR3/2 水化粘土粒5%、ローム・中粒20%含む
10YR3/2 黒褐色(10YR3/2) 30%含む
10YR4/4 黑褐色土(10YR4/2) 30%含む
10YR4/4 ローム・中粒30%、黒色土3%含む
10YR5/6 (粘土)
10YR5/1 ローム・小塊1%、ローム・中粒5%含む
10YR2/2 植被小塊1%、ローム・中粒3%、黄土3%含む
10YR4/4 ローム・中粒10%含む
10YR2/1 ローム・小塊1%、ローム・中粒5%含む
10YR6/4 ローム・中粒5%、反葉擾色土(10YR4/2)、黒色土(10YR2/1)含む
10YR6/4 ローム・中粒30%、黒色土含む
10YR6/4 ローム・小塊10%含む

図11 第1号竪穴住居跡

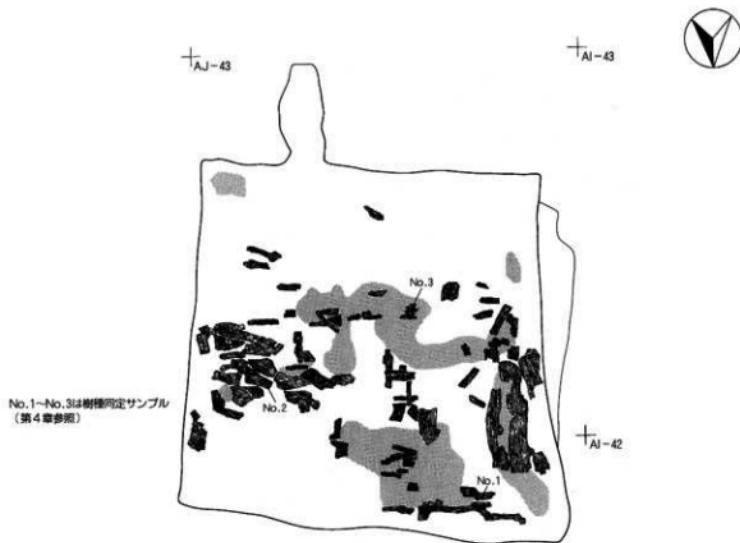


図12 第1号竪穴住居跡炭化材等出土状況

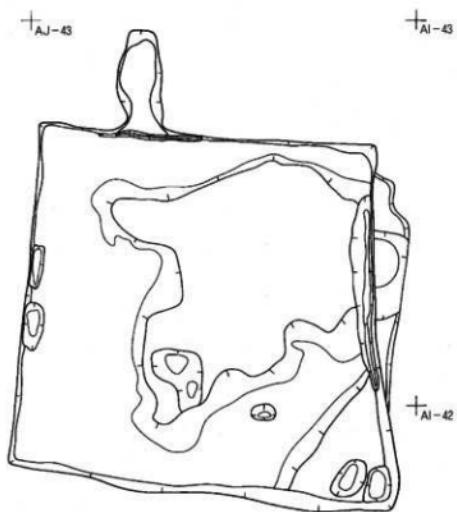
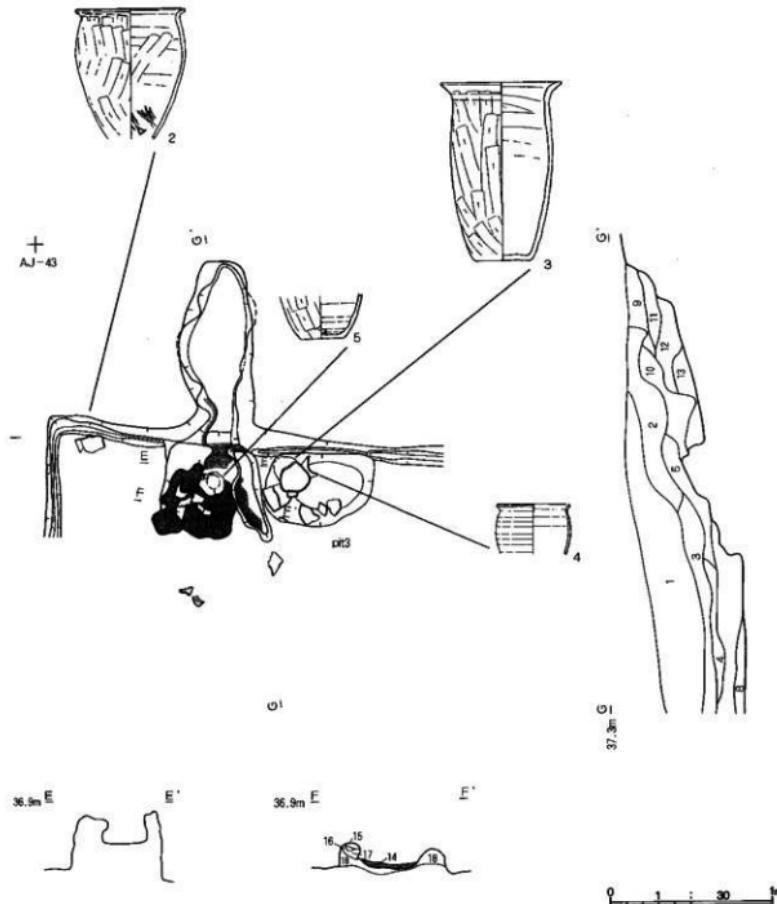


図13 第1号竪穴住居跡掘り形



SI-01 カマド

- | | | | |
|-----|--------|-----------|---|
| 1層 | 黒色 | 10YR1.7/1 | ローム中粒5%、SI-01の1層に対応 |
| 2層 | 黒褐色 | 10YR2/2 | ローム粒10%含む |
| 3層 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 炭化物粒1%、ローム小粒5%含む、SI-01の2層に対応 |
| 4層 | 黒色 | 10YR1.7/1 | 炭化物粒1%、燒土1%、ローム粒1%含む、SI-01の3層に対応 |
| 5層 | 暗褐色 | 10YR2/3 | 炭化物粒5%、B-Tm灰山灰小粒30%、ローム中粒1%含む |
| 6層 | にぶい黄褐色 | 10YR4/3 | 炭化物粒5%、燒土小粒1% |
| 7層 | 明赤褐色 | SYR5/6 | 燒度主体、ローム小・中粒10%、ローム小・中塊10%含む |
| 8層 | 黒褐色 | 10YR3/1 | 燒土小・中粒20%、ローム小・中粒5%、ローム小塊1%含む |
| 9層 | 灰黄褐色 | 10YR4/2 | 燒土主體、ローム小・中粒10%、ローム小・中塊5%含む |
| 10層 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 燒土中塊15%、ローム小・中粒10%、ローム小塊10%含む |
| 11層 | 黒褐色 | 10YR2/2 | ローム小・中粒15%、ローム小・中塊20%含む |
| 12層 | 黒褐色 | 10YR2/2 | ローム小粒20%含む |
| 13層 | 黒褐色 | 10YR3/2 | 燒土中・大塊10%、ローム中・中粒20%、ローム中・大塊10%含む |
| 14層 | 赤褐色 | 2.5YR4/6 | 火床面(焼成の焼土)、黒色土2%含む |
| 15層 | 赤褐色 | 2.5YR4/2 | 燒土主體 |
| 16層 | 明赤褐色 | SYR5/6 | 燒土主體、明赤褐色土(2.5YR5/6)含む |
| 17層 | 暗褐色 | 10YR3/2 | 燒土3%、炭化物3%含む |
| 18層 | 明黄褐色 | 10YR6/6 | 燒土主體、燒土中塊10%、にぶい黄褐色土(10YR5/4)3%、黒色土5%含む |

図14 第1号竪穴住居跡カマド

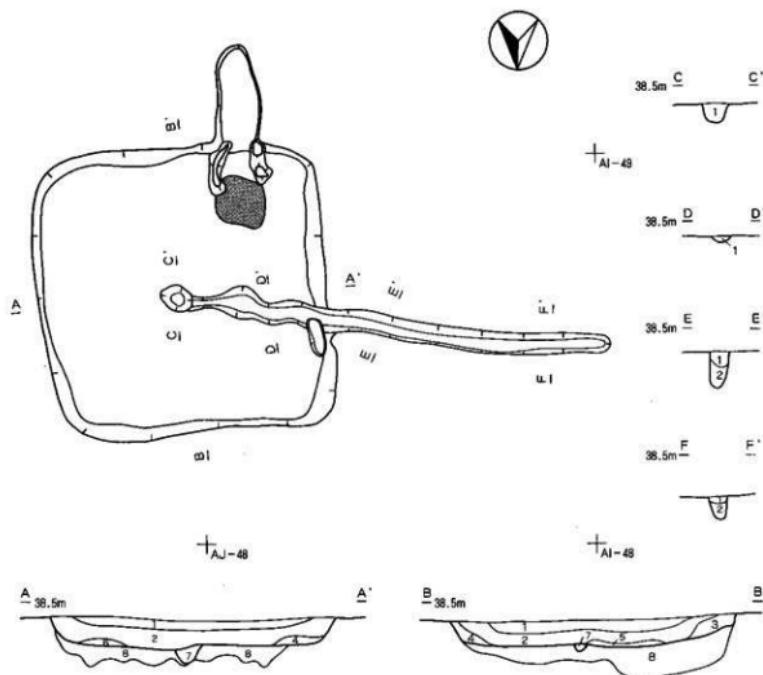


図15 第2号竪穴住居跡

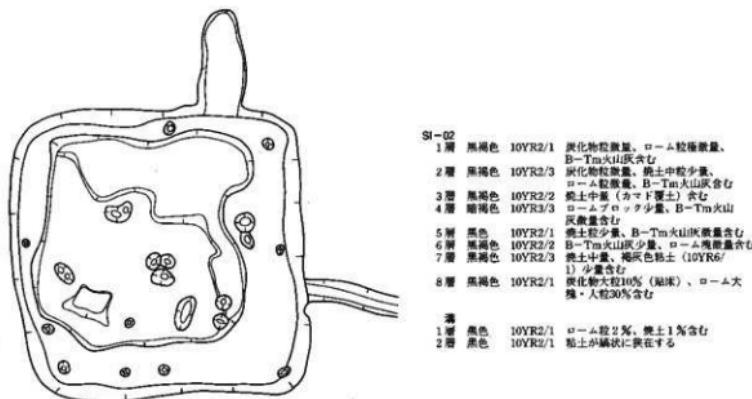
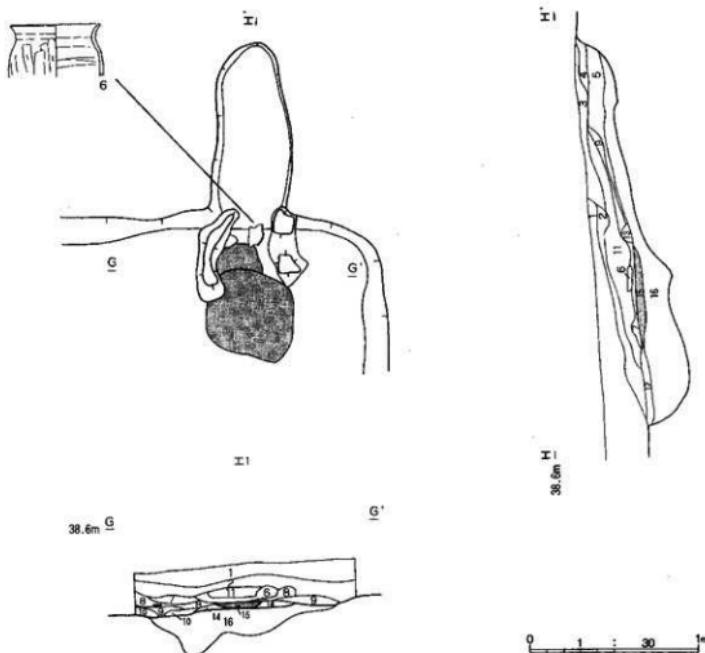


図16 第2号竪穴住居跡掘り形



SI-02カマド

1層	栗色	10YR2/1 塗化物粒状量、ローム粒数量含む。SI-02の1層に対応。
2層	栗褐色	10YR2/2 煉土粒少量、粘土（10YR6/2灰黄褐色）ブロック状に小量含む
3層	栗褐色	10YR3/2 塗化物粒少量、粘土（10YR6/2灰黄褐色）中量含む
4層	栗色	10YR2/1 煉土小粒10%、ローム小粒10%含む
5層	栗褐色	10YR3/1 ローム小粒20%含む
6層	赤褐色	5YR4/6 混土層
7層	栗褐色	10YR2/6 塗化物粒5%、煉土粒5%含む
8層	栗褐色	10YR2/2 ローム粒5%含む（鉛鉱）
9層	明栗褐色	10YR7/6 塗化物粒1%、煉土中塊10%、黒褐色土（10YR3/1）40%含む
10層	栗褐色	10YR2/6 ローム小粒5%含む
11層	栗褐色	10YR3/1 煉土中塊10%、ローム大粒20%含む（天井部崩落土？）
12層	栗褐色	10YR2/2 煉土中塊7%、ローム中塊5%含む（カマド壁土）
13層	栗褐色	10YR2/2 煉土中塊5%、粘土（10YR5/1）中塊20%含む
14層	にじい青褐色	10YR6/3 煉土大粒10%、褐瓦色土（10YR4/1）20%含む（カマド袖部分）
15層	赤褐色	5YR4/6 大床面
16層	赤色	10YR2/1 塗化物大粒10%、ローム大塊・大粒30%含む（貼床）

図17 第2号堅穴住居跡カマド

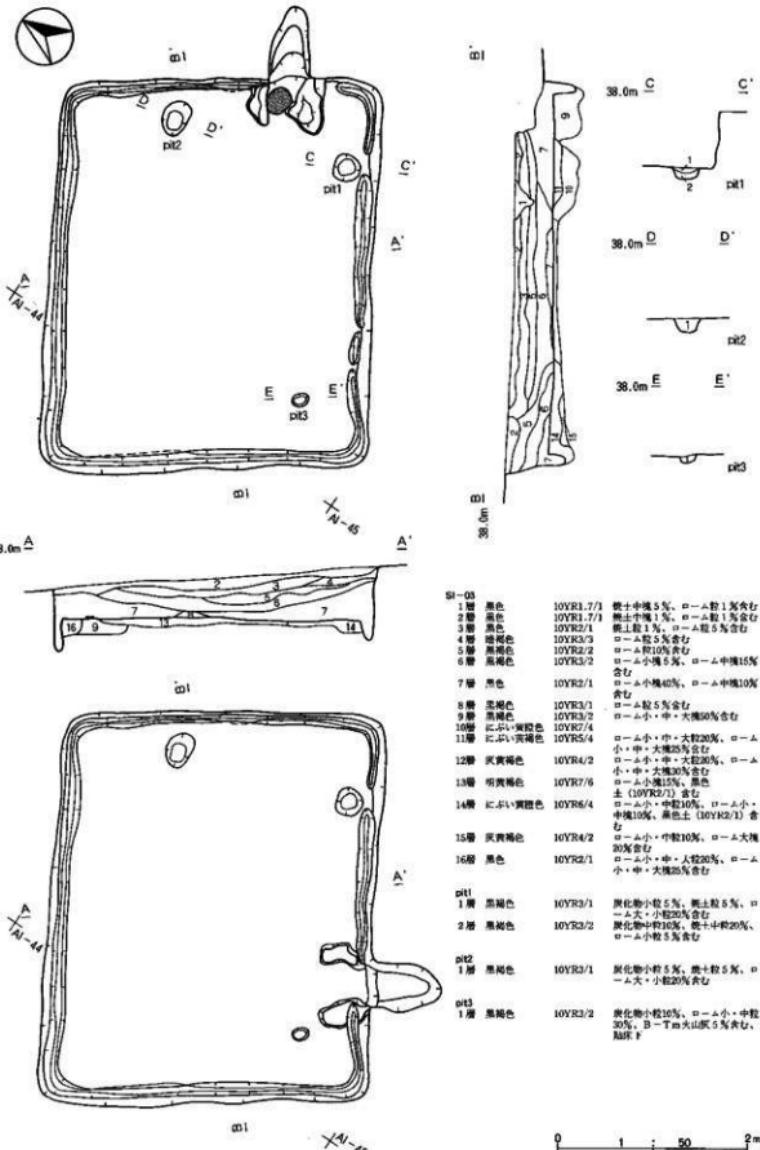


図18 第3号竪穴住居A(上)・B(下)

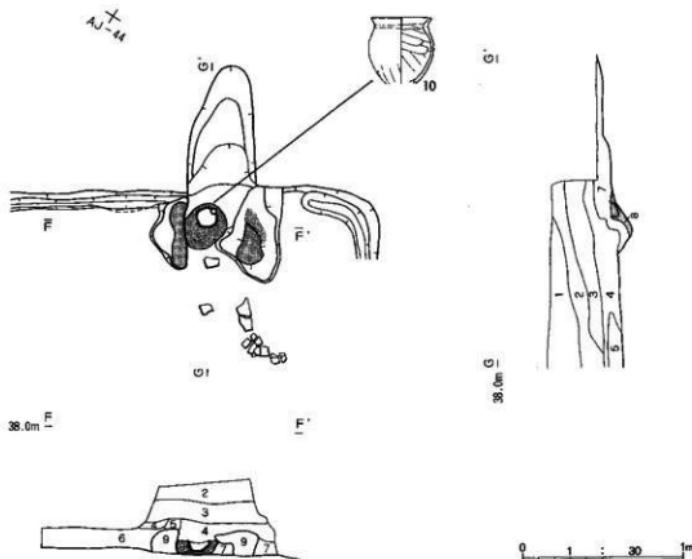


図19 第3号竪穴住居跡マドA

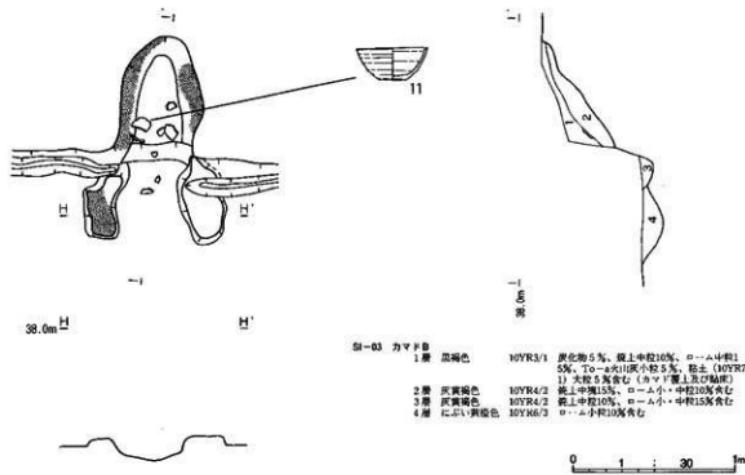


図20 第3号竪穴住居跡マドB

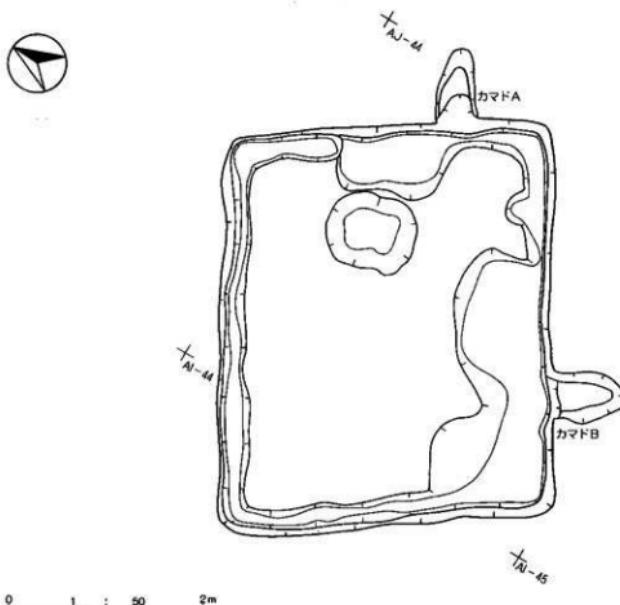


図21 第3号竪穴住居跡掘り形

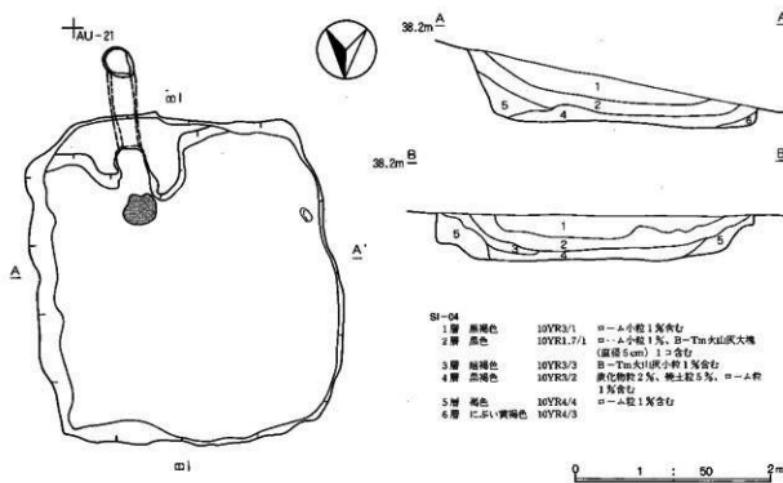


図22 第4号竪穴住居跡

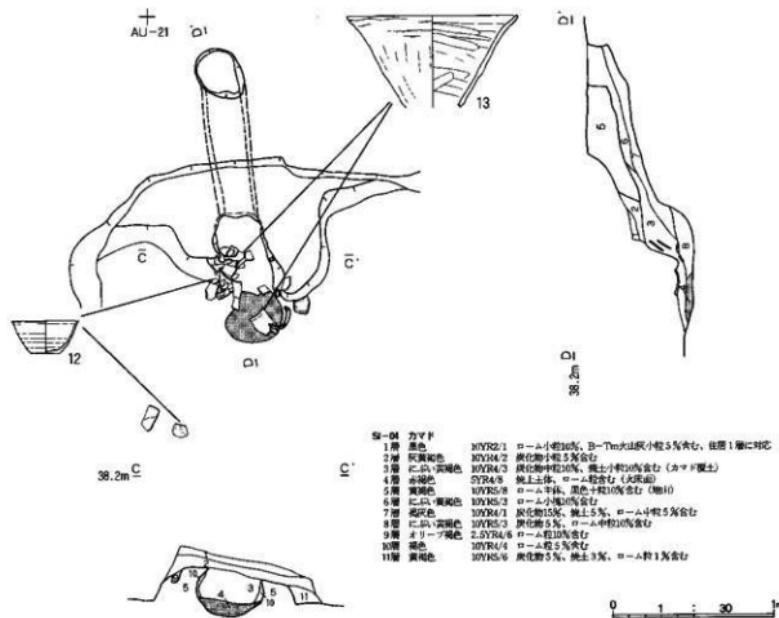
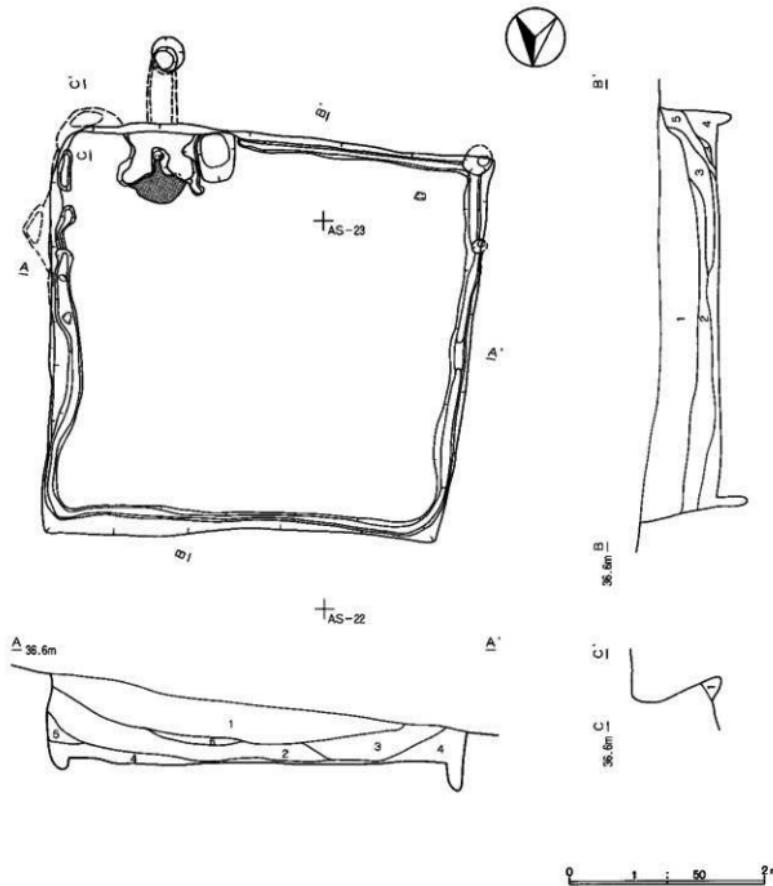


図23 第4号竪穴住居跡力マド



SI-05
 1 壁 黒色 10VR2/1 煙土中粒5%、ローム小粒5%含む
 2 壁 淡黄褐色 10YR4/2 煙化物小粒5%、ローム中粒10%含む
 3 壁 淡褐色 10YR4/2 煙化物小粒10%、ローム中粒15%、火山灰小粒10%含む
 4 壁 褐灰色 10YR4/1 煙化物小粒10%、ローム小粒20%含む
 5 刷 黑褐色 10YR3/2 ローム中粒10%含む
 6 刷 黑褐色 10YR3/1 煙化物小粒5%、含む

pit
 1 壁 黑褐色 10YR3/2 煙化物小粒5%、ローム中粒10%、黑色土(10VR2/1) 小粒15%含む

図24 第5号竪穴住居跡

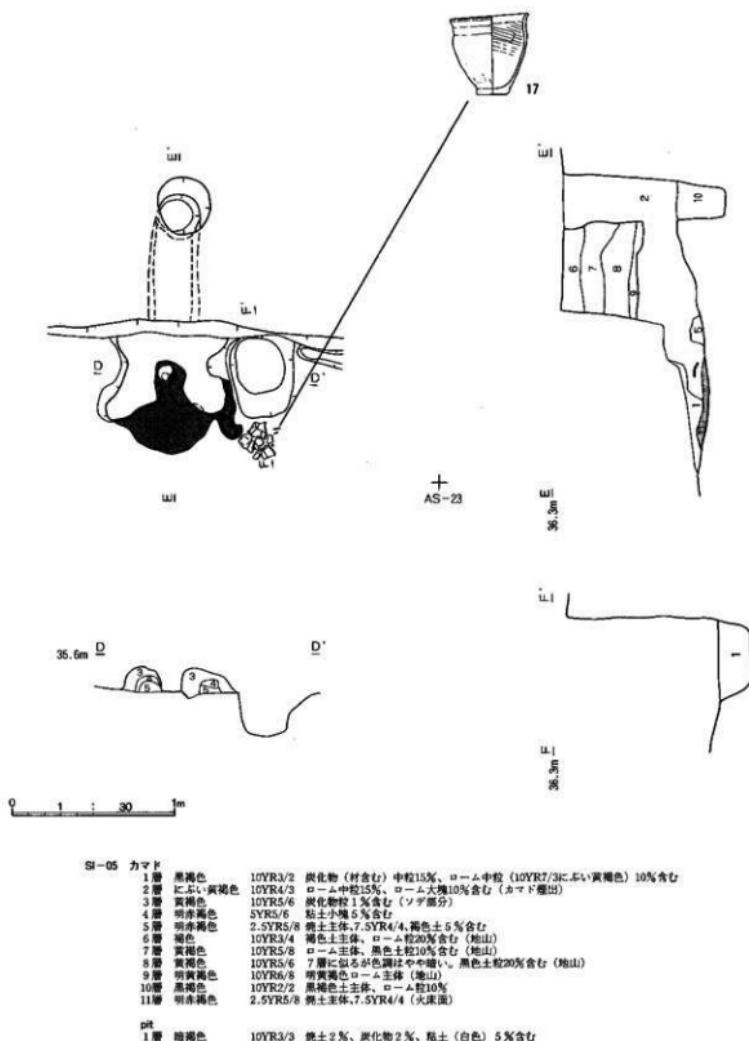


図25 第5号竪穴住居跡カマド

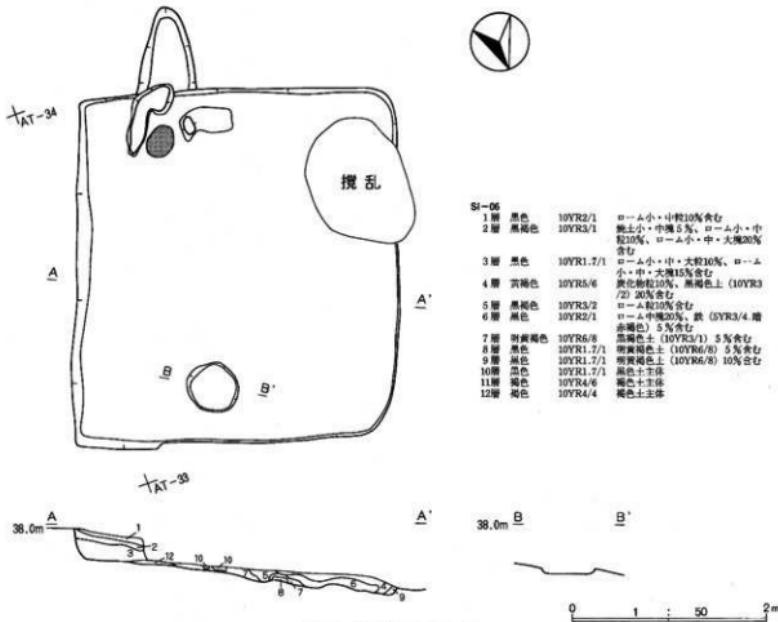


図26 第5号豊穴住居跡

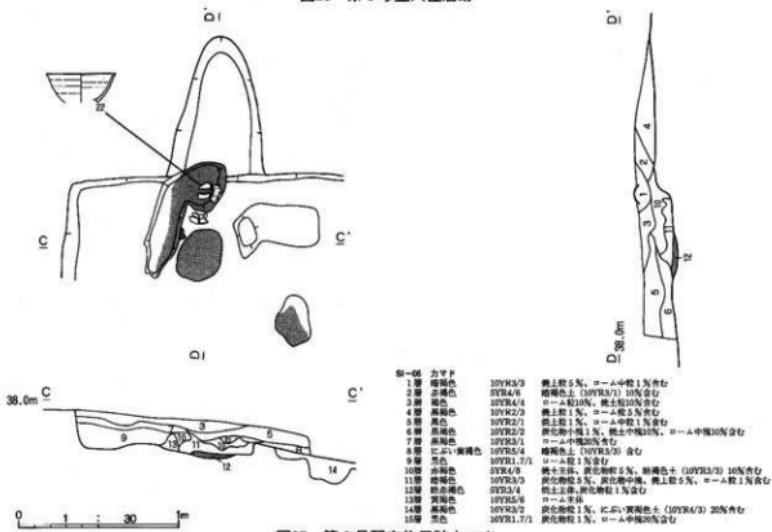


図27 第6号豊穴住居跡力マップ

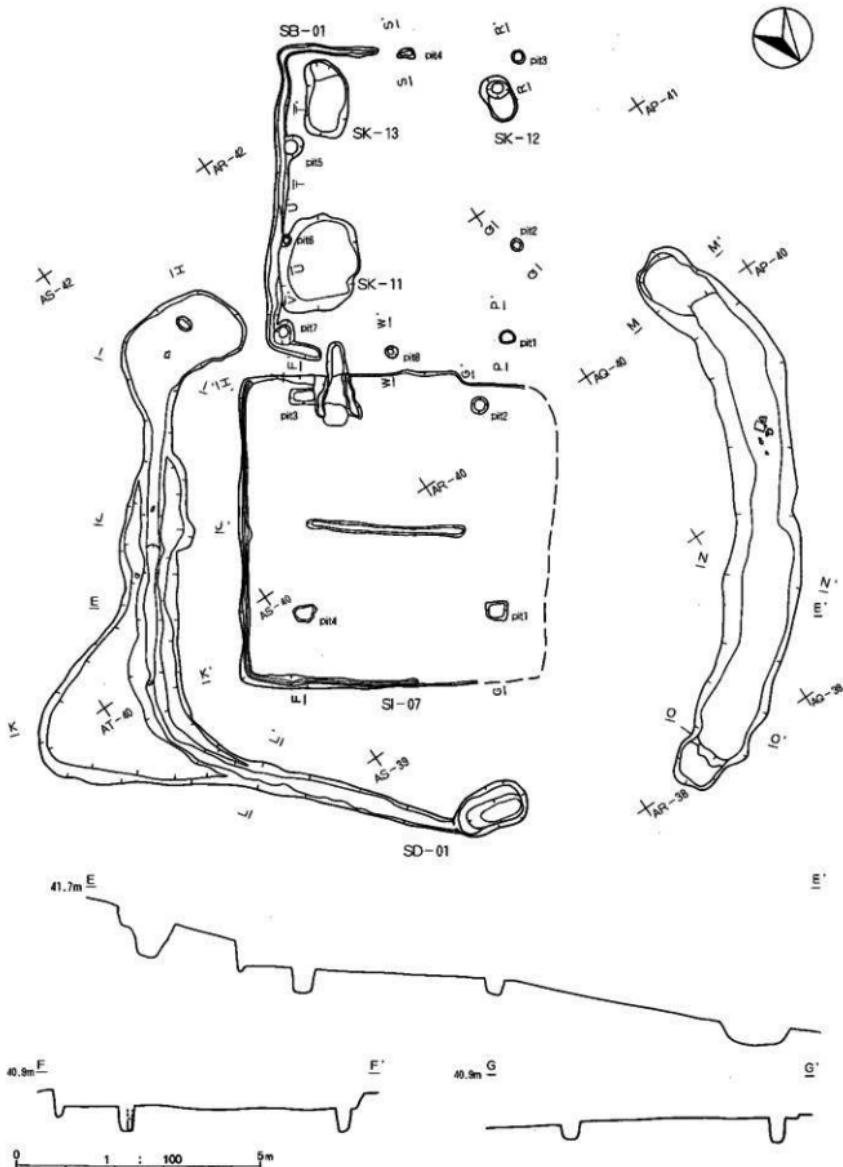


図28 第7号竪穴住居跡関連遺構 (SI-07・SD-01・SB-01)

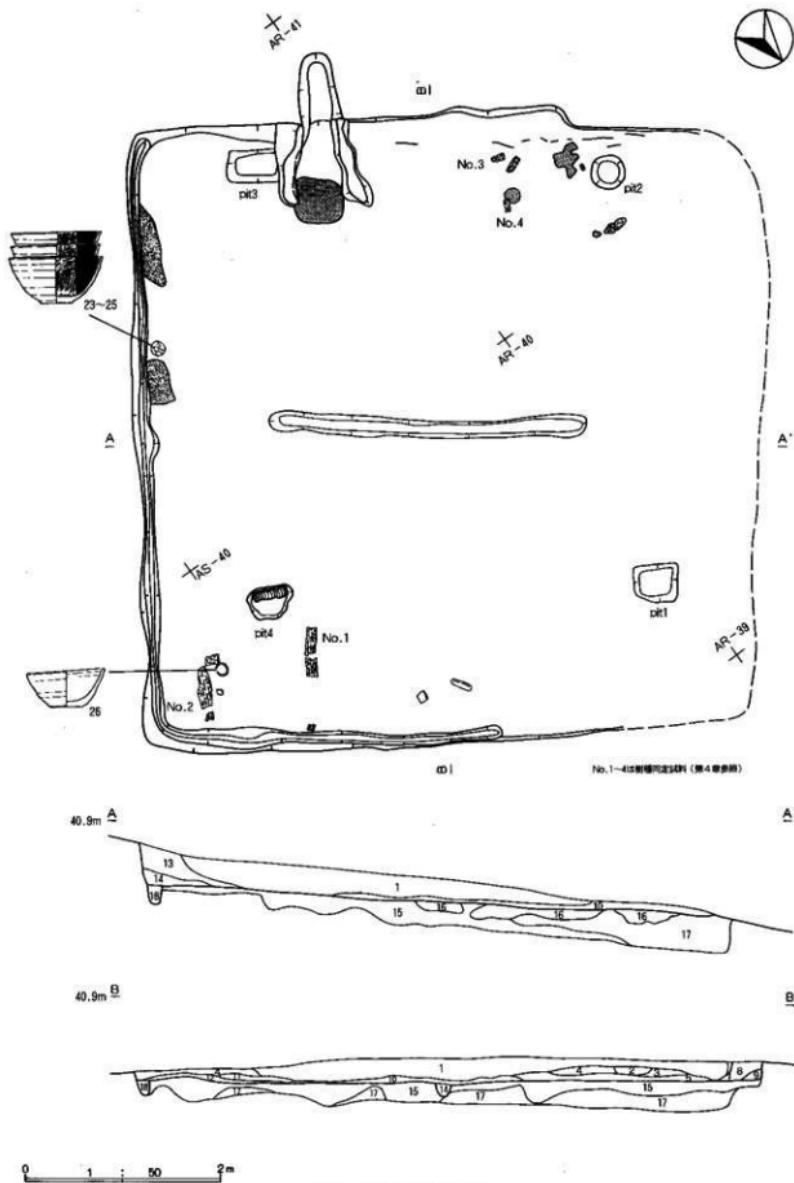


図29 第7号竪穴住居跡

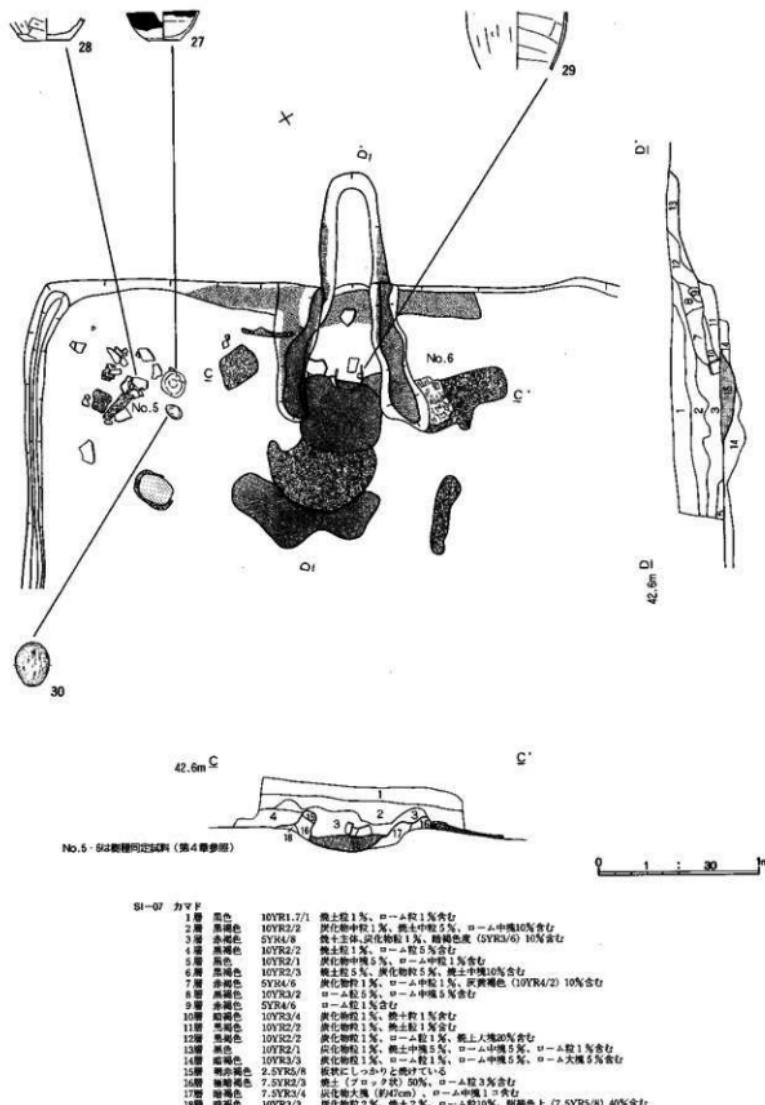
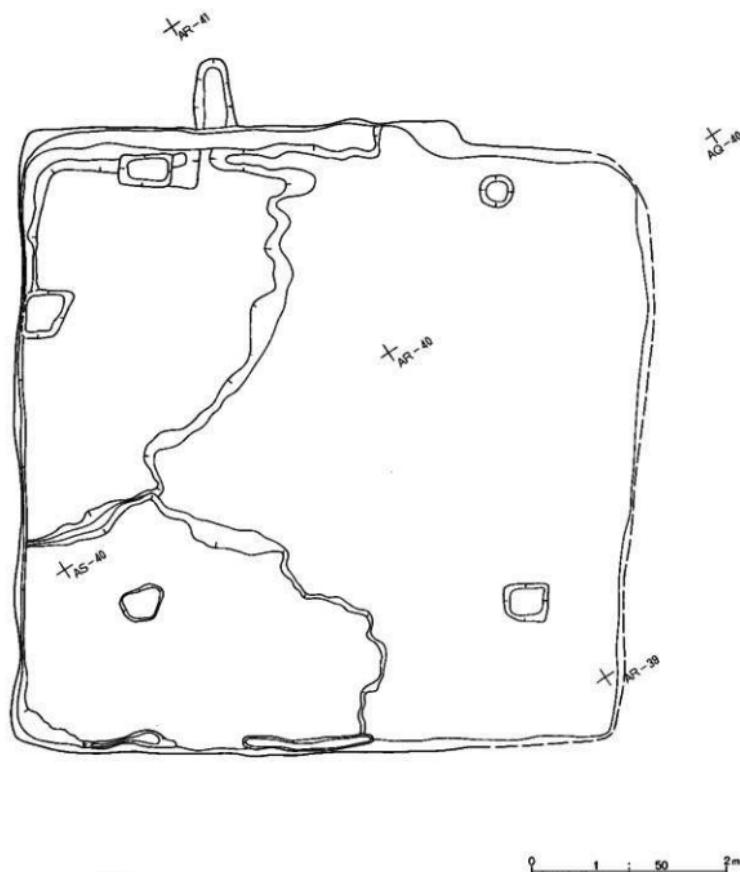


図30 第7号堅穴住居跡マド



S-07			
1層	黒色	10YR1.7/1	炭化物小塊1%、ローム粒5%、白園山火山区中粒5%含む
2層	赤褐色	5YR8/8	陶土主体、炭化物小塊1%、黒色土(10YR2/1)30%含む
3層	黒色	10YR1.7/1	炭化物50%、ローム粒5%、ローム中粒1%含む
4層	黒褐色	10YR2/2	炭化物小塊1%、ローム粒5%含む
5層	黒褐色	10YR2/2	炭化物小塊10%、ローム小粒1%、ローム中粒10%含む
6層	黒褐色	10YR2/2-7/1	炭化物小塊1%、ローム粒5%含む
7層	茶褐色	10YR2/2-7/1	炭化物小塊1%、ローム粒5%含む
8層	黒色	10YR2/1	ローム粒5%含む
9層	黒褐色	10YR2/2	ローム粒5%含む
10層	黒褐色	10YR3/2	炭化物小塊1%、ローム粒1%、ローム中塊10%含む
11層	黒褐色	10YR3/2	ローム粒10%、ローム大塊1%、白園山火山区5%含む
12層	黒褐色	10YR2/2	ローム粒5%含む
13層	黒褐色	10YR2/2	炭化物小塊1%、ローム粒5%、ローム中塊1%、黒褐色土(10YR2/3)30%含む
14層	黒褐色	10YR2/2	炭化物中塊5%、ローム粒1%含む
15層	黒褐色	10YR2/2	ロームブロック主体、炭化物1%、ローム中塊50%含む
16層	緑褐色	10YR3/3	ローム粒5%、ローム小塊2%含む
17層	黒褐色	10YR3/1	ローム中塊5%含む
18層	褐灰色	10YR4/1	黒色土3%含む
19層	黄褐色	10YR5/6	ロームブロック主体
20層	黒褐色	10YR2/2	

図31 第7号堅穴住居跡掘り形

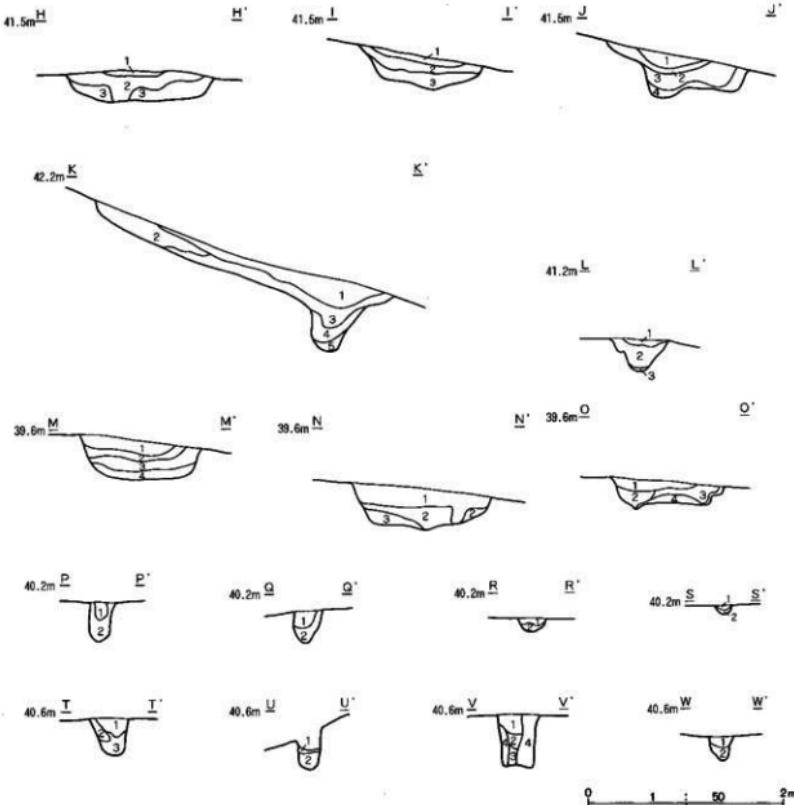


圖32 第7号堅室住民跡関連遺構（SD-01・SB-01）断面

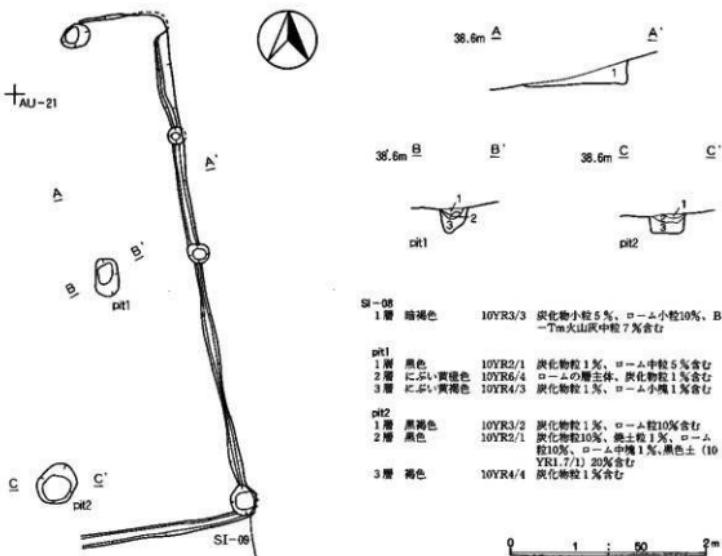


図33 第8号竪穴住居跡

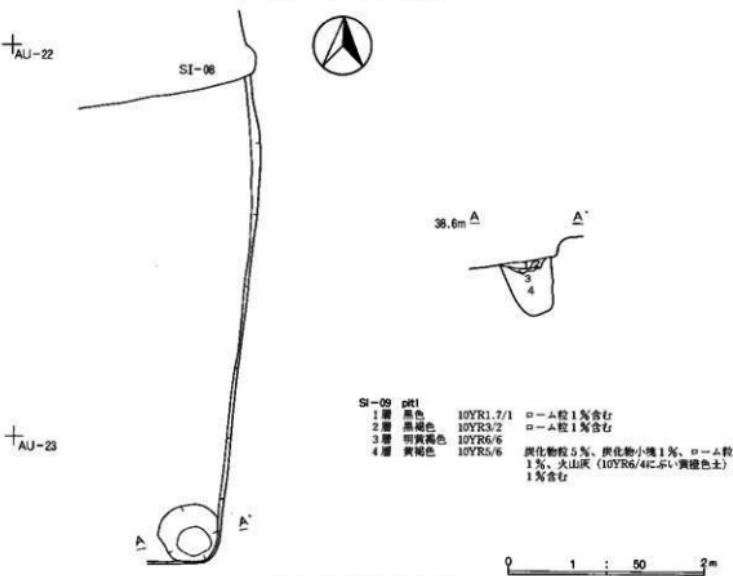


図34 第9号竪穴住居跡

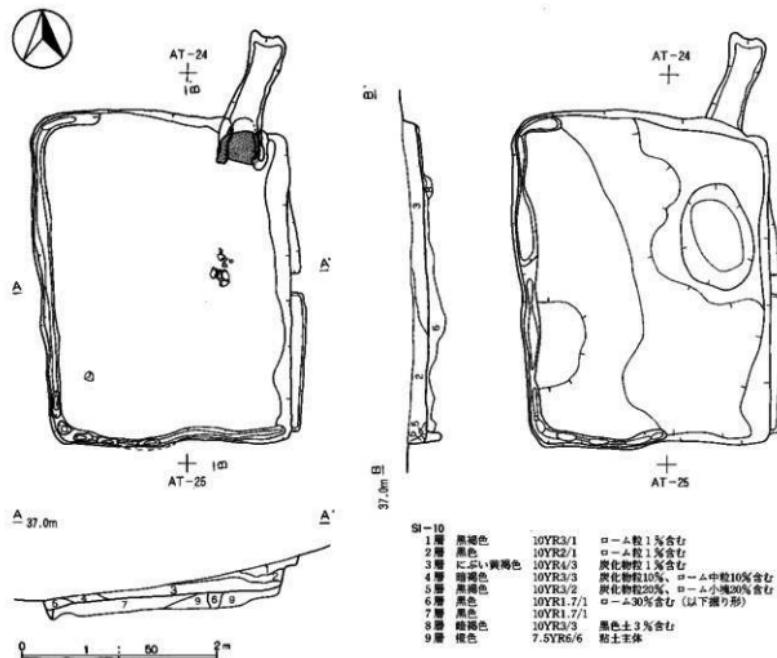


図35 第10号整穴住居跡及び同掘り形

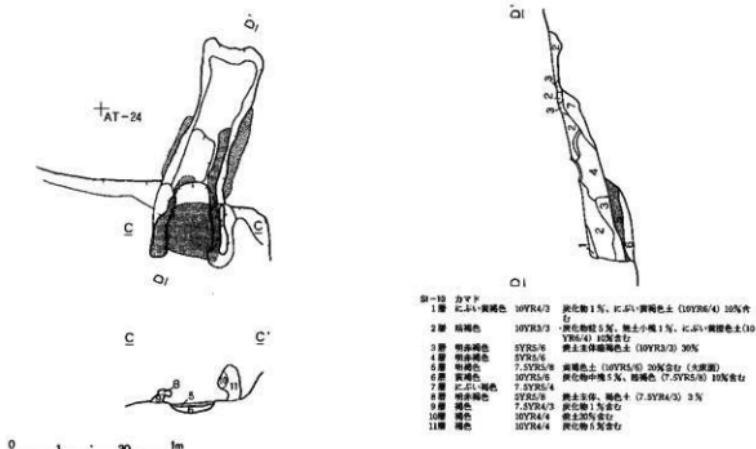


図36 第10号整穴住居跡マド

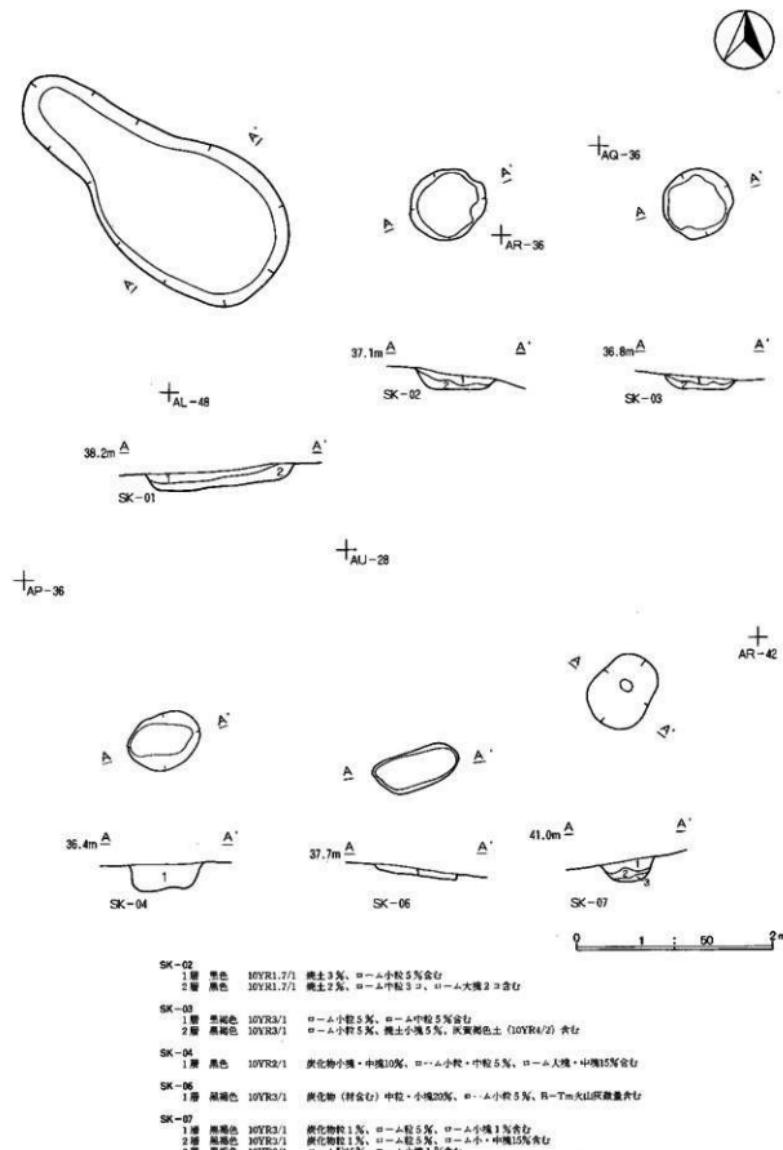


図37 平安時代土坑 (SK-01~04・06・07)

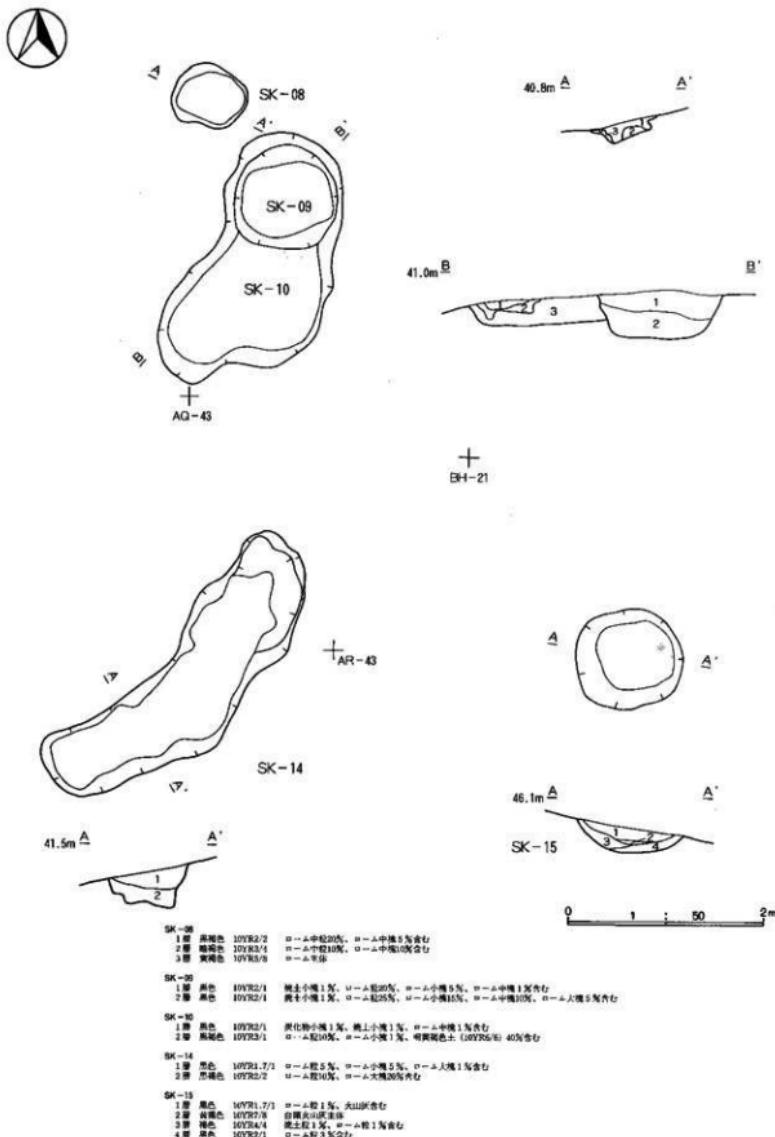


図38 平安時代土坑 (SK-08~10・14・15)

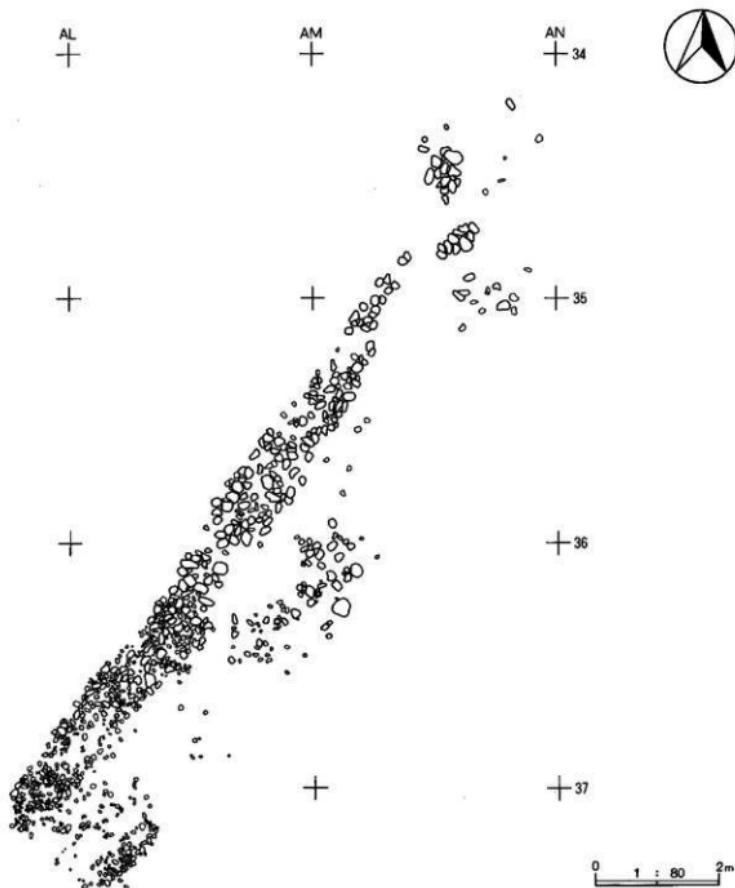


図39 第1号數石遺構

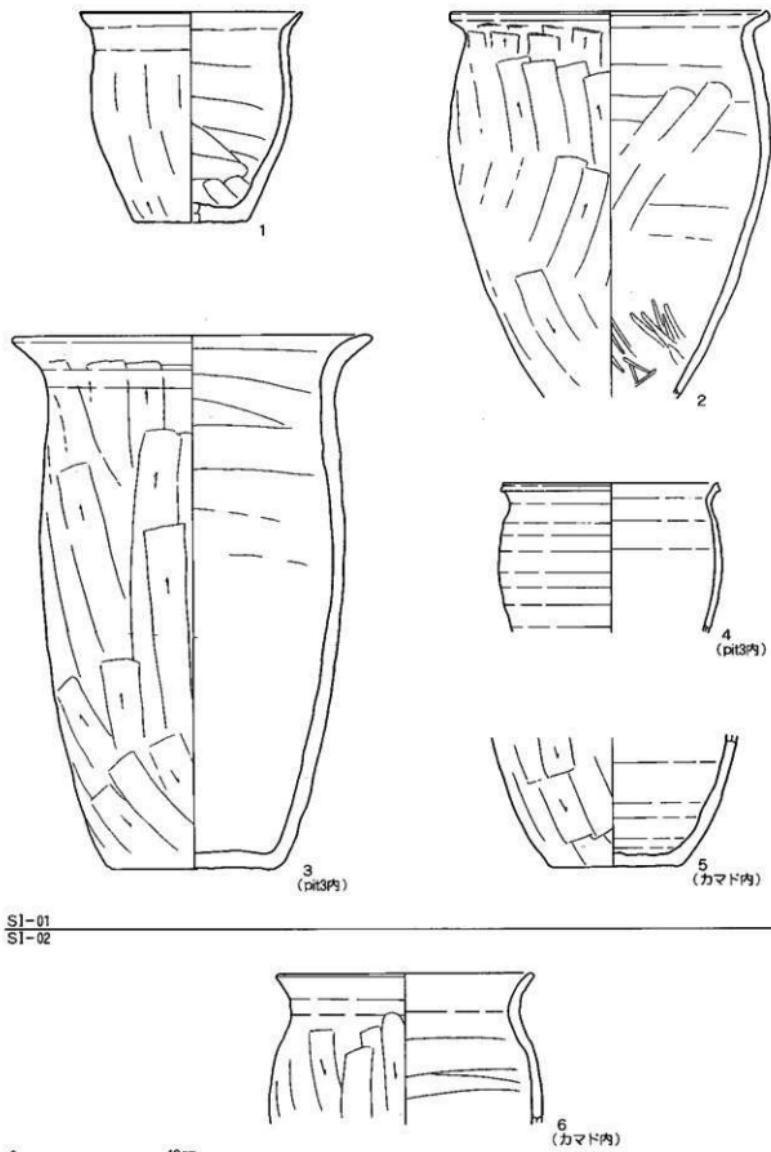


図40 平安時代遺構内出土遺物 (SI-01・02)

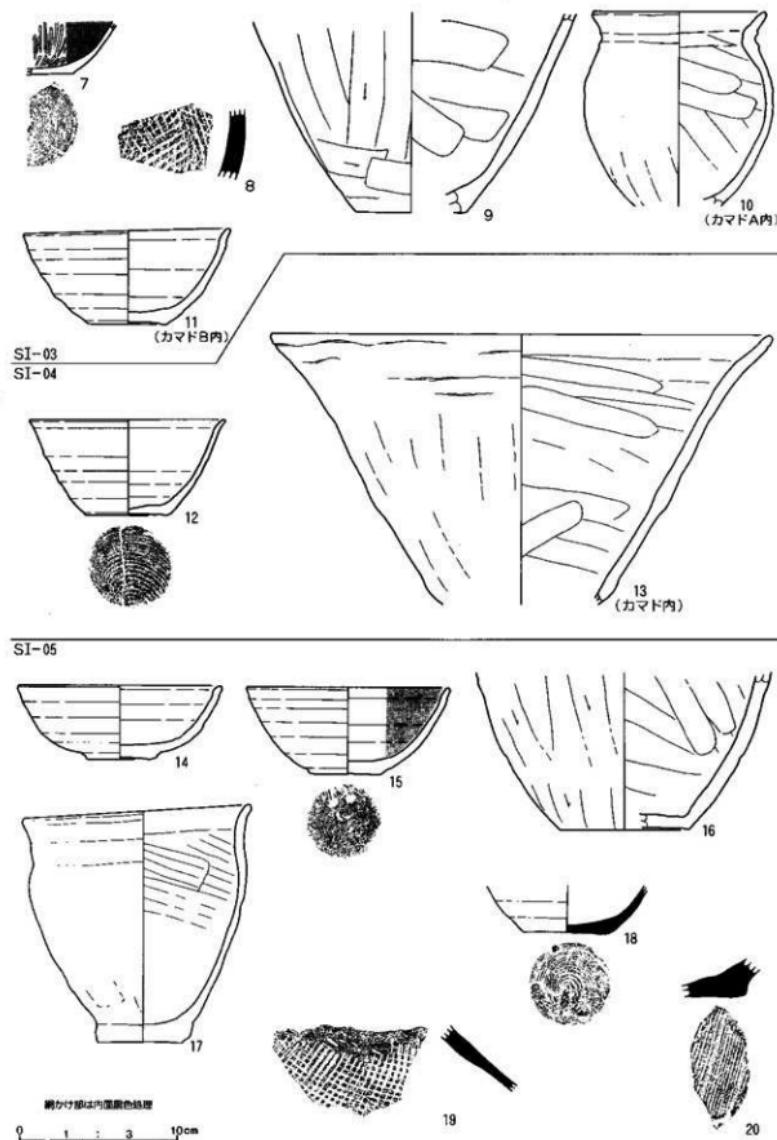


図41 平安時代遺構内出土遺物 (SI-03~05)

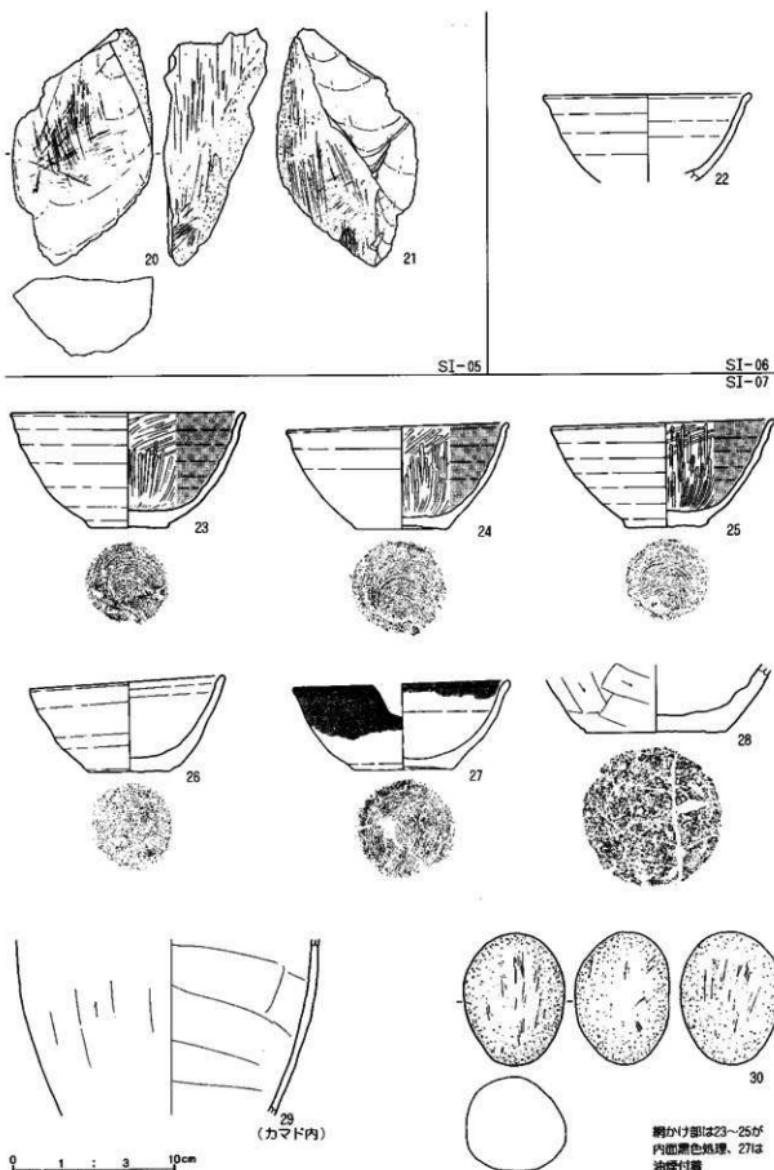


図42 平安時代遺構内出土遺物 (SI-05~07)

網かけ部は23~25が
内面黒色処理、27は
油壺付着

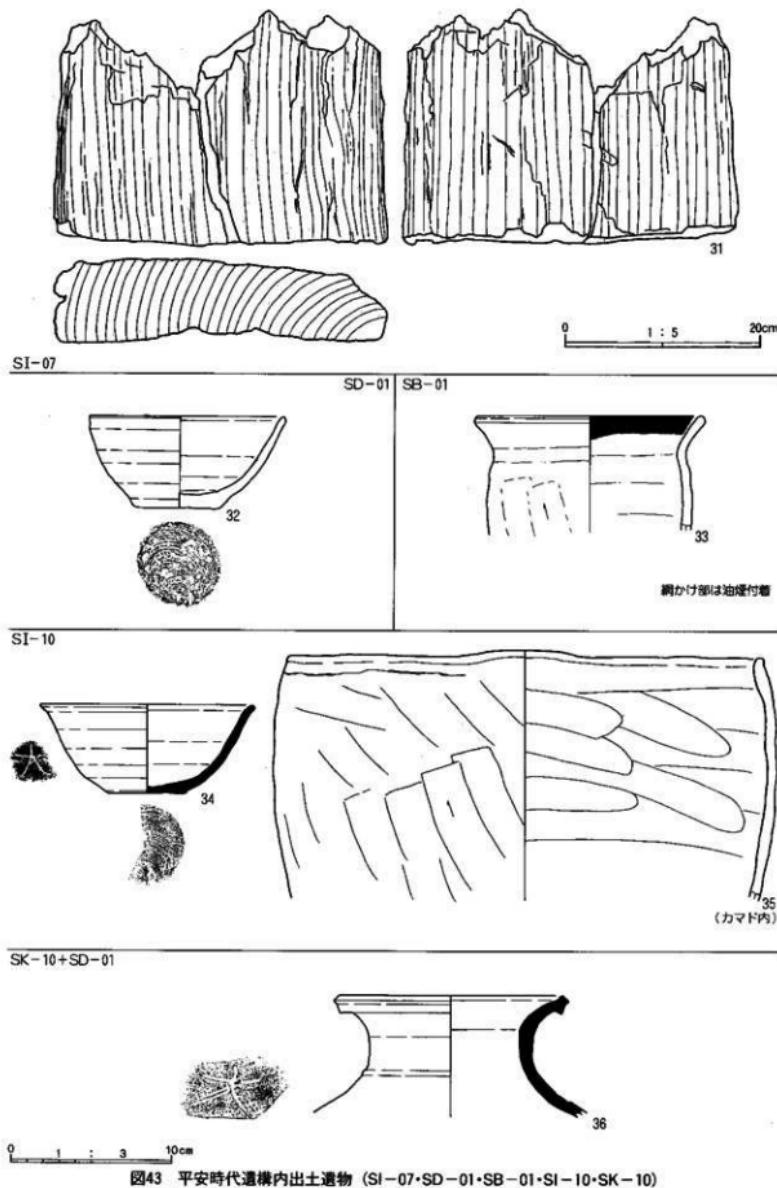


図43 平安時代遺構内出土遺物 (SI-07・SD-01・SB-01・SI-10・SK-10)

第5節 遺構外出土遺物

1 土器

土器は縄文時代前期・中期・後期・晩期・弥生時代のものが出土しており、次のように分類した。尚、遺構覆土からの出土土器であっても、本来的にその遺構と関連がないものと考えられるものについては、本節で報告することとした。

第I群土器（縄文時代前期）

- 1類 円筒下層c式に位置付けられるもの
- 2類 円筒下層d式に位置付けられるもの

第II群土器（縄文時代中期）

- 1類 円筒上層a式に位置付けられるもの
- 2類 円筒上層b式に位置付けられるもの
- 3類 円筒上層c式に位置付けられるもの
- 4類 円筒上層d式に位置付けられるもの
- 5類 円筒上層e式に位置付けられるもの
- 6類 円筒上層式に位置付けられ、細分でき難いもの
- 7類 楔林式に位置付けられるもの
- 8類 最花式に位置付けられるもの

第III群土器（縄文時代後期）

- 1類 後期初頭に位置付けられるもの
- 2類 十腰内I式に位置付けられるもの

第IV群土器（縄文時代晩期）

本群土器は縄文時代晩期中葉を主体とするものと思われるが、破片資料が多く、個々の型式的分類が困難なため、器種・器形によって分類した。但し、完形のもの・完形を推定できるものが少ないと認め、鉢形の区別は厳密ではない。

- 1類 深鉢・鉢形土器
- 2類 鉢・浅鉢・台付鉢形土器
- 3類 壺形土器
- 4類 血形土器

第V群土器（弥生時代）

第I群土器（縄文時代前期）（図44-1～8）

〔第I群1類〕（図44-1・2）

本類土器は円筒下層c式に比定される。1・2は同一個体で、口縁部文様帯をもたず、口縁部はやや波状を呈する。胴部から口縁部にかけて僅かにくびれる器形と思われる。胎土には纖維が混入している。

〔第I群2類〕 (図44-3~8)

本類土器は円筒下層d式に比定され、施文文様の相違により以下のように細分した。

a種 口縁部文様帯に回転文を施すもの (3・4)。結束第1種が不揃いな回転方向で施文されている。口縁部内側はやや外反する。

b種 口縁部文様帯に側面圧痕文を横位・斜位・縦位に数条施文しているもの (5~7)。文様帯の幅は狭く、7の口唇部にはL R回転文がみられる。円筒下層d1式に比定される。

c種 口縁部文様帯に側面圧痕文を水平・斜位に数条施文し、圧痕文を施した縦位の隆帯がみられるもの (8)。文様帯の幅が広く、胎土には纖維・砂粒が混入される。円筒下層d2式に比定される。

第II群土器 (繩文時代中期) (図44~47-9~52)

〔第II群1類〕 (図44~45-9~28)

本類土器は円筒上層a式に比定される。口縁部文様帯の貼付上に側面圧痕文を施し、その後貼付間に圧痕文を施文しているものが多い。口唇部にみられる側面圧痕文は、9・11・12・17・21が口唇面から口唇直下にかけての施文、16・22・23は口唇面のみ、13・14は直下のみの施文となっている。貼付間の圧痕は同じ燃り、或いは逆燃りの1、2段の原体を2、3条並べて施文することがあり、特に直線部分に顕著にみられる。その他、9では縦位の短い圧痕文列・原体2条を使った鋸齒状圧痕、11では渦巻状・鋸齒状圧痕、16では貼付の形に沿っての連弧状圧痕等、個体によって施文される圧痕文の形状は変化に富む。14にはR絡条体の圧痕が密に施されている。

〔第II群2類〕 (図45-29・30)

本類土器は円筒上層b式に比定される。口縁部文様帯の貼付間に、1類土器にもみられた逆燃りの2条の原体によって、本型式のメルクマールである馬蹄形状の側面圧痕文が施文されている。横位に巡らせた貼付で口縁部文様帯を区画し、突起下の縦位貼付で文様帯を4分割している。縦位貼付は栓抜き状の形で胴部にまで延びており、胴部には結束第1種が施文されている。

〔第II群3類〕 (図45-46-31・32)

本類土器は円筒上層c式に比定され、口縁部文様帯の貼付間に刺突文様を施したものを見分類した。2個体の出土で、刺突具は両方とも範状のものと思われる。31には貼付上以外には側面圧痕文はみられず、突起部分には対になる2つの貫通孔 (径約6mm) がみられる。32には刺突文様の他に、2条或いは3条を組にしたL圧痕文が施され、刺突文様は横位に巡らせた貼付を飛び越し、結束第1種が施文された胴部にまで延びる。

〔第II群4類〕 (図46-33~38)

本類土器は円筒上層d式に比定される。本類土器の特徴は地文繩文を施文した後に貼り付けられる口縁部文様帯の細い粘土紐である。33・34は突起の内側にも貼付がみられる。37・38は同一個体と思われ、口唇部にR Lの側面圧痕文を施文した後、蛇行させた粘土紐を貼り付けている。

〔第II群5類〕 (図47-39~41)

本類土器は円筒上層e式に比定される。39はやや波状を呈する深鉢形土器で、口唇部には斜めに刻みが施される。波頂部下方には節の大きなL Rの縦回転文が施され、波底部下方には縦位の無文帯が形成されており、大木式土器文化の影響が感じられる。40・41は同一個体で、地文繩文を施文した後、横位に数条の沈線 (幅約3.5mm) が施されている。口唇部には沈線を引いたものと同じものと思われ

る施文具で斜めに刻みが施され、その直下にはR Lの側面圧痕がやはり水平に施文されている。口縁部文様帶は胴部半ばまで達し、口縁が外反する器形であると思われる。

〔第II群6類〕 (図47-42~47)

その他円筒上層式に比定されるものを一括した。42・43は口縁部文様帶をもたず、地文として結束第1種が施される。口唇面には回転文が施され、口縁部は外反する。円筒上層a式期に近いものと思われる。44は前後に膨らんだ突起をもち、口唇部には回転文、突起面上には「A」字状の側面圧痕文が施されている。46はまず口唇直下に粘土紐を、その後口唇面に蛇行させた粘土紐を貼り付け、粘土紐に沿って口縁部外側を蛇行させるように整形している。貼付上にはL側面圧痕文を縦位施文している。

〔第II群7類〕 (図47-48・49)

本類土器は榎林式に比定される。48・49は同一個体で、地文繩文を施文後、3条の平行沈線の組合せによって文様を描出している。沈線文は交叉せず、器壁は薄手である。

〔第II群8類〕 (図47-50~52)

本類土器は最花式に比定される。地文繩文を施文後、50・52には沈線文、51には円形刺突文が施される。

第III群土器 (繩文時代後期) (図48・49-53~84)

〔第III群1類〕 (図48-53~70)

本類土器は後期初頭のものに比定され、施文文様の相違により以下のように細分した。

a種 地文繩文の上に比較的太くて深い沈線で施文したもの (53・54)。53・54は同一個体である。沈線幅は約4mm、沈線断面形は半円弧状、地文は無節である。

b種 磨消文・充填文を施したもの (55~70)。55~57は同一個体で、口縁部・胴部に帶状文様がみられる壺形土器である。沈線は粗雑で、節の細かい原体を用いて沈線間を充填している。58・59は波状を呈する口縁部破片で、貼付によって肥厚した口縁部には、その形に沿って沈線が施されている。充填される繩文は比較的細かい。59~64は同一個体で、55~57に比べて沈線は太いがやはり粗雑な感じがする。本種は施文される沈線の粗さや節の細かさなどから、十腰内I式期以降のものである可能性もある。

〔第III群2類〕 (図48・49-71~79)

本類土器は十腰内I式に比定され、施文文様の相違により以下のように細分した。

a種 弧状の平行沈線や曲線的な沈線で文様が施されるもの (71~74)。71は厚く作られた口縁部で波状を呈する。

b種 櫛歯状沈線文が施されるもの (75・76)。

c種 粗雑な沈線で施文されるもの (77~79)。77・78は同一個体の壺形土器で、口縁部付近の入組状文様が上部に飛び出している。曲線部分は一筆書きではなく、何回かに分けて施文している。79は文様帶を区画する最上部の長方形文様を除いては短沈線で施文され、僅かに繩文が充填されている。

第IV群土器 (繩文時代晚期) (図49-54-85~181)

大洞式に比定される土器群であり、器種の相違により以下のように分類される。

〔第IV群1類〕 (図49-52-85~121)

深鉢・鉢形土器と思われるものを一括した。施文文様および文様構成の相違により以下のように細分

される。

a種. 繩文のみを施すもの（85～107）。多くは平口縁で、口唇面をナデで整形したものが多くみられるが、85は波状口縁、93は歪な小波状口縁、99は整形した後の口唇押圧と変化をもつものみられる。89は胸部から口頸部にかけて内傾する器形である。口縁部内面の肥厚の具合から、弥生時代前期まで時期が下ることも考えられる。97の地文は直前段反撲の原体を使用しているものと思われる。本種には外面に炭化物が付着するものが多い。尚、胎土・繩文・口唇面の調整などから、100は繩文時代後期のものである可能性もある。

b種. 地文繩文を施し、口縁部に横位平行沈線を施すもの（108～113）。108の口唇部は面取りされており、その他は小波状口縁のものが多い。また、その殆どが地文を施文後に沈線を施しているようである。横位沈線は2～4条で、112のみが斜繩文、それ以外の地文はほぼ縱走する。

c種. 条痕のみを施すもの（114～115）。114は口唇部押圧による波状口縁をもつ。

d種. 条痕と横位平行沈線を施すもの（116～118）。116は横位沈線が2条で小波状口縁、117は横位沈線が2条で平口縁、118は横位沈線が3条で小波状口縁である。条痕の施文方向は全て縱方向である。

〔第Ⅳ群2類〕 (図52～54-122～167)

鉢・浅鉢・台付鉢形土器と思われるものを一括した。小波状口縁のものや、口唇部や土器内面に沈線を施すものが多い。施文文様および文様構成、器形の相連により以下のように細分される。

a種. 口頸部に平行沈線・刻み目・列点文がみられるもの（122～129）。殆どが平行沈線と組合せて刺突を施しているが、123は口頸最下部から肩部分に列点文を施している。

b種. 口頸部に平行沈線を施し、肩部に明確な稜をもって上に向かって内傾するもの（130～141）。特に130は口縁～肩部の外形が「L」字形を呈している。140の口縁部は、上部が前方に折り曲げられたような形である。本種の多くはその内・外面に炭化物を付着させているため、煮炊きに多く用いられたものと思われる。

c種. 口頸部に平行沈線を施し、肩部から上に向かってやや内傾するもの、或いはほぼ真っ直ぐ立ち上がるるもの（142～162）。b種との区別がはっきりしないものもあるが、b種に比べて地文が縱走する割合が高い。また、器面に起伏が少なく調整し易いためか、施文した沈線の稜の下側にミガキをかけるものも多い。148には、口唇部の沈線・雲形文といった大洞C1式の特徴がみられる。

〔第Ⅳ群3類〕 (図54-168～171)

壺形土器を一括した。168は割れ口などから考えて、肩部が張り気味或いは胸部が球状を呈するものと思われる。頸部は内側に窄まり、口縁付近で外側に開く。口唇部内側には沈線状の段差がみられる。その形状から繩文時代晩期中葉のものと考えた。169にはM字状の小さな突起があり、その形に沿って沈線が施されている。170・171には、羊齒状文の痕跡と思われる沈線間の刻み目及び雲形文がみられ、大洞C1式期以降のものと思われる。

〔第Ⅳ群4類〕 (図54-172～176)

皿形土器を一括した。172は内外面ともにミガキが施され、口唇部は平坦、部分的に調整痕と思われる凹みがある。173の接地部には沈線が円形に描出され、底部を示している。174～176には雲形文が施され、175の横位沈線には刻み目もみられる。

第V群土器（弥生時代）（図54-182）

1点のみの出土である。平行沈線とともに緩やかな鋸歯状沈線が施されている。

(土岐 耕司)

2 石器

石鎌（図55-1～4）

4点出土している。基部の形状は1・2は凹基、3は凸基、4は平基である。3・4は尖端を僅かに欠く。2のみ黒曜石製で他は珪質頁岩製である。3の基部にはアスファルトが付着している。

石匙（図55-5）

1点出土している。石刃状の縦長剝片を縦位に用い、素材剝片の打点側につまみ部を作出している。図の表面側に対しては比較的丁寧な加工が全面を覆い、主用剝離面側に対しては一側縁に二次加工が認められる程度である。

二次加工ある剝片、使用痕ある剝片（図55-56-6～13）

剝片のいずれかの部位に二次加工、或いは使用痕が見られる剝片を一括した。縦長剝片を素材とするものが多い。

石核（図56-14）

1点出土している。珪質頁岩の転石を素材とし、数枚の剝片を剝離しているが、定型的な剝片は得られていないようである。

磨製石斧（図56-15）

1点出土している。全面丁寧に研磨されているが、基部側を欠損している。欠損後の加工はみられない。

凹み石（図57-16～17）

16は分割した扁平礫の自然面側に凹みが残る。擦痕も観察されることから磨り石としても使用されたものと思われる。17は欠損しているが、直方体状の礫の各面に擦痕と凹みがみられる。

叩き石（図57-18～20）

自然礫のいずれかの部位に敲打の痕跡が残るものである。18・19は平坦面に、19・20は端部に敲打痕がみられる。

磨り石（図57-58-21～25）

21は平面形が半月形を呈する磨り石で、弦にあたる側を磨り面とし、反対側は弧状に加工している。扁平礫を素材としている。円筒土器文化期のものと推定される。22～25は礫の平坦面に擦痕がみられるものである。23・24は叩き石としても使用されたようである。

石皿（図59-20～27）

2点出土しているが共に大きく欠損している。27は全体の3/4ほど失われているが本来はかなり大形の石皿だったようである。

(太田原 潤)

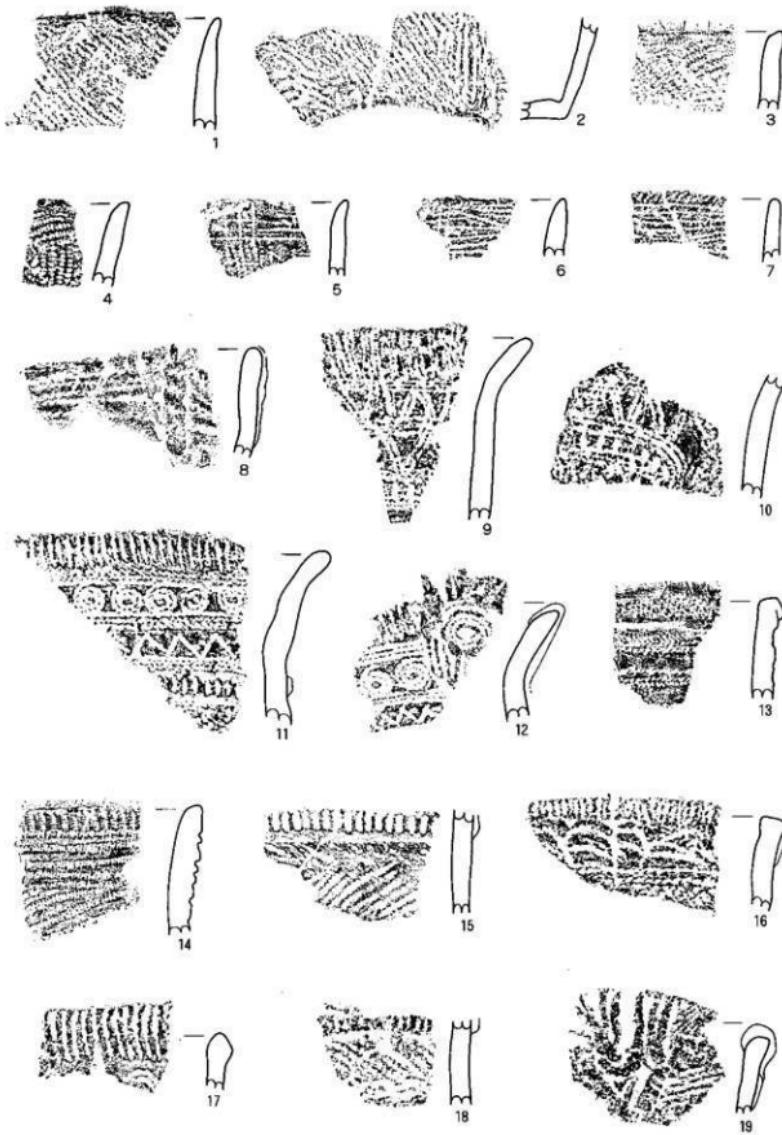


図44 遺構出土土器(1)

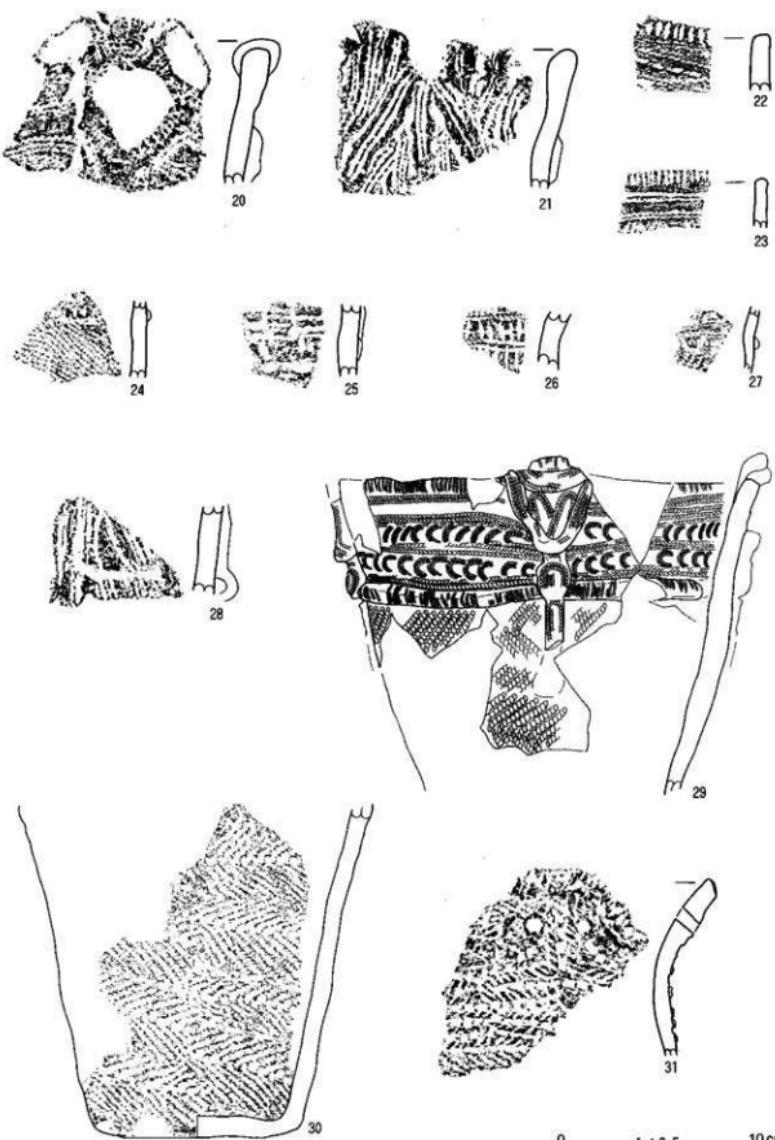


図45 遺構外出土土器(2)

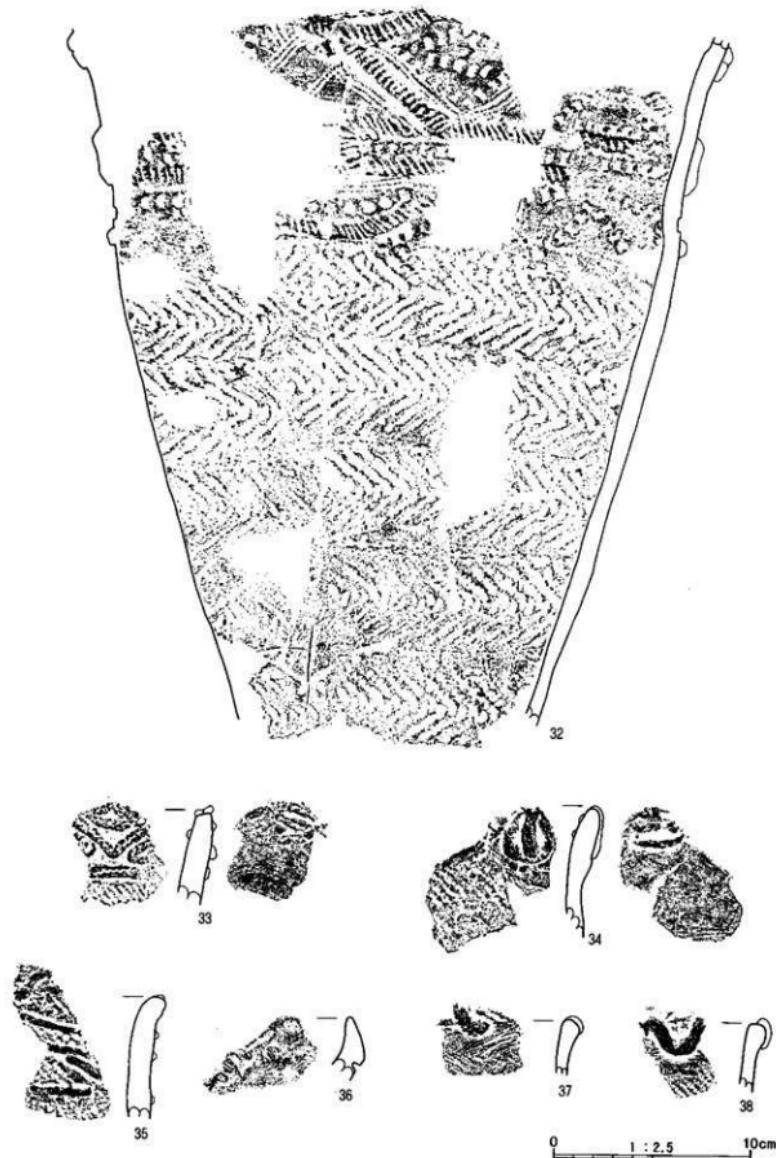


図46 遺構出土土器(3)

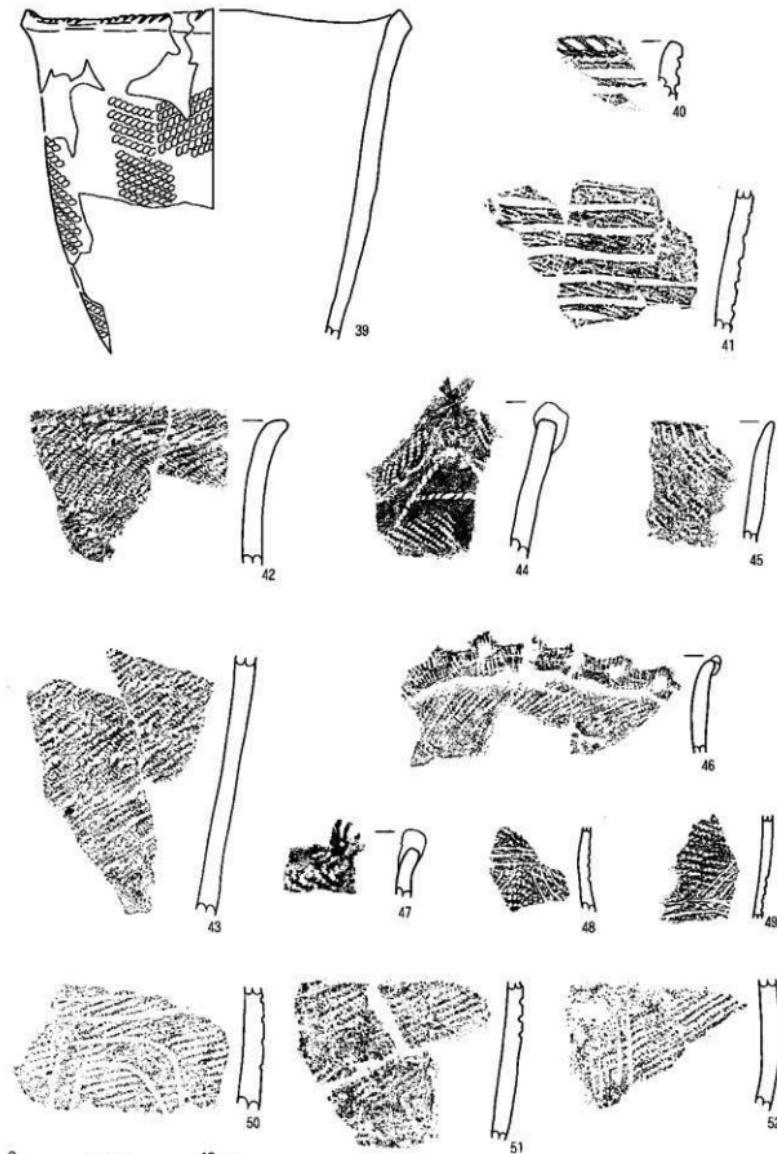


图47 遗構外出土土器(4)

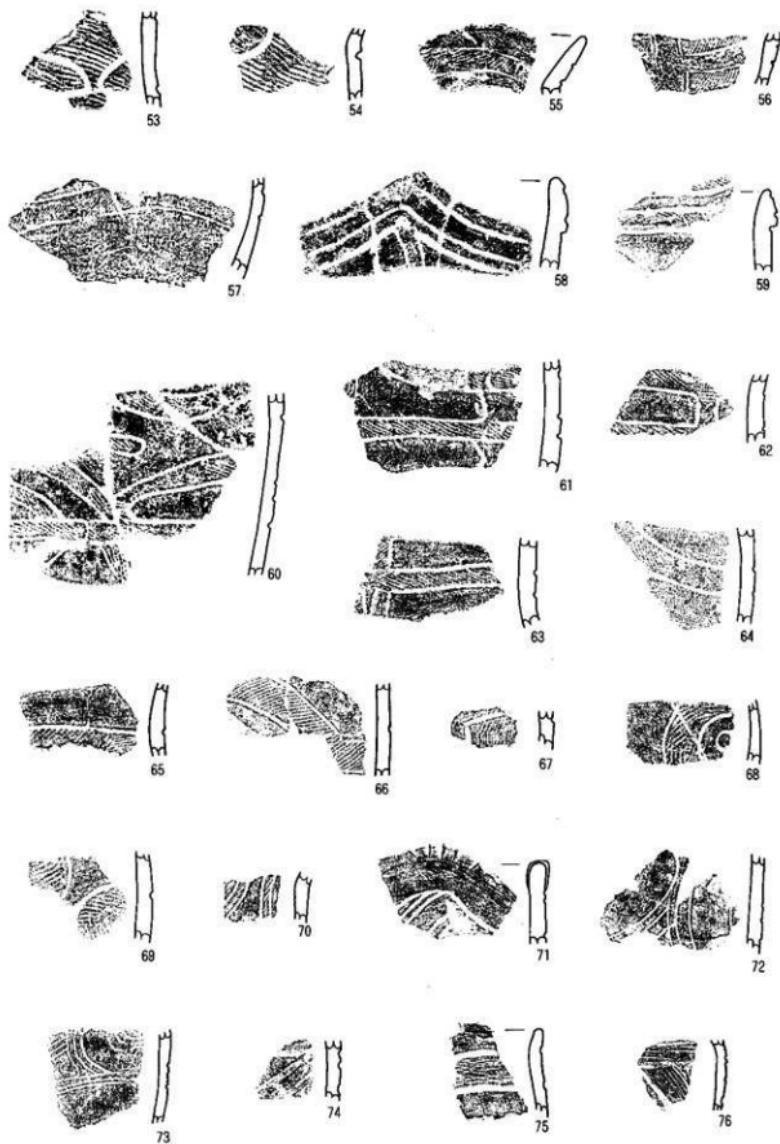


図48 遺構外出土土器(5)

0 1 : 2.5 10cm

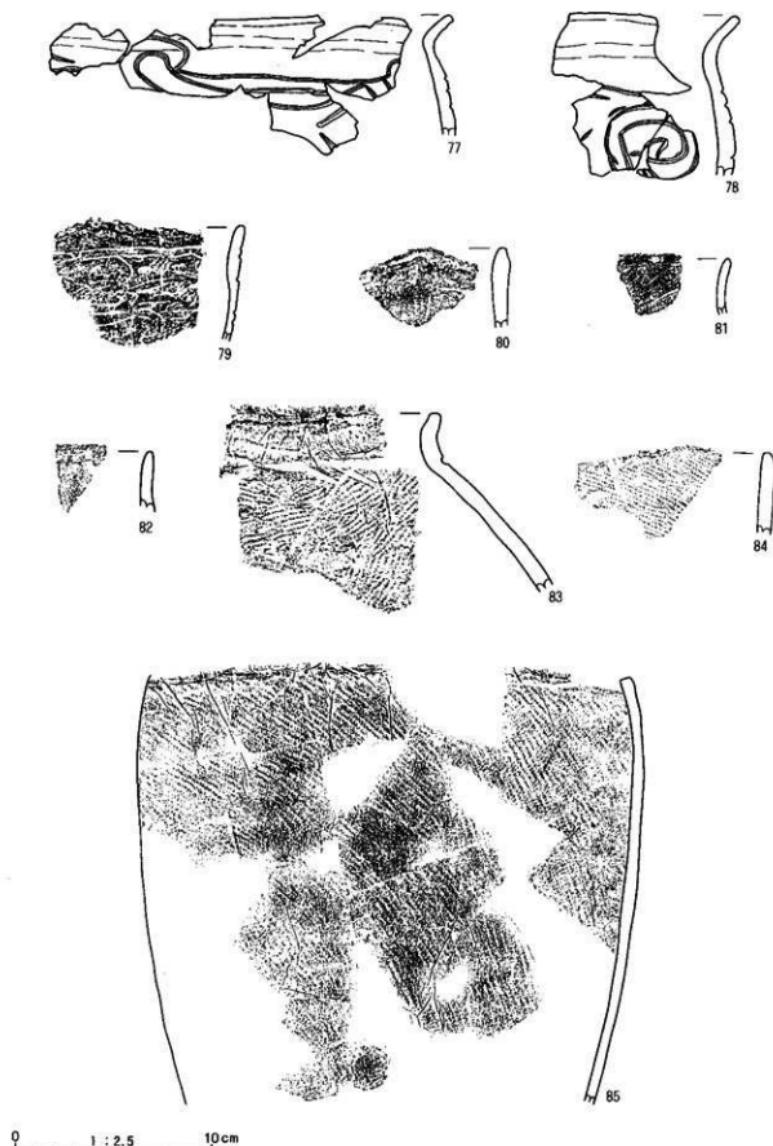


図49 遺構外出土土器(6)

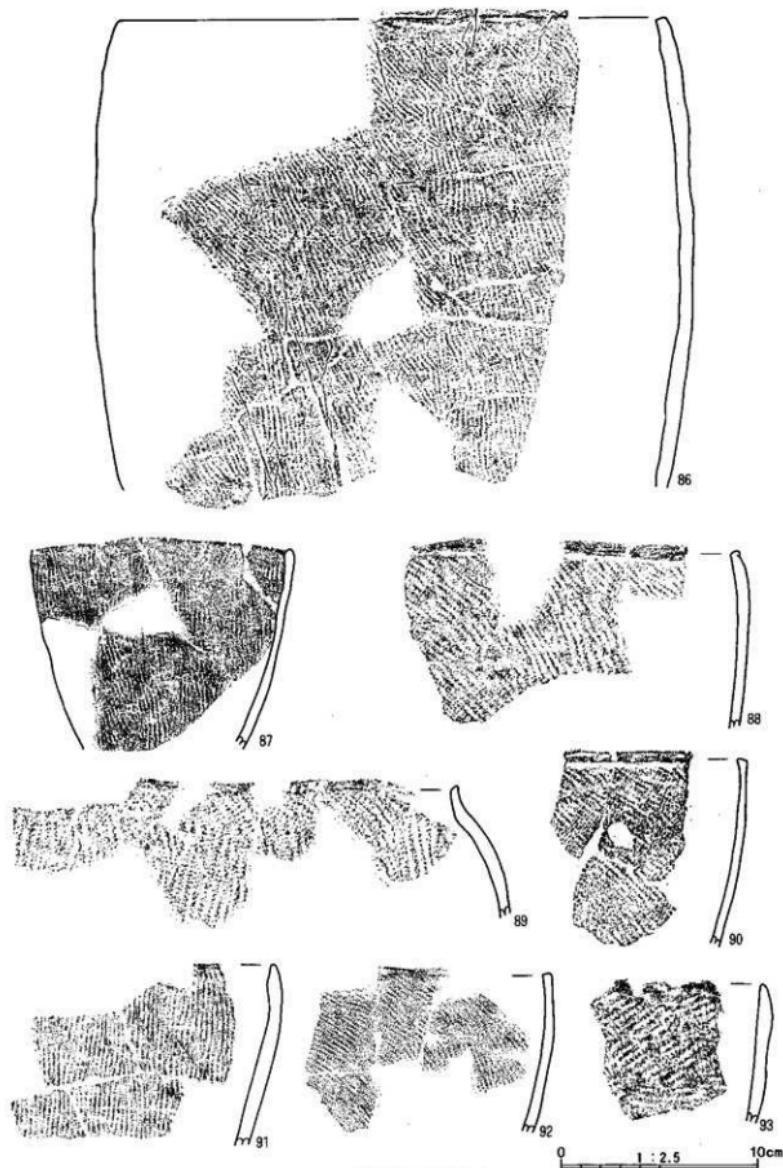


図50 遺構外出土土器(7)

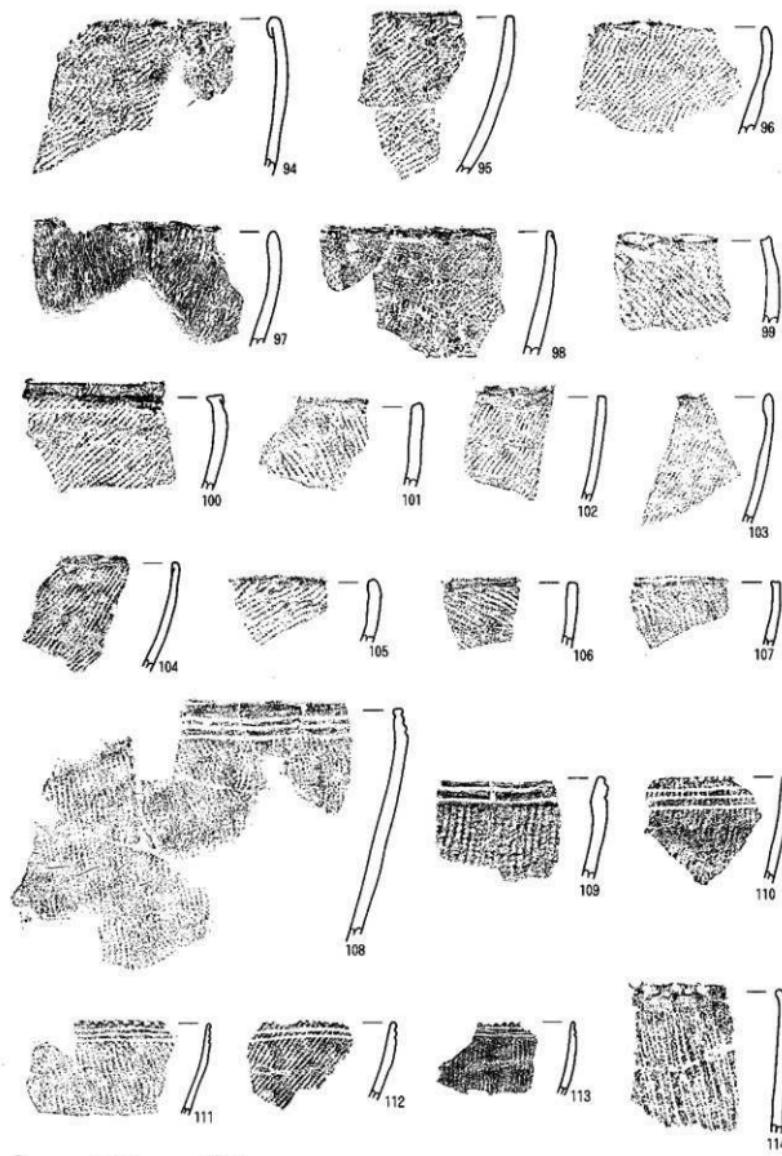


図51 遺構外出土土器(8)

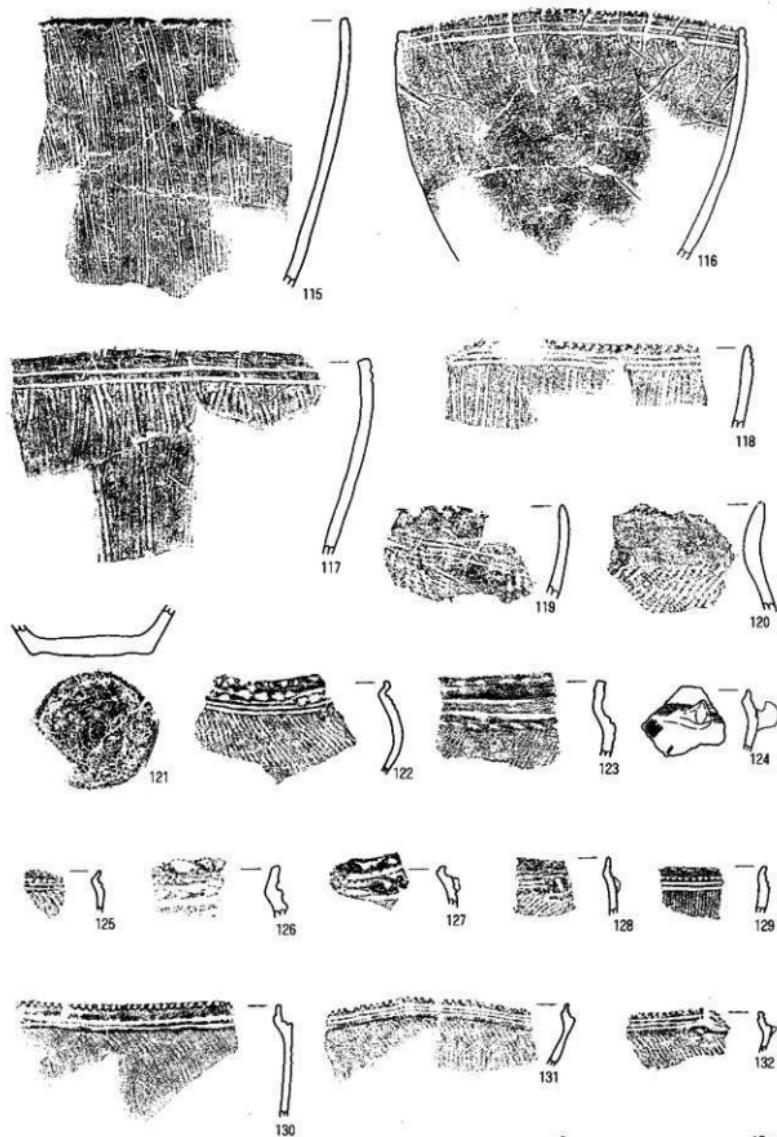


図52 遺構外出土土器(9)



图53 遗構外出土土器(10)

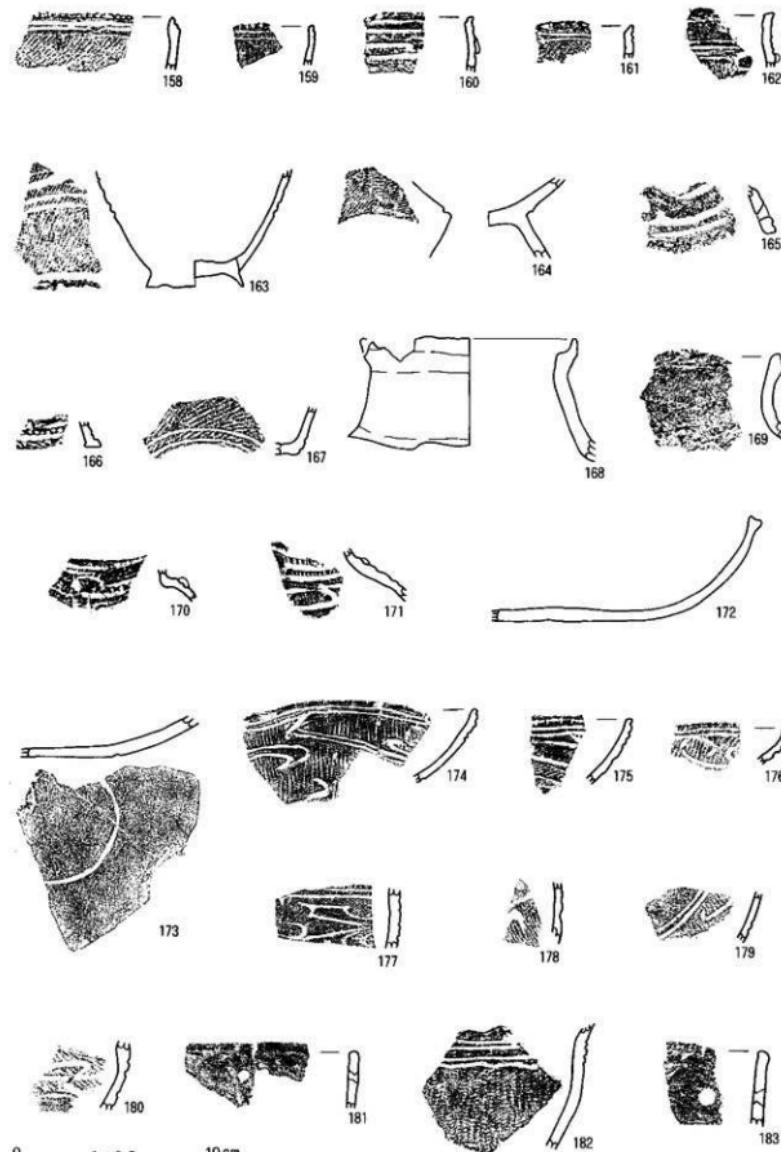


図54 遺構外出土土器(11)

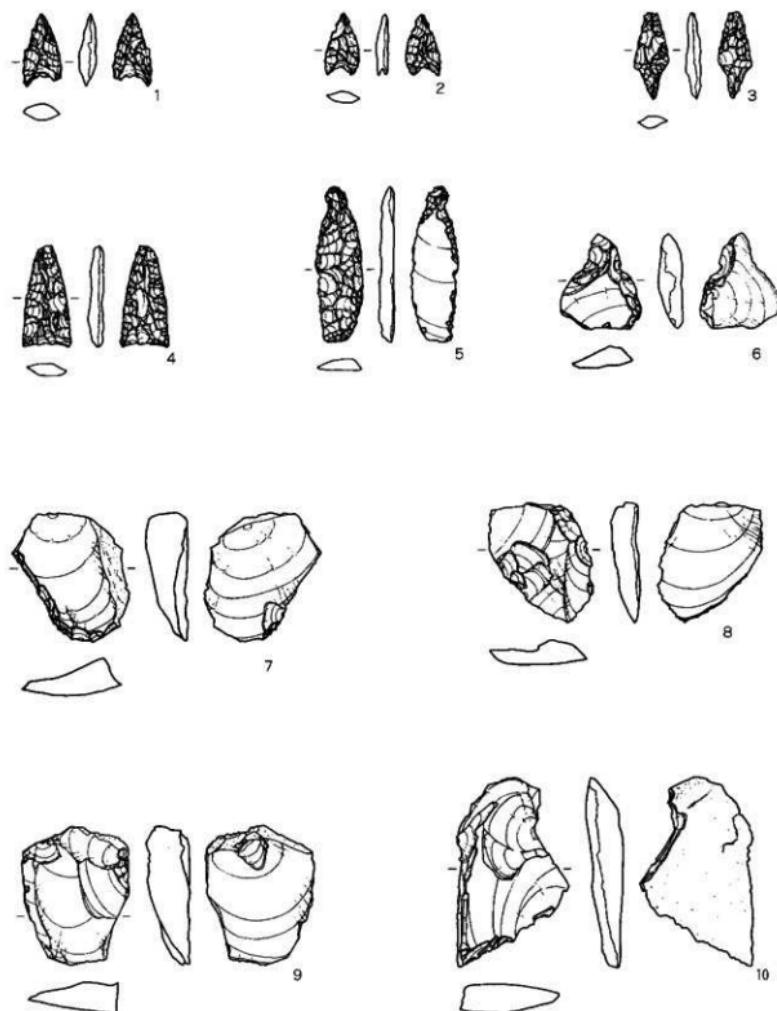


图55 遗構外出土石器(1)

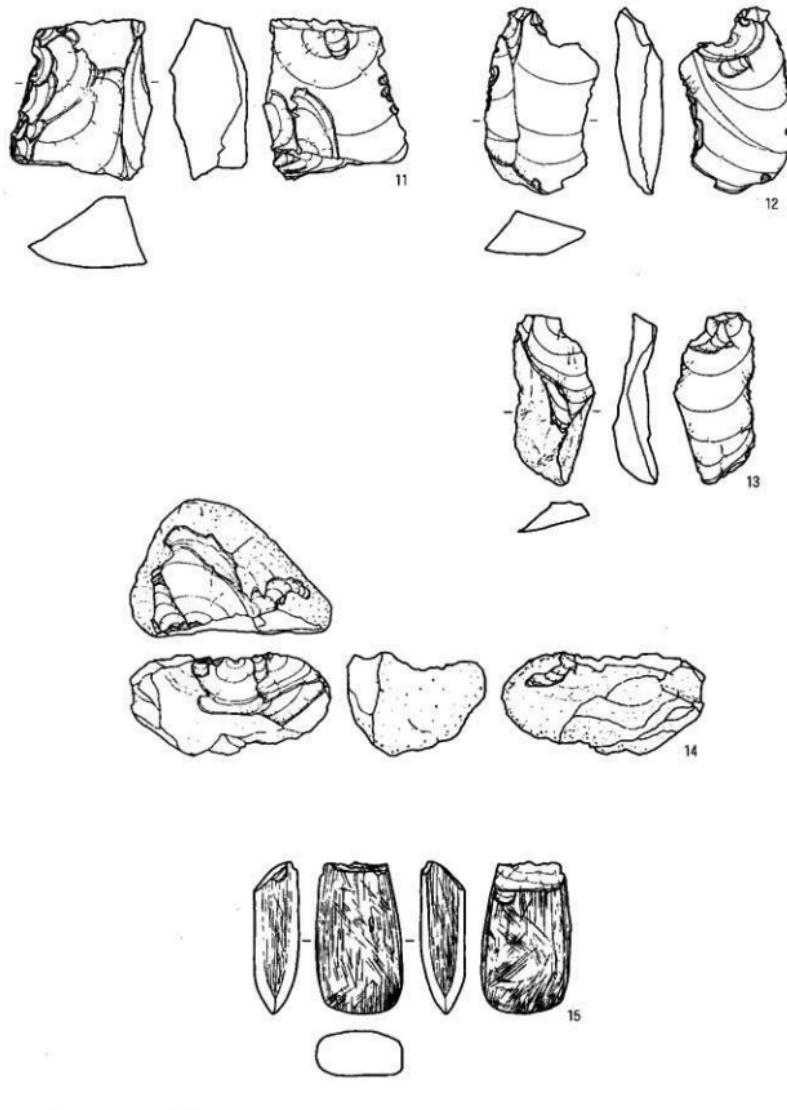


圖56 遺構外出土石器(2)

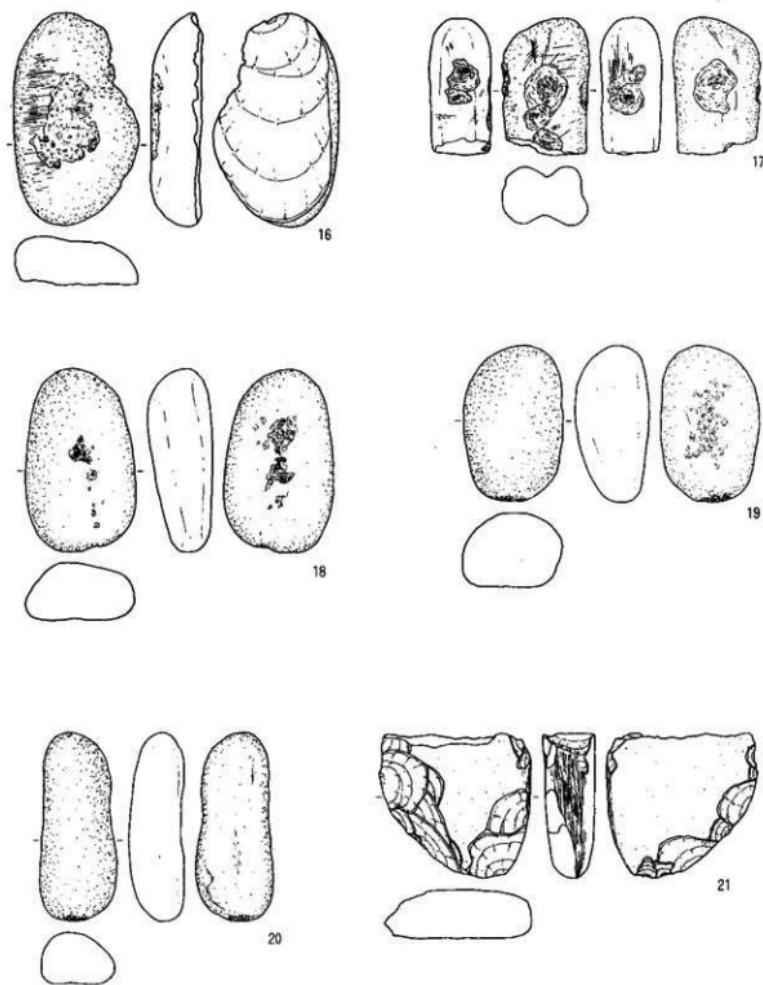


图57 遗構出土石器(3)

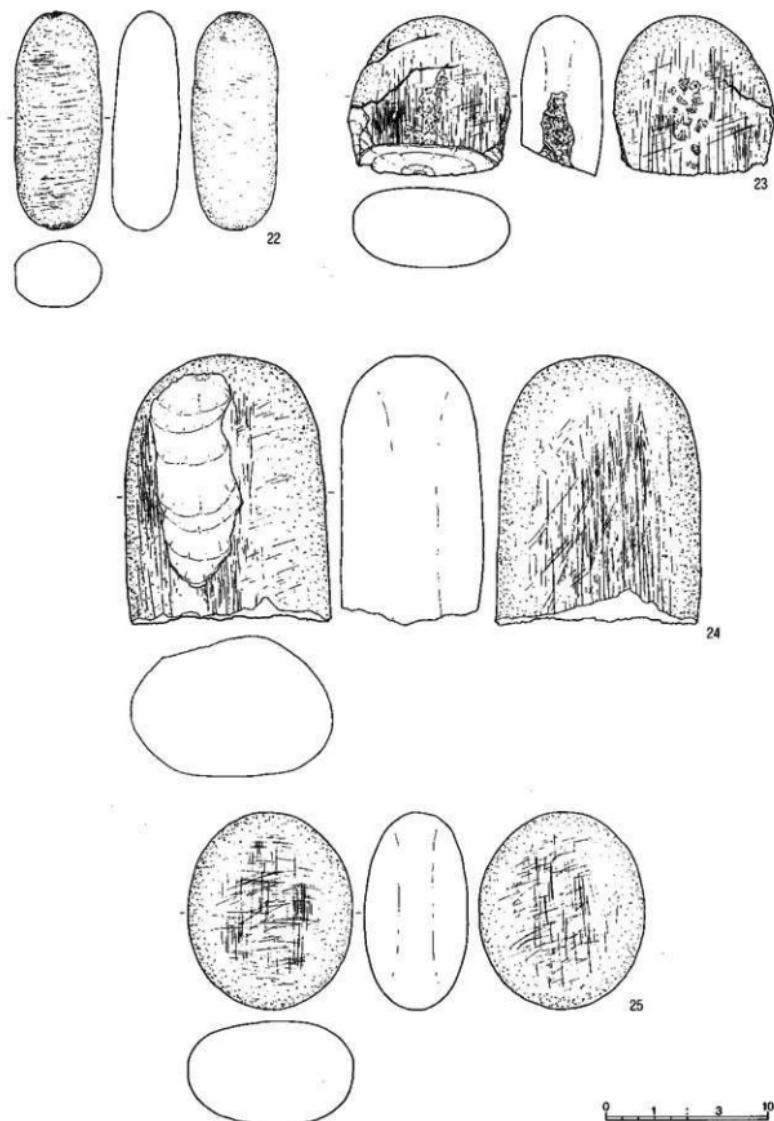
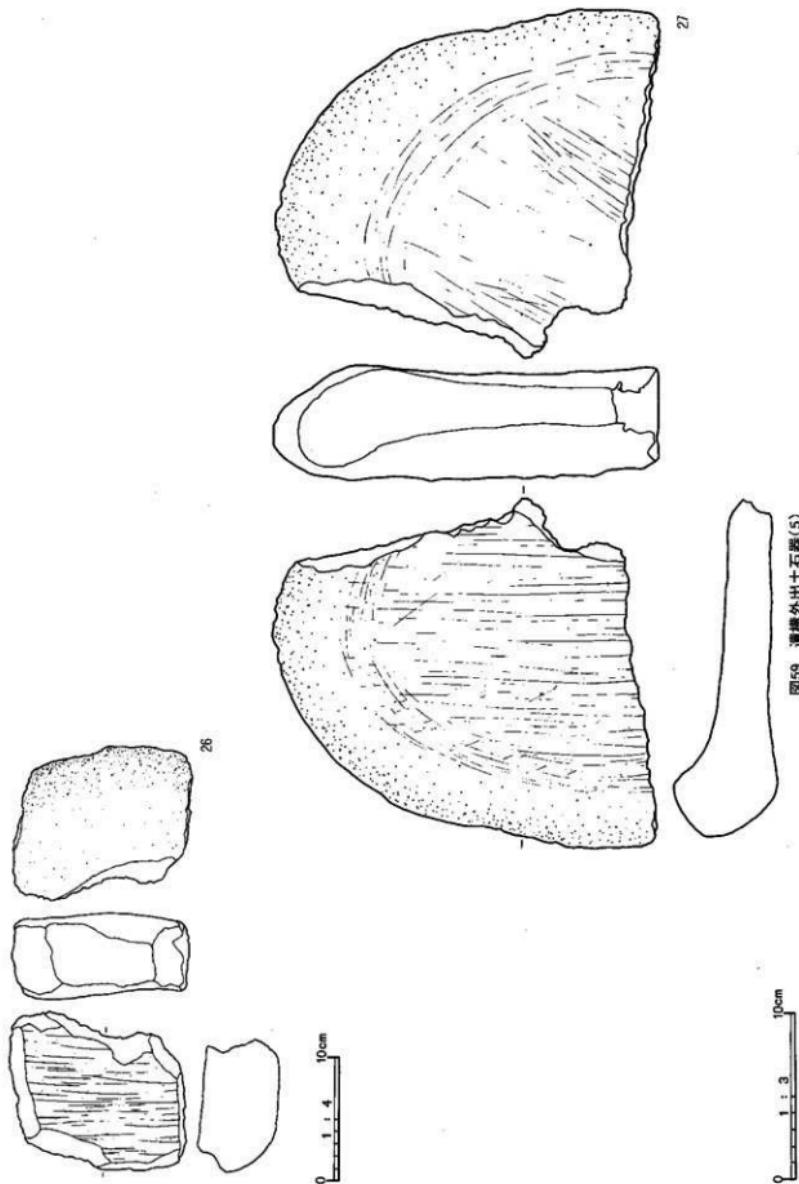


図58 遺構外出土石器(4)

図59 通縫外出土石器(5)



遺物観察表凡例

観察表に示した略号等は下記のとおりである。

縄文土器観察表について

1 炭化物に関するもの

内=土器内面にのみ炭化物が付着、外=土器外面にのみ炭化物が付着

内外=土器の内面・外面の両方に炭化物が付着

2 内面調整方法については、特に以下の2つを略号で表記した。

A=ミガキ、B=その他工具痕が明瞭なもの

3 内面調整方向は部位によって異なるのが普通であるが、部位を特に表記していない。複数の方向に調整されているものについては、より顕著に確認できた方を接頭するようにした。

土師器・須恵器観察表について

1 遺物観察表は実測図に表現できない項目を中心とした。

2 法量の単位はcmである。<>は現存値を、()は推定値を示す。

3 胎土への混入物の略号は以下のとおりである

W=白色粒子(White)、B=黒色粒子(Black)、R=赤色粒子(Red)、

C=透明粒子(Clear)、S=砂、粗=粗砂、針=鹿縄骨針、土(土器片粉末)を示す。

4 色調は標準土色帳に基づいた表記であり、その近似色を含む。

5 焼成は良好なものをA、不良なものをC、両者の中間をBとした。

6 残存率は実測図に示した部位における現存部の比率であり、器形全体に占める残存の度合いを示すものではない。

表2 遺構内出土縄文時代土器

井田	番号	通総	層位	口 番	文 標	内面調整	内調方向	炭化物	外側色	内面色	分類	備 考
岡田	1	SI-11	床面		条痕	B	横	7.SYR6/6褐色	7.SYR4/4褐色	N-1	埋蔵土器、砂粒混入	
	2	SI-11	覆土		RL斜回転	B	横・斜	外	7.SYR3/6褐色	7.SYR6/6褐色	N-1	内外面赤色剥離付着
	3	SI-12	覆土		絆支脚1個?	A			7.SYR6/4C.5-1褐色	7.SYR6/4C.5-1褐色	H	縄織混入
	4	SI-12	3層		RL斜回転	A		内外	10YR6/1褐色	10YR7/4C.5-1褐色	N	
	5	SI-12	1層		RL				10YR6/4C.5-1褐色	7.SYR6/6褐色	N	砂粒混入
	6	SI-12	覆土		条痕	A	横・斜	外	10YR6/8褐色	10YR7/4C.5-1褐色	N-1	BA-38II層の破片と接合
	7	SI-12	3層		RL斜回転		斜・横	内外	10YR6/2C褐色	10YR5/2C褐色	N-2	
岡田	8	SI-13	1層		沈跡、RL斜回転	B	横・斜	2.5SYR5/5H褐色	SYR7/6褐色	N-1-a		
	9	SI-13	覆土	小波状	沈跡、壁、LR	A	横	外	2.5SYR6/6褐色	2.5SYR6/6褐色	N-2-b	BA-37II層の破片と接合
	10	SI-13	覆土		条痕	A			10YR6/3C.5-1褐色	N4/灰色	N-1	鉛灰
	11	SI-13	覆土		条痕	A		内	10YR6/3C.5-1褐色	2.SY2/1黒色	N-1	
	12	SI-13	覆土		RL		横・斜		10YR6/4C.5-1褐色	10YR7/4C.5-1褐色	N	
	14	SK-11	覆土		LR?				10YR5/3C.5-1褐色	7.SYR7/4C.5-1褐色	I	17と同一個体
	16	SK-13	覆土		R単輪器外径第1A類				10YR5/3C.5-1褐色	10YR7/3C.5-1褐色	E	縄織・砂粒混入
	17	SK-13	覆土		R単輪器外径第1A類				10YR7/4C.5-1褐色	10YR7/3C.5-1褐色		
	18	SK-16	覆土		輪文	B	横	内	7.SYR6/4C.5-1褐色	10YR7/4C.5-1褐色	H	砂粒混入
	19	SK-17	2層		沈跡、輪文				2.5Y7/1灰白色	2.5Y7/1灰白色	N-1-c	砂粒混入
	20	SK-17	2層		LR	A			10YR6/2C褐色	10YR7/4C.5-1褐色	III-N	

表3 遺構外出土縄文時代土器

井田	番号	出土地名	層位	口 番	文 標	内面調整	内調方向	炭化物	外側色	内面色	分類	備 考
BF44	1	AR-37危			LR単輪器外径第1類	A	底・横	SYR6/4C.5-1褐色	SYR5/6褐色	I-1	2と同一個体、鉛錐混入	
	2	AQ-36			LR単輪器外径第1類	A	底	7.SYR7/6褐色	SYR5/6褐色	I-1	縄織混入、底部	
	3	BG-21	II層		絆支脚1個(LR, RL)	A	横	7.SYR8/4C褐色	7.SYR7/4C.5-1褐色	I-2-a	4と同一個体	
	4	BF-22			絆支脚1個(LR, RL)	A	横	7.SYR6/4C.5-1褐色	7.SYR6/4C.5-1褐色	I-2-a		
	5	BD-23			R直底、RLR	A	横	7.SYR6/4C.5-1褐色	7.SYR6/4C.5-1褐色	I-2-b	縄織混入	
	6	BF-22			R直底	A	横	外	7.SYR7/4C.5-1褐色	7.SYR6/4C.5-1褐色	I-2-b	縄織混入
	7	BA-44	II層	LR	R直底	A	横	7.SYR7/6褐色	7.SYR6/6褐色	I-2-b		
	8	AT-32			RL直底、始付(正底)				7.SYR4/3褐色	7.SYR6/4C.5-1褐色	I-2-c	縄織・砂粒混入
	9	BF-22		L-R直底	L-R直底	A	横・斜	7.SYR7/4C.5-1褐色	7.SYR5/3C.5-1褐色	H-1	10と同一個体	
	10	BC-22			L-R直底、始付(斜底)	A	横	SYR6/6褐色	7.SYR6/4C.5-1褐色	H-1		

件番	番号	出土地点	層位	口 番	文 標	前面碑板	内牌方向	灰化物	外表面	内面色	分類	備考
図44	11	BD-24	R区	R区底	R+LR压痕、貼付（R区底）、LR	A	横	2.5YR6/6暗褐色	2.5YR5/6明小褐色	II-1	12と同一個体	
	12	BF-21		R+LR压痕	R+LR压痕、貼付（R区底）	A	横	7.5YR6/4C.5V-褐色	7.5YR7/6褐色	II-1		
	13	BD-21	II層	貼付による肥厚	L+R区底	A	横	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	II-1		
	14	BC-25	II層		R半輪形条件第1種压痕	A	横	7.5YR6/4にぶい褐色	5YR6/6褐色	II-1	15と同一個体	
	15	AY-40	II層		貼付（R半輪形条件第1種压痕）、LR	A		7.5YR7/4C.5V-褐色	5YR7/6褐色	II-1	粘物混入	
	16	BE-22	LR压痕	R压痕、貼付（LR压痕）、LR	A	横	7.5YR7/4にぶい褐色	5YR5/6灰赤褐色	II-1			
	17	BH-21	II層	貼付による肥厚、R压痕	LR压痕	A	横	10VR8/3浅黃褐色	10VR8/3浅黃褐色	II-1	18と同一個体	
	18	BH-21	II層		貼付（压痕）、RLR、被施山形文	A	横	10VR8/3浅黃褐色	N4/灰色	II-1		
	19	BD-21	II層		LR压痕、貼付（LR压痕）	A		5YR6/6褐色	5YR5/6同色	II-1		
図45	20	BE-22		標（？）による押印	R+LR压痕、薄状貼付（压痕）、貼付（R压痕）	A	横	7.5YR6/4C.5V-褐色	7.5YR6/4C.5V-褐色	II-1		
	21	BC-22	R区底		L+R区底、貼付（R区底）	A	横	10VR7/3C.5V-褐色	7.5YR6/6褐色	II-1	粘物混入	
	22	BF-22			R半輪形条件第1種？	A	横	10VR6/3灰褐色	10VR6/3C.5V-褐色	II-1	粘物混入	
	23	BG-21	竹籠	R区底	L+R压痕、LR	A		10VR7/3C.5V-褐色	10VR6/3C.5V-褐色	II-1		
	24	AL-47	II層		貼付（压痕）、RLR	A		5YR5/6明赤褐色	5YR4/6赤褐色	II-1		
	25	BF-21			LR压痕、貼付（R+LR压痕）	A		7.5YR6/4C.5V-褐色	7.5YR5/6灰赤褐色	II-1		
	26	BC-24			LR压痕			7.5YR6/6褐色	2.5YR6/1黄褐色	II-1	粘物混入	
	27	AZ-41	II層		L+R压痕、貼付、LK	A		10VR5/3C.5V-褐色	10VR5/1灰褐色	II-1		
	28	BF-22			L+R压痕、貼付（L+R压痕）	A	横・斜	7.5YR6/4にぶい褐色	7.5YR5/3にぶい褐色	II-1		
	29	BE-21他	II層	L+R区底	L+R压痕、貼付（L+R压痕）、結束第1種	A	横・黄	7.5YR7/6褐色	5YR6/6褐色	II-2	30と同一個体	
	30	BD-24他			結束第1種	A	横	7.5YR7/6褐色	5YR6/6褐色	II-2		
	31	B 区	実探	実起頂部平坦	貼付（L压痕）、貫通孔、側突、RL		横	10VR4/2灰褐色	10YR5/6深褐色	II-3		
図46	32	BB-36他	II層		L压痕、貼付（L压痕）、側突、結束第1種			10YR7/4にぶい褐色	10YR8/6暗褐色	II-3	33とサニ窓台	
	33	AI-4R	実探		貼付（RL压痕）、RL	A	横	10YR6/4C.5V-褐色	10YR5/4C.5V-褐色	II-4	実起裏面にも貼付	
	34	B 区	實探		折返口標？、貼付、RL		横	7.5YR6/4にぶい褐色	7.5YR6/4C.5V-褐色	II-4	実起裏面にも貼付	
	35	AK-48	實探		貼付、RL？		横	10YR7/3C.5V-褐色	10YR7/3C.5V-褐色	II-4	裏文底文後貼付	
	36	BF-22			貼付（L+R压痕）			7.5YR6/4にぶい褐色	7.5YR6/4C.5V-褐色	II-4		
	37	B 区	實探	RL压痕	貼付、RL、条痕？	A	横	10YR6/4にぶい褐色	7.5YR7/4C.5V-褐色	II-4	38と同一個体	
	38	AP-39		RL压痕	貼付、RL			10YR6/4にぶい褐色	7.5YR7/4C.5V-褐色	II-4	裏文底文後貼付	
図47	39	BB-33	II層	貼み、外縫	織物の敷物標、LR（被・側突）		横・縫	7.5YR6/4C.5V-褐色	7.5YR7/6褐色	II-5		
	40	AI-44		貼み、外縫	RL压痕、沈線			7.5YR7/4にぶい褐色	10YR7/2にぶい褐色	II-5	41と同一個体	
	41	AI-47			沈線、RL压痕？			7.5YR5/3C.5V-褐色	10YR8/3深褐色	II-5	粘物混入	
	42	BC-25他	II層	LR	結束第1種（LR+LR）	A	横	10YR8/4浅黃褐色	10YR8/3浅黃褐色	II-6	43と同一個体	
	43	BD-21他			結束第1種（LR+LR）	A	横	10YR8/3浅黃褐色	10YR8/3深褐色	II-6		
	44	BB-23		RL？	RL压痕、RL		横・斜	10YR7/3にぶい褐色	10YR7/2にぶい褐色	II-6		
	45	AO-39			RL压痕、RL			10YR5/4C.5V-褐色	10YR5/4C.5V-褐色	II-6		

標記	番号	出土地点	層位	口 番	文 標	内面調整	内面方向	底化物	外面色	内面色	分類	備 考
国47	46	AK-36	II層	粘による押圧	貼付(L.压痕・押圧)、LR				7.SYR5/4にぶい褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	II-6	
	47	BF-21			貼付(L.压痕)、織文				7.SYR6/6褐色	10YR6/4にぶい黄褐色	II-6	
	48	AQ-32			沈縫、LR	A	外	10YR6/4底灰褐色	10YR6/3底灰褐色	II-7	48と同一個体	
	49	B区	実探		沈縫、LR	A		10YR7/2Cにぶい黄褐色	10YR6/3Cにぶい黄褐色	II-7		
	50	AQ-32			沈縫、織文斜凹軸	A	紙	10YR7/4Cにぶい黄褐色	7.SYR6/6褐色	II-8		
	51	AQ-32			円形刺繡、織文			7.SYR7/6褐色	SYR6/6褐色	II-8	器面磨耗	
	52	AT-32	実探		沈縫、LR斜凹軸	A	紙	7.SYR5/3Cにぶい褐色	7.SYR6/4Cにぶい褐色	II-8	器面磨耗	
国48	53	AK-36	II層		沈縫、L	B	紙	10YR6/3Cにぶい黄褐色	7.SYR4/2R褐色	III-1-a	54と同一個体	
	54	AJ-37	II層		沈縫、L			10YR7/4Cにぶい黄褐色	2.5Y4/1黄白色	III-1-a		
	55	SI-01	カマド		沈縫、LR	B	紙	10YR7/4Cにぶい黄褐色	10YR8/3底黄褐色	III-1-b	56・57と同一個体	
	56	SI-01	覆土		沈縫、LR	B	紙	10YR7/4Cにぶい黄褐色	10YR6/4Cにぶい黄褐色	III-1-b		
	57	SI-01	覆土		沈縫、LR	B	質・紙	10YR7/4Cにぶい黄褐色	10YR7/3Cにぶい黄褐色	III-1-b	外縁接合	
	58	SI-03	覆土	貼付による肥厚	沈縫、RL?		紙	7.SYR8/3底黄褐色	10YR8/3底黄褐色	III-1-b		
	59	AI-43	II層	貼付による肥厚	沈縫、RL	A	紙	7.SYR6/4Cにぶい褐色	7.SYR5/6褐色	III-1-b	60~64と同一個体	
	60	SI-03	覆土		沈縫、RL?	A		10YR7/4Cにぶい黄褐色	7.SYR6/4Cにぶい褐色	III-1-b		
	61	SI-03	覆土		沈縫、RL?	A	紙	10YR6/4Cにぶい黄褐色	7.SYR6/4Cにぶい褐色	III-1-b		
	62	AI-44			沈縫、RL	A		10YR6/3Cにぶい黄褐色	7.SYR6/4Cにぶい褐色	III-1-b		
	63	SI-03	覆土		沈縫、RL?			7.SYR8/3底黄褐色	SYR6/6褐色	III-1-b		
	64	AH-43	II層		沈縫、織文	A	紙	10YR7/3Cにぶい黄褐色	7.SYR6/4Cにぶい褐色	III-1-b		
	65	AI-42			沈縫、LR	B	紙	10YR6/3Cにぶい黄褐色	10YR5/3Cにぶい黄褐色	III-1-b	66と同一個体	
	66	AJ-41他			沈縫、LR	B	紙	10YR4/1底灰褐色	10YR5/2底黄褐色	III-1-b		
	67	AJ-42			LR、沈縫、附着	A	底	10YR4/1底灰色	7.SYR6/2R褐色	III-1-b		
	68	AY-45	II層		沈縫、織文	A	紙	SYR6/6褐色	10YR6/2C黄褐色	III-1-b	69と同一個体?	
	69	AY-45	II層		沈縫、織文			7.SYR7/6褐色	10YR6/2C黄褐色	III-1-b		
	70	AK-47	II層		織文、沈縫、唇痕			10YR7/2Cにぶい黄褐色	10YR7/1底白色	III-1-b		
	71	AJ-45		貼付による肥厚	沈縫	A	紙	10YR5/1底黒色	10YR5/2底黄褐色	III-2-a	72と同一個体	
	72	AJ-47			沈縫		質・紙	7.SYR7/4Cにぶい褐色	7.SYR6/4Cにぶい褐色	III-2-a		
	73	BF-12	II層		沈縫			2.5YR5/4刺繡黒色	SYR5/6刺繡黒色	III-2-a		
	74	AJ-45			沈縫		外	10YR7/3Cにぶい黄褐色	10YR6/3Cにぶい黄褐色	III-2-a		
	75	BA-44	II層		沈縫、彌命状沈縫	A	紙	10YR7/3Cにぶい黄褐色	2.5Y5/2底灰褐色	III-2-b		
	76	AY-45	II層		沈縫、帶面状沈縫	A		2.5Y4/1質灰褐色	10YR6/1底灰褐色	III-2-b		
国49	77	AK-47	II層		沈縫	B	紙	10YR2/2黒褐色	2.5Y4/1黄白色	III-2-c	78と同一個体	
	78	AK-47	II層		沈縫	B	紙	10YR2/2黒褐色	2.5Y4/1黄白色	III-2-c	形状異常	
	79	AU-46	II層		沈縫、短伏縫	B	紙	10YR7/4Cにぶい黄褐色	10YR7/3Cにぶい黄褐色	III-2-c		
	80	SI-01	覆土	織文		A	紙	10YR8/3底灰褐色	10YR8/3底灰褐色	III		

特徴	番号	出土地点	層位	口 番	文 標	内面調整	内面方向	炭化物	外顔色	内顔色	分類	備 考
国69	81	SI-03	覆土	織文	付加条	B	横	外	10VR3/2黒褐色	10YR3/2黒褐色	Ⅲ	
	82	AJ-39		織文					10YR5/2灰黃褐色	10YR5/3灰い黄褐色	Ⅲ	
	83	BC-13	II層	沈縫、LR		B	横		7.SYR7/6緑色	10YR6/6明黄色	Ⅲ	
	84	AY-45	II層	LR斜凹4?		B	横		7.SYR6/6緑色	10YR5/4灰い黄褐色	Ⅲ?	
	85	BC-34	II層	変形	RL	B	横	外	3VR6/4C灰い黄褐色	10YR7/4C灰い黄褐色	Ⅳ-1-a	
国70	86	BC-32	II層		RL	B	横・直		7.SYR8/4C灰い黄褐色	7.SYR6/6褐色	Ⅳ-1-a	
	87	BC-33	II層	LR斜凹軸			内外		7.SYR8/4C灰い黄褐色	7.SYR7/4C灰い緑色	Ⅳ-1-a	
	88	BC-34	II層	折返口縫、RL		B	横		7.SYR6/6緑色	10YR6/6明黄色	Ⅳ-1-a	
	89	BF-32地		RL斜凹軸		A	横		2.SYR5/6灰褐色	2.SYR5/6灰褐色	Ⅳ-1-a	砂粒混入
	90	BB-32	II層		RL	B	横	外	10YR6/4C灰い黄褐色	10YR7/2C灰い黄褐色	Ⅳ-1-a	
	91	AZ-35地	II層	RL斜凹軸		B	横		10VR7/3C灰い黄褐色	7.SYR7/6緑色	Ⅳ-1-a	
	92	BA-41	II層		RL				7.SYR7/4C灰い黄褐色	10YR6/2C灰褐色	Ⅳ-1-a	
	93	BA-44	II層	変な小段状	LR			外	N3暗褐色	10YR8/4C灰い黄褐色	Ⅳ-1-a	
国71	94	BA-30地	II層	折返口縫、LR		B	直	外	10YR7/3C灰い黄褐色	10YR6/3C灰い黄褐色	Ⅳ-1-a	
	95	BC-23		LR		B	横・斜	内外	10VR4/3C灰い黄褐色	10YR5/4C灰い黄褐色	Ⅳ-1-a	砂粒混入
	96	BA-44	II層	LR		B	直	外	10YR7/6明黄色	10YR7/4C灰い黄褐色	Ⅳ-1-a	
	97	BC-13地	II層	小段状?	LL	B	横・斜		5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	Ⅳ-1-a	
	98	BC-23		折返口縫、LR		B	横・直	外	10YR6/2C灰褐色	10YR6/4C灰い黄褐色	Ⅳ-1-a	
	99	BF-21		押圧	RL	A	直	外	10YR8/3C灰褐色	10YR7/2C灰い黄褐色	Ⅳ-1-a	
	100	AY-40	II層	押圧による肥厚、平坦	LR	A	直	外	10YR7/3C灰い黄褐色	10YR8/3C灰褐色	Ⅳ-1-a	織文時代鉢?
	101	BA-43	II層		RL	A	横	外	10YR5/4C灰い黄褐色	10YR6/3C灰い黄褐色	Ⅳ-1-a	
	102	AS-34		LR		A	横		10YR6/2K灰褐色	10YR6/2K灰褐色	Ⅳ-1-a	
	103	BA-30	II層	LR		B	横		10YR7/3C灰い黄褐色	10YR7/2C灰い黄褐色	Ⅳ-1-a	
	104	BA-30	II層	折返口縫、LR		A	横		10YR7/2C灰い黄褐色	10YR7/2C灰い黄褐色	Ⅳ-1-a	
	105	AV-43	II層	LR		B	横		7.SYR7/6緑色	10YR7/3C灰い黄褐色	Ⅳ-1-a	
	106	BB-22	II層		RL		直		7.SYR6/4C灰い緑色	10YR7/3C灰い黄褐色	Ⅳ-1-a	
	107	AZ-43地	II層	RL					10YR7/6明黄色	7.SYR5/4C灰い褐色	Ⅳ-1-a	
	108	BA-33	II層	沈縫、RL		B	横・斜		10YR6/3C灰い黄褐色	10YR7/3C灰い黄褐色	Ⅳ-1-b	
	109	BA-44	II層	沈縫、RL斜凹軸			外		10YR7/3C灰い黄褐色	10YR7/2C灰い黄褐色	Ⅳ-1-b	
	110	BC-34	II層	小段状	沈縫、RL斜凹軸	A	横	外	10YR5/2K灰褐色	10YR5/2灰褐色	Ⅳ-1-b	
	111	BA-35	II層	小段状	RL	A	横	内外	10YR7/3C灰い黄褐色	10YR7/2C灰白色	Ⅳ-1-b	
	112	BC-33	II層	小段状	沈縫、LR	B	横	内	10YR5/2K灰褐色	10YR8/2灰褐色	Ⅳ-1-b	
	113	BC-32	II層	小段状	沈縫、RL斜凹軸	B	横		10YR6/2灰褐色	10YR6/2灰褐色	Ⅳ-1-b	
	114	BA-33	II層	小段状	条痕				5YR6/1青灰色	7.SYR7/6緑色	Ⅳ-1-c	砂粒混入
国72	115	BB-32	II層	条痕		A	横・斜	外	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	Ⅳ-1-c	

博認番号	出土地点	層位	口 番	文 標	内面調整	内調方向	层化期	外面色	内面色	分類	備 考
国SS 116	BH-37船	II層	小波状	沈縫、条痕	B	継・斜	内外	10YR6/4C.5V-黄褐色	10YR3/1黒褐色	N-1-d	
117	BA-33	II層		沈縫、条痕	B	斜		5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	N-1-d	
118	BA-38	II層	小波状	沈縫、条痕	A	横	外	10YR3/1黒褐色	2-SV7/3浅黄色	N-1-d	
119	AZ-35	II層	小波状	LR縫開化、条痕？	B	斜	外	7.5YR7/4C.5V-黄褐色	7.5YR6/4C.5V-黄褐色	N-1	
120	AI-44	夷抜		施文透、LR	B	横		7.5YR6/4C.5V-黄褐色	7.5YR5/4C.5V-黄褐色	N-1	
121	BA-41	II層		RL、底面に渦巻状沈縫	B	底	外	10YR6/2灰黃褐色	10YR6/2灰黃褐色	N-1 底部	
122	BA-44船	II層	小波状	沈縫、列点文、RL	A	横・斜	内外	7.5YR3/1黒褐色	10YR3/1黒褐色	N-2-a 内面にも沈縫有	
123	BA-43	II層	小波状	沈縫？、列点文、LR	横	内外		7.5YR6/4浅褐色	10YR8/4浅黃褐色	N-2-a	
124	BA-43	II層		沈縫内刺み目、横、LR				10YR8/3浅黃褐色	10YR8/3浅黃褐色	N-2-a	
125	BA-35	II層	小波状	沈縫内刺み目、RL	A	横		7.5YR6/4C.5V-黄褐色	10YR6/4C.5V-黄褐色	N-2-a	
126	AY-43	II層		押所による小波状	沈縫、列点文	横		10YR6/3C.5V-黄褐色	7.5YR6/4C.5V-黄褐色	N-2-a	
127	AV-41	II層	小波状	沈縫内刺み目、横、LR	A	横	内	7.5YR2/1黑色	10YR3/1黒褐色	N-2-a	
128	AV-45	II層		沈縫内刺み目、横、LR	A	横	内	7.5YR3/1黒褐色	7.5YR3/2黑褐色	N-2-a 内面にも沈縫有	
129	BC-32	II層	小波状	沈縫内刺み目、LR斜回転	A	横		10YR7/4C.5V-黄褐色	10YR8/2灰黃褐色	N-2-a	
130	BA-38船	II層	小波状	沈縫、RL	A	横・斜	内外	10YR4/3C.5V-黄褐色	10YR3/1黒褐色	N-2-b 内面にも沈縫有	
131	BB-32	II層	小波状	沈縫、RL	A	横	内外	10YR3/1黒褐色	10YR3/1黒褐色	N-2-b 内面にも沈縫有	
132	BC-32	II層	小波状	沈縫、横、RL	A	横	内外	10YR3/1黒褐色	10YR3/1黒褐色	N-2-b 内面にも沈縫有	
国SS 133	BC-33	II層	突起、沈縫	沈縫、RL斜回転	A	横		10YR7/4C.5V-黄褐色	10YR7/4C.5V-黄褐色	N-2-b 内面にも沈縫有	
134	BC-33	II層	小波状	沈縫、RL斜回転	A	横	内外	7.5YR7/4C.5V-黄褐色	10YR6/4C.5V-黄褐色	N-2-b	
135	BB-32	II層		沈縫、横、LR斜回転	横	内		5YR6/6褐色	10YR4/1褐灰色	N-2-b	
136	AQ-32	II層	小波状	沈縫、横、RL斜回転	横	内外		10YR7/4C.5V-黄褐色	10YR5/2灰黃褐色	N-2-b	
137	BC-33	II層	沈縫	沈縫	横	内		2.5Y6/1黒灰色	10YR6/3C.5V-黄褐色	N-2-b	
138	BC-33	II層	沈縫	条纹？	横	内外		7.5YR7/4C.5V-黄褐色	10YR4/2IC.5V-黄褐色	N-2-b	
139	AZ-35	II層	小波状	沈縫、列点文？	B	横	外	7.5YR6/4C.5V-黄褐色	7.5YR6/4C.5V-黄褐色	N-2-b	
140	HC-33	II層	小波状	沈縫、RL	B	横		10YR8/3浅黃褐色	10YR6/4C.5V-黄褐色	N-2-b	
141	BC-33	II層		沈縫、RL		内		10YR7/4C.5V-黄褐色	10YR8/4浅黃褐色	N-2-b 口縫部破損	
142	BC-33	II層	小波状	沈縫、RL斜回転	A	横	内外	5YR6/6褐色	5YR7/6褐色	N-2-c 内面にも沈縫有、施文透文ナナ?	
143	AY-43	II層		沈縫、1.ガキ、RL	A	横	内外	7.5YR6/6褐色	10YR7/4C.5V-黄褐色	N-2-c	
144	AZ-35船	II層	小波状、沈縫	沈縫、横、RL斜回転			内外	7.5YR6/6褐色	7.5YR7/6褐色	N-2-c	
145	HA-38	II層	小波状	沈縫、横、RL斜回転	A	横		7.5YR7/6褐色	7.5YR6/6褐色	N-2-c	
146	BC-32	II層	突起、比較	沈縫、1.ガキ	A			10YR7/4C.5V-黄褐色	10YR6/4C.5V-黄褐色	N-2-c 内面にも沈縫有	
147	BC-33	II層	突起、沈縫	沈縫、RL斜回転	横			5YR6/6褐色	10YR8/2灰白色	N-2-c 内面にも沈縫有、砂粒混入	
148	BC-33	II層	突起、沈縫、刻斗	沈縫、露透文(RL)	A	横	内外	5YR7/6褐色	10YR3/1黒褐色	N-2-c 内面にも沈縫有	
149	BC-33	II層	小波状	沈縫、1.ガキ、RL斜回転	A	横・斜	内	10YR7/4C.5V-黄褐色	10YR3/1黒褐色	N-2-c	
150	BC-33	II層	突起、沈縫	沈縫、1.ガキ	A	横		10YR6/2灰黃褐色	10YR5/3C.5V-黄褐色	N-2-c	

構造番号	出土地点	層位	口 番	文 標	内面調整	内調方向	炭化物	外面色	内面色	分類	備 考
BB53	BA - 33	II層		沈縫、I ガキ、繩文斜彎	B	横	10YR4/1灰褐色	10YR4/2灰褐色	N-2-c	内面にも沈縫有	
152	BA - 36	II層		沈縫、I ガキ、LR斜彎	A	横	7.5YR5/4にぶい褐色	2.5Y5/2黄褐色	N-2-c		
153	BH - 38	II層		沈縫、繩、RL斜彎			10YR7/4Cにぶい黄褐色	10YR7/3Cにぶい黄褐色	N-2-c		
154	BA - 36	II層	小波状	沈縫、I ガキ、繩、LR斜彎	A	横	2.5YR6/6褐色	10YR7/3Cにぶい黄褐色	N-2-c		
155	BA - 41	II層		沈縫、I ガキ	B	横	10YR7/6赤褐色	7.5YR7/4Cにぶい褐色	N-2-c		
156	BB - 32	II層	鉢み	沈縫、RL	B	横	7.5YR6/4にぶい褐色	7.5YR7/6褐色	N-2-c		
157	BC - 34	II層	小波状	沈縫、RL斜彎	A	横	2.5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	N-2-c		
BB54	BA - 33	II層	小波状	沈縫、LR	A	横	7.5YR7/6褐色	7.5YR7/6褐色	N-2-c		
159	BC - 32	II層	小波状	沈縫	A		10YR7/4Cにぶい褐色	10YR7/3Cにぶい黄褐色	N-2-c		
160	AY - 44	II層		沈縫、I ガキ、繩	A	横	10YR4/1灰褐色	7.5YR6/6褐色	N-2-c		
161	不規	II層	小波状	沈縫、LR			7.5YR6/4にぶい褐色	10YR6/3Cにぶい黄褐色	N-2-c		
162	BC - 33	II層		沈縫、繩、KL斜彎	A		5YR5/4にぶい赤褐色	5YR5/4にぶい赤褐色	N-2-c	内面にも沈縫有	
163	BA - 30	II層		繩形文？ (LR)	A		10YR7/4Cにぶい褐色	10YR7/4Cにぶい黄褐色	N-2		
164	BC - 14	II層		LR、台脚無			7.5YR5/4灰褐色	7.5YR7/4にぶい褐色	N-2		
165	AY - 43	II層		沈縫、透かし			5YR6/6褐色	7.5YR5/6褐色	N-2	台脚	
166	AY - 45	II層		沈縫、糞丸文、RL?			2.5YR6/8褐色	2.5YR6/6褐色	N-2	台脚	
167	BC - 33	II層		沈縫、LR	B	横	2.5Y5/1灰褐色	10YR5/2C黄褐色	N-2	底部	
168	BA - 44	II層		繩文			10YR5/6黄褐色	10YR5/4灰褐色	N-3	底部のみ。口徑約110mm	
169	AY - 42	II層	穴起	沈縫	B	横	10YR7/3Cにぶい黄褐色	2.5Y4/1灰褐色	N-3	底部のみ	
170	AY - 42	II層		沈縫開け込み、芯	A		10YR5/1灰褐色	10YR4/2C黃褐色	N-3		
171	BA - 33	II層		沈縫開け込み、縦、書妙文			10YR4/4灰褐色	10YR5/4灰褐色	N-3		
172	BC - 34	II層	平坦	繩文	A	廣	10YR6/3Cにぶい灰褐色	10YR6/4Cにぶい黄褐色	N-4	外面：オキ	
173	AM - 30	II層		繩文、底部沈縫	B	横	10YR5/3灰褐色	10YR6/4Cにぶい黄褐色	N-4	底部、外側：オキ	
174	BC - 32	II層		沈縫、繩形文 (LR)	A		10YR7/2Cにぶい黄褐色	10YR7/2Cにぶい黄褐色	N-4		
175	BA - 41	II層		沈縫開け込み、繩形文 (LR)	A		7.5YR6/4Cにぶい褐色	10YR6/3Cにぶい黄褐色	N-4		
176	BC - 34	II層		沈縫、繩形文	A		10YR5/4灰褐色	7.5YR7/4C-G-5にぶい褐色	N-4		
177	AU - 30	II層		沈縫開け込み、高文形文 (LR)	B	横	5YR6/6褐色	10YR5/6赤褐色	N		
178	BC - 44	II層		高文形文 (LR)	A		10YR2/1褐色	10YR4/2灰褐色	N	外側漆塗布？	
179	BC - 33	II層		繩形文	A		10YR8/3灰褐色	10YR7/3Cにぶい黄褐色	N		
180	AY - 45	II層		高形文	B	廣	5YR7/6褐色	7.5YR6/4Cにぶい褐色	N		
181	AZ - 38	II層		繩文、滑修丸			7.5YR7/6褐色	2.5Y7/8灰褐色	N-7		
182	AI - 42	II層		沈縫、RL斜彎			外 7.5YR6/4Cにぶい褐色	10YR2/4にぶい黄褐色	V		
183	AJ - 43	II層		繩文、滑修丸			7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR5/4にぶい褐色			

表4 平安時代土器

探査	番号	通称名	出土位置・層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	外表面	内面色	焼成	残存(%)	備考
Iw40	1	SI-01	覆土	土師器	甕	(13.8)	13.2	7.2	S・針	褐色	にぶい褐色	B	40	口縁焼ナデ
	2	SI-01	4 番	土師器	甕	(19.7)	<24.2>	—	粗・針	褐色	褐色	B	40	口縁焼ナデ
	3	SI-01	Pt3内	土師器	甕	(22.4)	30.3	10.2	粗・土	にぶい褐色	浅黄褐色	A	80	口縁焼ナデ
	4	SI-01	Pt3内	土師器	甕	13.4	<9.3>	—	S・土	褐色	褐色	B	60	口縁焼ナデ
	5	SI-01	カマド内	土師器	甕	—	<8.0>	8.2	粗・土	褐色	浅黄褐色	A	80	支脚に転用
	6	SI-02	カマド内	土師器	甕	16.0	<9.8>	—	S	浅黄褐色	浅黄褐色	B	50	
Iw41	7	SI-03	覆土	土師器	坏	—	<3.1>	—	B・C	褐色	黑色	A	40	内面黒色処理、底部回転系切
	8	SI-03	覆土	須恵器	甕	—	—	—	W・C	灰色	黑色	A	—	外周タタキ目痕
	9	SI-03	覆土	土師器	甕	—	<12.7>	7.0	S	にぶい褐色	にぶい黄褐色	A	40	
	10	SI-03	カマド内	土師器	甕	11.0	<13.0>	—	粗・土	にぶい褐色	浅黄褐色	B	80	二次焼成のためか表面剥落頗著
	11	SI-03	カマド内	土師器	甕	13.2	6.1	5.1	S	褐色	褐色	B	70	
	12	SI-04	カマド内・外	土師器	坏	12.4	6.1	5.4	B・C	浅黄褐色	にぶい褐色	B	60	底部回転系切
	13	SI-04	カマド内	土師器	盆	(32.0)	<17.2>	—	S・土	浅黄褐色	浅黄褐色	B	40	二次焼成のためか一部表面剥落
	14	SI-05	3個	土師器	坏	13.0	4.7	4.6	S・土	褐色	黄褐色	B	50	
	15	SI-05	覆土	土師器	坏	13.0	5.6	4.6	B・土・針	黄褐色	黑色	B	60	内面黒色処理、底部回転系切
	16	SI-05	覆土	土師器	甕	—	<10.0>	8.0	S・土	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	B	40	
	17	SI-05	カマド内	土師器	甕	14.4	15.1	5.4	S	褐色	にぶい褐色	C	80	
	18	SI-05	覆土	須恵器	甕	—	<3.0>	5.2	W・針	灰色	灰色	A	40	底部回転系切、内外面「十」字状火ダメキ痕
	19	SI-05	覆土	須恵器	坏	—	—	—	W・C	灰色	灰色	A	—	表面タタキ目痕
	20	SI-05	覆土	須恵器	甕	—	<2.2>	—	W	灰色	灰色	A	40	
	22	SI-06	カマド内	土師器	坏	(13.0)	<5.5>	—	S・土	褐色	褐色	B	60	
	23	SI-07	床面	土師器	坏	14.5	7.2	4.9	B・C	褐色	黑色	A	90	内面黒色処理、底部回転系切
	24	SI-07	床面	土師器	坏	13.9	6.6	5.6	B・C	にぶい褐色	黑色	A	100	内面黒色処理、底部回転系切
	25	SI-07	床面	土師器	坏	13.8	6.6	5.2	B	明黄褐色	黑色	A	100	内面黒色処理、底部回転系切
	26	SI-07	床面	土師器	坏	12.0	5.9	5.0	S	褐色	浅黄褐色	C	80	底部回転系切
	27	SI-07	覆土	土師器	坏	13.3	5.2	6.1	S・土	にぶい黄褐色	黑色	B	100	油煙付着、灯明具に転用
	28	SI-07	覆土	土師器	甕	—	<4.2>	8.8	粗	浅黄褐色	浅黄褐色	B	70	底部木葉痕
	29	SI-07	カマド内	土師器	甕	—	<11.0>	—	B・土・針	褐色	明赤褐色	B	70	
Iw43	32	SD-01	覆土	土師器	坏	12.2	5.8	5.4	S	浅黄褐色	浅黄褐色	C	80	底部回転系切
	33	SD-01	床面	土師器	甕	14.4	<7.25>	—	粗	にぶい褐色	にぶい褐色	B	80	口縁内側上部炭化物付着
	34	SI-10	床面	須恵器	坏	13.4	6.5	4.8	B・W	灰白	灰白	A	70	「大」字状剥落あり、内面「一」字状火ダメキ痕
	35	SI-10	覆土	土師器	盆	(28.2)	<15.5>	—	粗	にぶい褐色	浅黄褐色	B	30	
	36	SK-10	覆土	須恵器	盆	14.6	<7.6>	—	W・針	灰色	灰色	A	70	「大」字状剥落あり、SD-01出土破片と接合

表5 遺構内出土石器

探査	番号	器種	石質	造形	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
図10	13	石墨	石英安山岩	SI-13	覆土	14.7	14.4	6.7	1404.5	敲打痕も残る
	15	叩き石	流紋岩	SK-12	覆土	9.4	5.9	4.5	190.9	欠損
図42	21	砥石	流紋岩	SI-05	床面	14.9	8.7	6.4	552.8	平安時代
	30	磨り石	ヒノ岩	SI-07	カマド覆土	8.2	6.3	5.8	389.4	平安時代

表6 遺構外出土石器

探査	番号	器種	石質	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
図55	1	石旗	珪質頁岩	AY-37	II層	3.0	1.6	0.7	2.3	
	2	石旗	黒耀石	AK-41	II層	2.5	1.4	0.5	1.3	
	3	石旗	珪質頁岩	BC-34	II層	3.6	1.4	0.6	2.2	基部にアスファルト付着
	4	石旗	珪質頁岩	BG-21	II層	4.2	2.0	0.6	4.4	
	5	石匙	珪質頁岩	AZ-40	II層	6.4	1.9	0.6	8.0	
	6	二次加工ある剝片	珪質頁岩	BC-30	II層	3.9	3.3	1.0	8.5	
	7	二次加工ある剝片	珪質頁岩	BA-43	II層	5.3	4.8	1.7	28.7	
	8	二次加工ある剝片	珪質頁岩	BA-33	II層	4.9	4.3	1.2	20.0	
	9	二次加工ある剝片	珪質頁岩	BA-43	II層	5.7	4.4	1.8	39.8	
	10	二次加工ある剝片	細粒凝灰岩	AP-89	II層	7.7	4.6	1.5	39.9	
図56	11	二次加工ある剝片	珪質頁岩	AN-30	表採	6.6	5.9	3.1	110.2	
	12	二次加工ある剝片	珪質頁岩	BC-33	II層	7.6	4.6	1.9	49.6	
	13	使用痕ある剝片	珪質頁岩	BA-44	II層	7.0	3.3	1.8	24.9	
	14	石核	珪質頁岩	表採	4.2	8.2	5.6	171.5		
	15	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	AJ-41	表採	6.2	3.6	1.8	70.5	基部側欠損
図57	16	凹み石	凝灰岩	表採	13.2	7.8	3.1	365.2		
	17	凹み石	凝灰岩	BA-32	II層	8.5	5.4	3.8	236.7	欠損
	18	叩き石	凝灰岩	BA-33	II層	11.4	6.8	4.0	436.0	
	19	叩き石	凝灰岩	BA-35	II層	9.7	6.2	4.6	397.8	
	20	叩き石	流紋岩	BB-35	II層	11.7	4.8	3.4	253.9	
	21	磨り石	凝灰岩	BD-21	II層	8.9	9.4	3.2	389.1	欠損
	22	磨り石	凝灰岩	AZ-33	II層	13.6	5.4	4.2	430.3	
図58	23	磨り石	ヒノ岩	BB-37	II層	10.0	10.1	5.0	761.7	欠損
	24	磨り石	流紋岩	AH-44	表採	16.7	12.8	8.8	2804.7	欠損
	25	磨り石	ヒノ岩	BA-33	II層	12.2	10.3	6.4	1218.8	
図59	26	石墨	凝灰岩	AN-30	表採	10.8	9.5	5.3	686.3	欠損
	27	石墨	安山岩	BC-25	II層	31.3	28.5	9.4	7800.0	欠損

表7 第7号竪穴住居跡出土木柱

探査	番号	器種	断面	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	残存高(cm)	備考
図43	31	木柱	クリ	SI-07 Pit 4	34.0	8.5	24.0	第5章第2節参照

第4章 自然科学分析

自然科学分析は各節に示した3件を行った。第1節は住居跡の年代的な手がかりを得るために、第2節は住居構築材の樹種を知るために、第3節は焼土の由来を探るために行った。第1節、第2節の分析に関連しては次章で、第3節の分析に関連しては第3章で若干の考察を試みた。

第1節 放射性炭素年代測定結果

C14年代測定結果		青森県埋蔵文化財調査センター 様	990203
試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}\text{C}(\text{permil})$	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 137319	1390 ± 40	-27.2	1350 ± 40
試料名 (12894) IWATAR-1 (岩渡小谷(2)遺跡第1号竪穴住居跡床面出土炭化材)			
測定方法、期間 Standard-AMS			
試料種、前処理など charred material		acid-alkali-acid	
 Beta- 137320			
1250 ± 40			
-26.1			
1230 ± 40			
試料名 (12895) IWATAR-2 (岩渡小谷(2)遺跡第7号竪穴住居跡床面出土炭化材)			
測定方法、期間 Standard-AMS			
試料種、前処理など charred material		acid-alkali-acid	

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダンリフレンススタンダードは、国際的な慣例として、NBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(80%確率)である。

(株)地球科学研究所 〒468 名古屋市天白区植田本町1-608 TEL052-802-0703

2000年2月3日

1 / 1

青森県埋蔵文化財調査センター

様

(株)地球科学研究所

放射性炭素年代測定結果報告書

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

- ^{14}C age (y BP)** : ^{14}C 年代測定値
試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。
半減期として5568年を用いた。
- 補正 ^{14}C age (y BP)** : 補正 ^{14}C 年代値
試料の炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
- $\delta^{13}\text{C}$ (permil)** : 試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)
で表現する。
- $$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{試料}} - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{標準}}}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{標準}}} \times 1000$$
- ここで、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ [標準] = 0.0112372である。

- 層年代** : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動に対する補正により、層年代を
算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の測定、サンゴのU-Th年代と
 ^{14}C 年代の比較により、補正曲線を作成し、層年代を算出する。最新のデータベース(
"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al. 1998, Radiocarbon 40(3)
により約19000年までの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

測定方法などに関するデータ

- 測定方法** AMS : 加速器質量分析

- Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる β -線計数法

- 処理・調製・その他** : 試料の前処理、調製などの情報

- 前処理 acid-alkali-acid : 酸 - アルカリ - 酸洗浄
acid washes : 酸洗浄
acid etch : 酸によるエッティング
none : 未処理

調製、その他

- Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction : 木材のセルローズ抽出

- Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

- 分析機関** : BETA ANALYTIC INC.

- 4985 SW 74 Court, Miami, FL 33155, U.S.A.

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables:C13/C12=-27.2 lab mult.=1)

Laboratory Number: Beta-137319

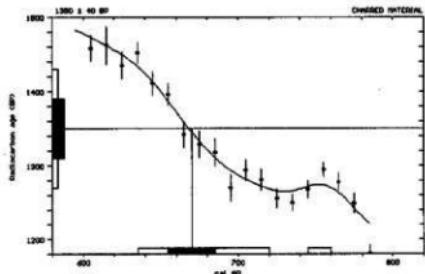
Conventional radiocarbon age: 1350 ± 40 BP

Calibrated results: cal AD 635 to 720 (Cal BP 1315 to 1230) and
(2 sigma, 95% probability) cal AD 745 to 760 (Cal BP 1295 to 1190)

Intercept data:

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: cal AD 670 (Cal BP 1280)

1 sigma calibrated results:
(68% probability) cal AD 655 to 685 (Cal BP 1295 to 1265)



References:

- Calibration Database*
- Editorial Comment*
- Stuiver, M., van der Plicht, H., 1986, Radiocarbon 28(3), p601-611.
- INTCAL13 Radiocarbon Age Calibration
- Stuiver, M. et al., 1990, Radiocarbon 32(3), p1061-1083.
- Mathematical
- A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
- Talma, A.S., Poggenpohl, J.C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-327.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33153 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)667-0964 • E-mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables:C13/C12=-26.1 lab mult.=1)

Laboratory Number: Beta-137320

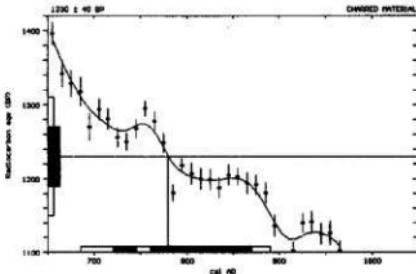
Conventional radiocarbon age: 1230 ± 40 BP

Calibrated results: cal AD 685 to 890 (Cal BP 1265 to 1060)
(2 sigma, 95% probability)

Intercept data:

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: cal AD 780 (Cal BP 1170)

1 sigma calibrated results:
(68% probability) cal AD 720 to 745 (Cal BP 1230 to 1205) and
cal AD 760 to 870 (Cal BP 1190 to 1080)



References:

- Calibration Database*
- Editorial Comment*
- Stuiver, M., van der Plicht, H., 1986, Radiocarbon 28(3), p601-611.
- INTCAL13 Radiocarbon Age Calibration
- Stuiver, M. et al., 1990, Radiocarbon 32(3), p1061-1083.
- Mathematical
- A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
- Talma, A.S., Poggenpohl, J.C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-327.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33153 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)667-0964 • E-mail: beta@radiocarbon.com

第2節 青森市岩渡小谷(2)遺跡出土材の樹種

高橋俊彦（木工舎「ゆい」）

1. 試料

試料は炭化材10点と非炭化材（以下「材」と呼ぶ）1点である。いずれも平安時代（10世紀前後）のものとされる3基の堅穴住居跡（SI-01・SI-06・SI-07）から検出されたものである。作業の便宜のために試料にはNo.1-11の仮試料番号を付けた（表1参照）。

No.1-3はSI-01の床面から、No.5-8はSI-07の床面直上から、No.4とNo.9-10はそれぞれSI-06とSI-07のカマド覆土中から検出された炭化材である。用途などは明らかにされていない。No.11（材）はSI-07の柱材である。

遺跡は沖館川右岸の西側に緩やかに傾斜した丘陵地上（標高45m前後）に立地している。

2. 方法

作業には調査担当者により採取・送付された材片試料を用いた。炭化材は室内で自然乾燥させたのち、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）3断面を作製し、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（SEM、加速電圧10kV）で観察・同定した。材は剃刀の刃を用いて木口・柾目・板目3面の徒手切片を作製し、ガム・クロラールで封入したプレパラートを生物顕微鏡で観察・同定した。併せて各分類群1点の電子顕微鏡写真図版を作成した（図版1）。SEM観察にあたっては（株）ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝いたします。なお、作製したプレパラートと残った炭化材、ネガ・フィルムは木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料は以下の3分類に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本5」（佐竹ほか1989）にしたがい、一般的な性質については「木の事典 第3・4・7巻」（平井 1979・1980）も参考にした。

・アスナロ (*Thujopsis dolabrata*) ヒノキ科 No.10

早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみとなる。分野壁孔は小型のヒノキ型（Cupressoid）で1-5個。放射組織は単列、1-10細胞高。

アスナロは本州・四国・九州に自生する日本特産の常緑高木で時に植栽される。北海道（渡島半島以南）・本州北部には変種ヒノキアスナロ（ヒバ）（*T. dolabrata var. hondai*）がある。解剖学的に区別できない。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No.1,2,3,5,6,7,8,9,11

環孔材で孔塞部は1~多列、孔縁部で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大

道管は単独、横断面では円形～橢円形、小道管は単独および2-3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った橢円形～多角形。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、单(-2)列、1-15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部からの九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、構木などに用いられる。

・サクラ属類似種 (*cf. Prunus sp.*) バラ科 No.4

散孔材で横断面では角張った橢円形、単独または複合し晩材部に向かって管径を減少させる。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-8細胞幅、1-50細胞高。柔組織は周囲状、散在状。年輪界はやや不明瞭。道管内壁のらせん肥厚の確認ができないため類似種とした。

サクラ属にはヤマザクラ (*Prunus jamasakura*) やウワミズザクラ (*P. grayana*) など15種が自生し、多くの変・品種がある。モモ (*P. persica*) やスモモ (*P. salicina*) など古い時代に伝えられ栽培されているものもある。多くは落葉性の高木～低木である。材は一般に中程度～やや重硬・強韌で、加工は容易、保存性は高い。各種器具材・機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な用途が知られている。

以上の同定結果を検出遺構とともに一覧表で示す（表1）。

表1 岩渡小谷(2)遺跡出土材の樹種

試料番号	検出遺構など	種名
1	SI01 床面 No.1	クリ
2	SI01 床面 No.2	クリ
3	SI01 床面 No.3	クリ
4	SI06 カマド覆土 No.1	サクラ属類似種
5	SI07 床直 No.1	クリ
6	SI07 床直 No.2	クリ
7	SI07 床直 No.3	クリ
8	SI07 床直 No.4	クリ
9	SI07 床直 No.5	クリ
10	SI07 床直 No.6	クリ
11	SI07 柱	クリ

4. 考察

これまで検討されてきた竪穴住居の構築材とされる木質遺物のほとんどは、その立地が低湿地を避けていることもあり、炭化材であった。遺構内に埋積していた炭化材が、推定されているように住居

の構築材、さらには柱や板材であるのかという疑問に対しては確実であると言いかけるものの方が少ないよう思う。こうした中で、今回検討したNo.11は柱穴に地下水が供給されていたために柱根部分が腐朽することなく残存したもので、その認定に疑問の残らないものであった。用材はクリである。クリは国産材の中では最高の耐朽性をもつ樹種であり、掘立柱としては最適といえる。したがって、このような材質の特長をふまえての樹種選択があったことは十分考えられよう。1点のみの検討ではあるが、確実に柱材と認められるものの樹種が明らかにされたことの意義は小さくはないと考えている。

このほかの炭化材にもクリが多く認められたが、その用途や性格は明らかではない。

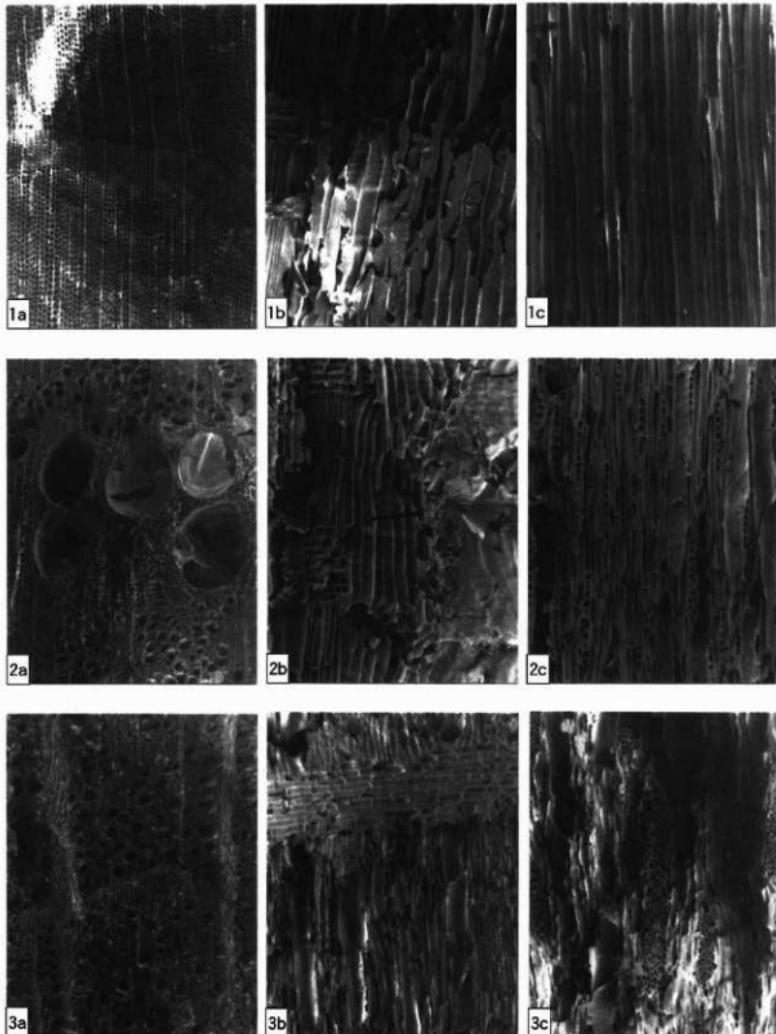
県内の類例では、今回の試料と同様にクリの多い例とともに、他の樹種の方が多く認められる例やクリがほとんど認められない例も知られている。津軽地方では、浪岡町山本遺跡の平安時代とされる5住居跡から検出された炭化材16点の中で、クリが12点を占めている例¹⁾(鷲倉 1987)がある一方で、黒石市板留(2)遺跡の平安時代のものとされる第7号住居跡では、丸太・板・角材などとされる炭化材100点以上が検討され、クリ(34点)も多く認められるものの最多はカツラ(47点)であった例²⁾(鷲倉 1980a)や、尾上町李平下安原遺跡の奈良～平安時代とされる29住居跡から検出された柱・板とされている炭化材76点では、スギ(15点)が最多でクリ(14点)やクルミ(10点)などがこれに次いでいる例³⁾(鷲倉 1988a)、大鰐町大平遺跡のようにスギの多い例⁴⁾(鷲倉 1980b)などもある。太平洋側でも、六ヶ所村発茶沢遺跡⁵⁾(鷲倉 1982)や発茶沢(1)遺跡⁶⁾(鷲倉 1989)のようにクリが多い例とともに、八戸市和野前山遺跡⁷⁾(鷲倉 1984)や三沢市小田内沼(1)遺跡⁸⁾(鷲倉 1988b)のようにコナラが多く認められる例、六ヶ所村上尾歌(2)遺跡⁹⁾(鷲倉 1988c)のようにクリがそれほど多くない例もある。

このように遺跡や遺構によっては、特定の樹種が他のものより数多く認められることははあるものの、時期や地域に共通した樹種があるというような傾向は、今のところ窺えない。ただ、確認されている住居址の中で炭化材が検出されるものがごく少なく、それらに用いられていたであろう部材が炭化材として残存・検出される場合はごく限られていること¹⁰⁾を考えると結論を出すには時期尚早であろう。

<注>

- 1)他にブナ(2), カエデ?, ホオノキが認められている。
- 2)他にホオノキ?(10), カエデ類(6), ブナ(3)などが認められている。
- 3)他にコナラ(9), ニレ・ホオノキ・カツラ・カエデ類(各5), トネリコ属(2)などが認められている。
- 4)4住居址から検出された炭化材の中には住居構築材のはか用途の明らかでないものも多いが、スギが目立つ。他にケヤキ・ホオノキ(?)も認められているがクリは検出されていない。
- 5)平安時代のものとされる6住居址から検出された17点中クリが8点を占めている。
- 6)12住居址の覆土・床面・カマドなどから検出された26点中クリが17点を占めている。
- 7)平安時代のものとされる2住居址検出の10点中コナラが7点を占めている。
- 8)奈良時代末～平安時代とされる5住居址10点中コナラが7点を占めている。
- 9)平安時代とされる14住居址検出の42点のうち最多はクルミ(11)で、ホオノキ(7)がこれに次ぎク

- リ(5)は第3位である。
- 10)住居の構築材が炭化材として残存・検出されるのは、種々の“好”条件が重なった場合に限られる
と筆者は考えている。炭化材の同意結果を考える際には、このことを常に意識しておくべきだろ
う。この点については高橋(1998)も参照されたい。
- 引用文献**
- 平井信二 1979-1980 「木の事典 第3・4・7巻」, かなえ書房.
- 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本I」, 平凡社, 321pp.
- 嶋倉巳三郎 1980a 板留(2)遺跡から出土の炭化材の樹種, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第59集
板留(2)遺跡発掘調査報告書 昭和54年度」, 青森県教育委員会, 付録1-2.
- 嶋倉巳三郎 1980b 木製品および炭化材の樹種について, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第52集
大平遺跡発掘調査報告書 東北縦貫自動車道建設予定地内埋蔵文化財発掘調査 昭和54年度」,
青森県教育委員会, 522-523.
- 嶋倉巳三郎 1982 樹種同定, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第67集 発茶沢遺跡 むつ小川原開発
に係る幹線連絡道路建設及びバイパス設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 昭和56
年度」, 青森県教育委員会, 383.
- 嶋倉巳三郎 1984 和野前山遺跡から出土した炭化材の樹種, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第82集
和野前山遺跡 八戸北バイパス建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 昭和58年度」, 青森
県教育委員会, 318.
- 嶋倉巳三郎 1987 山本遺跡出土の炭化木, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第105集 山本遺跡 一
般国道7号線浪岡バイパス建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一 昭和61年度」, 青
森県教育委員会, 203-204.
- 嶋倉巳三郎 1988a 李平下安原遺跡出土の炭化材, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第111集 李平下
安原遺跡 一主要地方道大鰐浪岡線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一 昭和
62年度」, 青森県教育委員会, 497-506.
- 嶋倉巳三郎 1988b 小田内沼(1)遺跡出土の炭化材, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第107集 小田
内沼(1)遺跡 一三沢米軍住宅建築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一 昭和62年度」,
青森県教育委員会, 137-138.
- 嶋倉巳三郎 1988c 上尾敷(2)遺跡出土の炭化材樹種同定, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第115集
上尾敷(2)遺跡II 一むつ小川原開発事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一 昭和62年度」,
青森県教育委員会, 218-219.
- 嶋倉巳三郎 1989 発茶沢(1)遺跡出土炭化材の樹種, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第120集 発茶
沢(1)遺跡発掘調査報告書IV 昭和63年度」, 青森県教育委員会, 317-319.
- 高橋利彦 1998 杉の堂遺跡出土炭化材の樹種, 「水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集
杉の堂遺跡 一市道杉の堂・北田線改良工事に伴う発掘調査報告書I-」, (財)水沢市埋蔵
文化財調査センター, 16-17.



1. アスナロ No.10 2. クリ No.3 3. サクラ属類似種 No.4

a : 木口×40 b : 柄目×100 c : 板目×100

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柄目では左から右。

第3節 岩渡小谷(2)遺跡におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_4) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとで微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山 1984）。

2. 試料

試料は、基本土層の I 層、II 层、III 层、IV 层、AJ-45 グリッドの黒色土、AK-45 グリッド内で検出された焼土の 6 点である。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）

2) 試料約1gに直径約40μmのガラスピーブを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理

4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去

6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヒエ属（ヒエ）の換算係数は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

4. 分析結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、シバ属、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。

5. 考察

(1) イネ科栽培植物の検討

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ属（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクヒエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型のみが検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別することは困難である（杉山ほか、1988）。また、密度も1.40個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は低いと考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性も考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

(2) プラント・オパール分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、全体的にクマザサ属型が圧倒的に多く検出され、ススキ属型やミヤコザサ節型なども検出された。また、焼土からはヨシ属も少量検出された。おもな分類群の推定生産量によると、すべての試料でクマザサ属型がおよそ60%以上の密度を占めて卓越しており、とくに基本土層の3層と杭P78横では73%弱と圧倒的に多い。なお、杭P78横ではススキ属型も高い密度である。

以上のことから、調査地は基本土層の4層から1層にかけては、いずれもクマザサ属の繁茂する環境であったと考えられ。基本土層の1層、2層および4層や杭P78横では、調査地点あるいは近辺にススキの生育する開けたところがみられたと推定される。なお、焼土よりヨシ属が検出されたが密度は低い。クマザサ属型が卓越することから、ここが湿地であったとは考えにくく、周辺からの混入とみられる。

6.まとめ

プラント・オパール分析の結果、基本土層の4層から1層はいずれもクマザサ属などのササ類が繁茂する環境であり、1層、2層、4層および杭P78横では調査地点または近辺にススキが生育していたと推定された。なお、焼土からは作物に由来するプラント・オパールは検出されず、農耕の行われていた痕跡は認められなかった。

文献

- 杉山真二（1987）タケ亞科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ属植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として一。考古学と自然科学、20、p.81-92.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一。考古学と自然科学、9、p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査一。考古学と自然科学、17、p.73-85.

表1 岩渡小谷(2)遺跡のプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		1	2	3	4	5	6
イネ科	Gramineae (Grasses)						
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type				14		
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)						15
スキ属型	<i>Miscanthus</i> type		47	14	42	123	61
シバ属	<i>Zoysia</i>	8					
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)						
ミヤコササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i> type	16	7	14			
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	1195	1182	2176	2474	8956	4552
その他	Others	229	135	111	495	307	351
未分類等	Unknown	546	628	698	1004	2944	2475
プラント・オパール総数		2041	1966	2985	4043	12329	7454

資料No.は第3章第4節参照

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²·cm)

ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type			1.19			
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)						0.96
スキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.59	0.17	0.53	1.52	0.76	
ミヤコササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i> type	0.05	0.02	0.04			
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	8.96	8.87	16.32	18.56	67.17	34.14

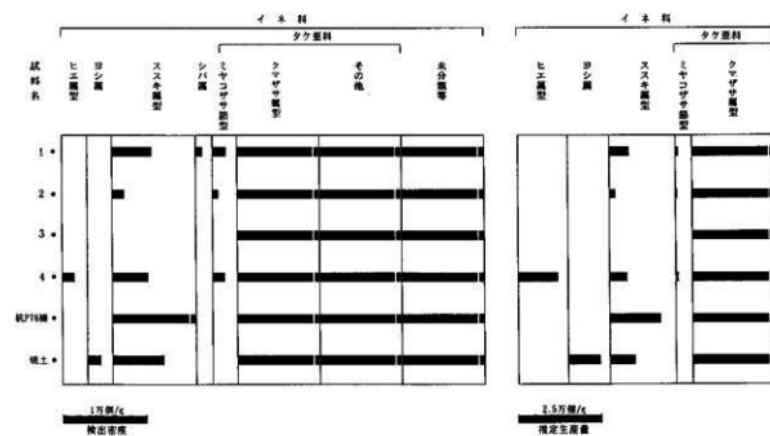
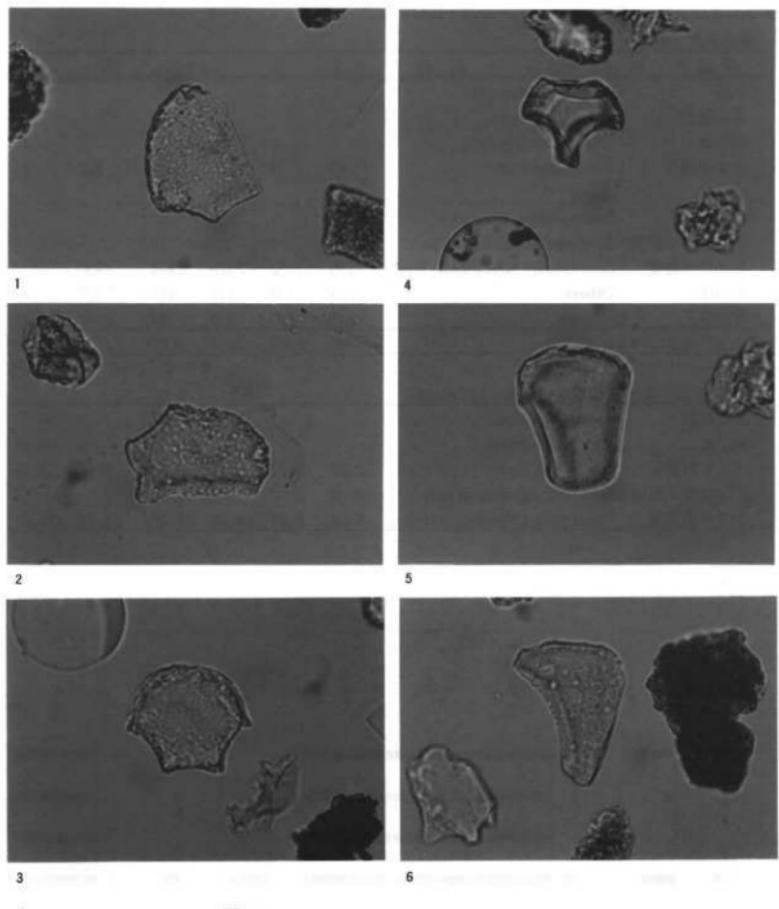


図1 岩渡小谷(2)遺跡におけるプラント・オパール分析結果



0 100 μm

No.	分類群	試料名
1	タケ亞科(クマザサ属型)	試料3
2	タケ亞科(クマザサ属型)	試料6(燒土)
3	タケ亞科(ミヤコザ属型)	試料1
4	シバ属	試料1
5	ウシクサ属?	試料1
6	不明	試料4

プラント・オパール(植物珪酸体)の顕微鏡写真

第5章　まとめと考察

岩渡小谷(2)遺跡の遺構と遺物については第3章第1節において簡略にまとめてある。本章では特に注意を喚起したい遺物について若干の所見を記すこととする。

第1節 岩渡小谷(2)遺跡出土の縄文土器について

本遺跡から出土した縄文土器の中には型式の判別が困難なものが少なからずあった。ここでは、それらのうちの特長的な個体について若干の所見を記す。尚、本文で言及する個体は、それぞれ遺構外出土の遺物番号（図44～54参照）をもって表現した。

29は円筒上層b式に比定した。口縁部文様帶の貼付を縁取るようにみられる圧痕や、馬蹄形状の圧痕がみられること等をその根拠とした。しかし本型式の馬蹄形文は、通常単一の原体で施されるのが多いのに対して、29のそれは異然の2原体を組み合わせて施文している。2つの原体による圧痕は、本報告書でII-1類に分類した9をはじめ、円筒上層a式の圧痕文に多數みられる。また、横位に連続する馬蹄形文を追っていくと、文様が突然途切れたり、今までみられなかった箇所に現れたりと、施文の仕方に計画性がみられない。水平に施された異然の原体による圧痕で挟まれた文様の空白地を、同一原体でやみくもに埋めた、というような感じを受ける。本遺跡で円筒上層b式に比定したのはこの1個体のみであるが、後続する円筒上層c・d式の遺物も前段階のa式に比べて出土量がはるかに少ない。このため、29がもつ文様がb式の初現的なものに近い可能性もある。三戸郡福地村館野遺跡（青森県教育委員会 1989）における円筒上層a・式3類の「く」の字状文・4類の爪形文と併せて、円筒上層b式の馬蹄形文のルーツを考える上で無関係でないものと考える。

39は円筒上層e式期のものと考えた。三戸郡三戸町泉山遺跡（青森県教育委員会 1976）の中期第3群e類がこれに近いものと思われる。円筒上層e式期には、それまでの円筒土器文化の伝統が崩壊しつつあり、この器面にみられるような綱回転の繩文は、大木式土器文化の影響であるといわれる（三宅 1977）。重ねて、この土器の器面には、波状口縁の頂間下方に縱位の無文帯がみられるが、これも併行する大木式土器によくみられる要素といえよう。前述の泉山遺跡でも中期第5群a類に、大木8b式の土器としてその類例がある。円筒上層e式から大木8b式の地方型式である榎林式への変遷を示す資料といえる。

77・78は、粗雑な沈線で入組文・渦巻文を描いている。頸部付近では、文様帶を区画すると思われる横位沈線を上部に飛び越した入組文がみられたが、これは文様区画帶の内側で文様構成するという原則に反している。入組文の周囲にみられる短沈線は主文様より先に施されており、その位置から考えて文様配置の割付をするために一時的に配されたものなのかもしれない。79も短沈線を多用しており、77・78同様、破片資料のため全体のモチーフがどのようなものであるのかが不明である。このような類例は探し難かったが、十腰内I式の範疇に入るものとして考えたい。もし土器の製作にあたって、文様構成・施文方法に型式的制約があったのであれば、これらの土器はその制約をあまり感じさせない。未熟な模倣品である、ということが言えるのかもしれない。

（土岐 耕司）

第2節 第7号竪穴住居跡出土の柱材について

第7号竪穴住居跡の柱穴から1点の柱材が出土した（図版及び図43-31参照）。出土したのは第7号住居北東側のPit4である。こうした柱材は、残る3基の柱穴や他の住居跡の柱穴からは出土していない。竪穴住居は湿地を避けて作るのが通例だが、有機質の遺物が残りやすいのは低湿地が一般的であるので、竪穴住居跡に生材が残る可能性は概して低い。Pit4の柱材の遺存状態が良好だったのは、偶然下部が伏流水の水脈と重複したことなどいくつかの好条件が重なった結果と思われる。

県内の平安時代の遺跡から確認される建築材は、炭化したものがほとんどである。しかも炭化した材が倒れた状態で住居床面から確認されることが多く、使用時の状態を保って検出されるのは青森市三内遺跡第44号竪穴住居跡（青森県教育委員会 1978）、同近野遺跡第19号竪穴住居跡（青森県教育委員会 1975）等極めて限定的である。炭化しない生材で、使用状態を保持したまま出土した例となるとさらに限られ、青森市細越遺跡第1号住居跡が挙げられる程度である（青森県教育委員会 1979）。これらはいずれも住居の壁材と推定されている。他の遺跡から検出された炭化材は用途不明のものが少くないが、推定できるもの多くは壁材か垂木であり、住居そのものを支えた柱材が識別された例は寡聞にして知らない。本遺跡例は上部の大半が腐朽しているとはいえ、住居の柱穴に、炭化することなく直立した状態で確認されたものであり、竪穴住居に使用された柱と明言できるものとして極めて貴重な資料と思われる。また、竪穴住居跡内には白頭山・苦小牧火山灰（B-Tm）が堆積していたことから、時期的にも同火山灰堆積以前のものと限定できる点でも重要である。

確認された柱材の断面形は、わずかに湾曲しているものの長方形に近い形状で、最大長34、最大幅8.5cm程である。残存した高さは底面から約24cmまでである。そこから上部は腐朽して残っておらず、残存部の上面は腐朽の程度の違いからか不整形である。不整形部分以外は本来の柱の形状を留めているようである。

樹種は分析の結果クリであることが判明した（第4章第2節参照）。木取りは柾目で、年輪は不明瞭な部分もあるが125本を数えることができた。年輪の向きは対向することなく全て同じ方向に向くことから、樹齢は130年前後になると推定される。辺材部分の遺存状況は必ずしも明確ではないが、樹皮に近い部分まで残っているようであり、内側は芯近くまで残っているものの中心部分はずれている。従ってこの材の長軸長は素材となったクリの原木の半径に若干欠ける長さと思われる。残存長が34cmであることから類推すると、伐採されたクリの木の直径は単純計算で70cmを超える。樹木は日のあたり方や気象条件で成長の度合いが異なるのが通例である。一般的な傾向で言えば、年輪幅は北側が狭いのに対し南側は広く、寒冷な年が狭いのに対し温暖な年は広い。本遺跡例の年輪間隔は1.5～3mm程度と比較的狭く、経年変化も乏しいことから考えると、立木の状態時における北側に相当する部位を柾目にとったものである可能性が高い。だとすると南側の年輪幅はより広いものと推定されるので、原木の直径は単純計算の70cmに留まらないのは明らかで、仮に南側の年輪幅が平均4mm程度としても直径は80cmを超えていた可能性が考えられる。平安時代の遺構にクリ材が多用されていたことはこれまでにも指摘されてきたが、これほどの巨木が用いられたことは注目に値する。

原木伐採後の製材は分割によったものと思われる。年輪の状況から判断すると、表裏とも分割後の二次的な整形加工が施されることなく、分割面がそのまま残されている。底面だけは比較的丁寧な二

次加工で平坦に仕上げられている。工具痕は不明瞭であるが、手斧等の鉄器が使用された可能性が考えられる。

柱の断面形は長方形に近い形状であり、柱というよりは厚手の板材といった趣である。従来の柱材のイメージは断面円形ないし方形が一般的と思われるが、それは柱穴の形態もしくは柱穴内に残された柱痕から類推されたものであろう。断面円形の場合は自然木の利用も考えられてきた。柱材そのものの出土がほとんどないだけに、類推するしか術はなかったが、本遺跡例の出土により以下の諸点が明らかになった。

- ① 柱材には円形の自然木だけではなく、分割材も用いられる（出土した柱材の木取りから）。
- ② 断面の長幅比が1:3を超えるような長方形の板状の材も柱材として用いられる（出土した柱材の形態から）。
- ③ 柱穴の大きさと形態は柱の断面形をある程度反映している（出土した柱材と柱穴の形態から）。
- ④ 同一住居に用いられる柱材は全てが同規模、同形態のものとは限らない（第7号竪穴住居跡の柱穴をみると、Pit1の形態は長方形でありPit4と同様の柱材が用いられた可能性が考えられるものであるが、Pit2は円形、Pit3は方形と柱穴の形態は異なる。特にPit2はPit4から出土した柱材が納まらないほど小型であることから、加工材を用いているとは言え、全ての支柱を同様に加工したわけではないことが解かる）。
- ⑤ 建築材にはクリ材が多用された可能性がある（第4章第2節に示した炭化材の樹種同定の結果では、第1号・第7号竪穴住居跡の試料全点がPit4の柱材同様クリ材で、非クリ材は第6号竪穴住居跡カマド内の1点のみであった）。
- ⑥ 平安時代においてもクリの巨木が利用されていた（出土した柱材の木取り、年輪から）。

これらが同時期の他遺跡にまで普遍化できるか否か、以下に若干の検討を加える。比較にあたっては、時期と地域が比較的限定できる第7号竪穴住居跡類似の、外周溝と掘立柱建物が付随する竪穴住居跡を対象とした。

①を前提とすると、野尻(1)遺跡第1号建物跡（青森県教育委員会 1998）、同遺跡第302号建物跡（青森県教育委員会 2000）、朝日山(3)遺跡第6号建物跡（青森県教育委員会 1997）等で、①に示したような加工を施した②のような厚手の板状の材を柱にしていた可能性が考えられる。このことは、今回報告した本遺跡例の柱材の形態が一般的とは言えないものの孤立した存在ではないことを意味するものと思われる。ただ、それらの遺跡例でも④の指摘は該当することが多く、同一住居内における柱材の規模、形態の不統一は構造上の必要性に応じたものか否かは検討が必要である。外周溝と掘立柱建物が付随する竪穴住居跡は、同一遺跡内においては、カマドの向き、外周溝や掘立柱建物と竪穴住居跡の位置関係に強い齊一性がみられるのが一般的であるが、そうした場合でも柱穴の規模や配置にはそれが見出せないことが少なくない。このことから、柱材は必ずしも規格性が高いものではなく、加工材を用いた場合でも柱専用に加工したとは限らないとも考えられる。④のようなあり方は他の構造物からの転用材を用いた結果であることも視野に入れた方がいいかも知れない。⑤については同様の傾向をみせるのは本遺跡に限らない。先述の三内遺跡第44号竪穴住居跡の最多樹種もクリであり、浪岡町山元遺跡、源常平遺跡の最多樹種もクリであった。しかしながら、第4章第2節の指摘に見られるように樹種同定された全ての平安時代遺跡でクリが卓越するとは必ずしも言えないことから、建

築材に用いる樹種の選択にあたっては指向性はあったものの必ずしもそれに拘束されるものではなかったようである。腐朽しにくく燃えにくいという特性を知った上でクリを建築材に多用する例は中部地方の民家をはじめ各地に見られ、そうした選択眼が本県の平安時代遺跡でも発揮されたものと思われるが、その選択性は強固なものではなく、ある程度周囲の植生環境に応じたものであったようである。ちなみに本遺跡ではカマド内出土のものだけ樹種が非クリ材であったが、出土位置からこれは燃料材であった可能性が考えられる。今後は用途に応じた有用樹種の使い分けについても考慮する必要がある。④から想起されるのは縄文時代のクリの巨木である。富山県接町遺跡、石川県チカモリ遺跡、真脇遺跡、新潟県寺地遺跡等日本海側を中心にクリの巨木遺構が確認されているが、本遺跡と同じ沖館川流域に位置する三内丸山遺跡からもクリの巨木を用いた遺構が検出されて話題となった。本遺跡の柱材から想定される原木の直径は先に見たように最低70cmを超えるものと推定されるが、この数値は三内丸山遺跡の所謂6本柱に比肩し得るものである。本遺跡例の原木の長さがどれほどのものであったか不明であるが、こうしたクリの巨木が縄文時代に限らず沖館川流域に存在していた可能性を示唆するものと思われる。

以上出土した柱材の年輪、木取り等から若干の考察を試みたが、今回行った柱材についての科学的分析は樹種同定のみであったので他の分析を併用するとさらに考察を深める余地はある。

本遺跡の柱材は年輪年代法が確立していないクリ材ということだったのでその測定は行わなかったが、条件が整えば年輪年代測定やAMSによるC14年代測定を試みる必要もある。ちなみに、今回は柱材そのものではなく、同一住居内の炭化材を用いたC14(AMS)年代測定を行った結果、C14年代は $1,230 \pm 40$ y BPの数値が得られた。それから求められた較正曆年代は、68% probabilityでcalAD 720~745及びcalAD 760~870年の範囲である(第4章第1節)。第7号竪穴住居跡も含めて、外周溝と掘立柱建物が付随する竪穴住居は白頭山・苦小牧火山灰が堆積するものが多く、それとの関係や土器形式等から10世紀前半の年代観が示されることが一般的であるが、今回の測定値はそれより古い傾向をみせている。当該期のAMSによる年代測定は今後徐々に蓄積されるものと思われるが、ある段階でそれらと土器形式、住居形態との関係の整理が必要になることが予想される。

また、年輪年代法による伐採年の測定ができない樹種でも、試料の状態によっては伐採季節が推定できる可能性は残されているものと思われる。当時の生業サイクルの中に木の伐採時期がどのように位置付けられるかはまだよくわかっていないので、今後はその点にも注意して分析する必要があるものと思われる。

(太田原 潤)

引用・参考文献

- 青森県埋蔵文化財調査センター 2000 「岩渡小谷(4)遺跡」『平成12年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会』
- 青森県埋蔵文化財調査センター 2000 「朝日山(2)・(3)遺跡」『平成12年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会』
- 青森市教育委員会 2000 『熊沢遺跡』青森市埋蔵文化財調査報告書第48集
- 青森県教育委員会 1975 『近野遺跡発掘調査報告書(II)』青森県埋蔵文化財調査報告書第22集
- 青森県教育委員会 1976 『泉山遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第31集
- 青森県教育委員会 1977 『近野遺跡発掘調査報告書(III)、三内丸山(II)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
- 青森県教育委員会 1978 『青森市三内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第37集
- 青森県教育委員会 1978 『熊沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第38集
- 青森県教育委員会 1979 『細越遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第49集
- 青森県教育委員会 1985 『石の窪(1)・石の窪(2)・古宮遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第92集
- 青森県教育委員会 1988 『館野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第119集
- 青森県教育委員会 1994 『三内丸山(2)遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第157集
- 青森県教育委員会 1995 『松山・羽黒平(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第170集
- 青森県教育委員会 1996 『羽黒平(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第194集
- 青森県教育委員会 1998 『野尻(1)遺跡I』青森県埋蔵文化財調査報告書第234集
- 青森県教育委員会 1999 『安田(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第255集
- 青森県教育委員会 1999 『三内丸山(6)遺跡I』青森県埋蔵文化財調査報告書第257集
- 青森県教育委員会 2000 『三内丸山(6)遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第279集
- 青森市教育委員会 1973 『孫内遺跡発掘調査報告書』青森市の埋蔵文化財 8
- 北林八洲晴 1971 「津軽半島における擦文土器の新資料」『北海道考古学』
- 千野 裕道 1991 「縄文時代に二次林はあったか—遺跡出土の植物性遺物からの検討—」『研究論集 X 創立10周年記念論文集』東京都埋蔵文化財センター
- 三宅 徹也 1977 「円筒土器の概念とその崩壊」青森県郷土館調査年報第3号



調査区全景（調査開始前）



調査区全景（調査開始後）



遺構集中区（S I - 01~03・06・07・11）



遺構集中区（S I - 04・05・08~10）



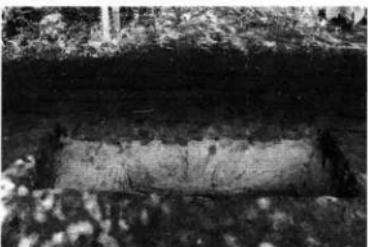
調査風景及び遺構の位置（南西から）



調査風景及び遺構の位置（北東から）



調査風景（尾根頂部）



基本土層

写真1 調査区全景他



第11号竪穴住居跡完掘状態



第11号竪穴住居跡土層断面



第11号竪穴住居跡掘り形



第11号竪穴住居跡埋設上器



第12号竪穴住居跡遺物出土状態



第12号竪穴住居跡土層断面



第13号竪穴住居跡遺物出土状態



第13号竪穴住居跡土層断面

写真2 第11～13号竪穴住居跡（縄文時代）



第11号土坑土層断面



第12号土坑土層断面



第13号土坑



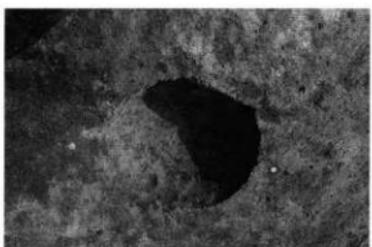
第13号土坑土層断面



第16号土坑



第16号土坑土層断面



第17号土坑



第18号土坑土層断面

写真3 第11～13・16～18号土坑（縄文時代）



完掘状態



炭化材出土状態



掘り形



土層断面



力マド付近遺物出土状態



力マド全景



力マド土層断面



力マド完掘

写真4 第1号竪穴住居跡



第2号竪穴住居跡完削状態



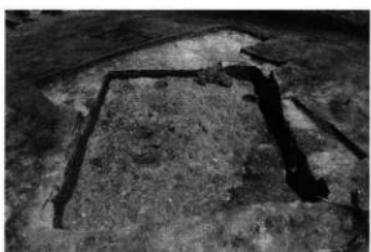
第2号竪穴住居跡上層断面



第2号竪穴住居跡カマド



第2号竪穴住居跡カマド土層断面



第3号竪穴住居跡（カマドA段階）



第3号竪穴住居跡上層断面



第3号竪穴住居跡カマドA



第3号竪穴住居跡カマドA土層断面

写真5 第2・3号竪穴住居跡



第3号竪穴住居跡（カマドB段階）



第3号竪穴住居跡掘り形



第3号竪穴住居跡カマドB



第3号竪穴住居跡カマドB土層断面



第4号竪穴住居跡



第4号竪穴住居跡土層断面



第4号竪穴住居跡カマド土層断面



第4号竪穴住居跡カマド遺物出土状態

写真6 第3・4号竪穴住居跡



第5号竪穴住居跡



第5号竪穴住居跡南北土層断面



第5号竪穴住居跡東西土層断面



第5号竪穴住居跡カマド



第6号竪穴住居跡



第6号竪穴住居跡土層断面



第6号竪穴住居跡カマド



第6号竪穴住居跡掘り形

写真7 第5・6号竪穴住居跡



第7号竪穴住居跡及び関連遺構（上空から）



第7号竪穴住居跡及び関連遺構（北東から）



第7号竪穴住居跡及び関連遺構（南から）



第7号竪穴住居跡及び関連遺構（南東から）



第7号竪穴住居跡及び関連遺構（南西から）



第7号竪穴住居跡及び関連遺構（東から）



第7号竪穴住居跡



第7号竪穴住居跡遺物出土状態

写真8 第7号竪穴住居跡及び関連遺構（1）



第7号竪穴住居跡北東－南西土層断面（1）



第7号竪穴住居跡北東－南西土層断面（2）



第7号竪穴住居跡南東－南西土層断面（1）



第7号竪穴住居跡南東－北西土層断面（2）



第7号竪穴住居跡カマド付近



第7号竪穴住居跡カマド土層断面（1）



第7号竪穴住居跡カマド土層断面（2）

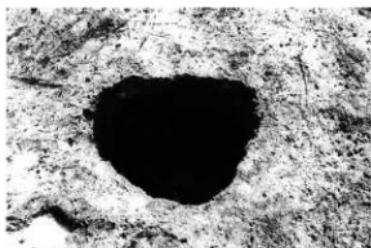


第7号竪穴住居跡カマド煙道土層断面

写真9 第7号竪穴住居跡及び関連遺構（2）



第7号竪穴住居跡掘り形



第7号竪穴住居跡 Pit 4 柱材出土状態



第1号掘立柱建物跡



第1号掘立柱建物跡 Pit 5 土層断面



第1号溝跡全景



第1号溝跡 (①→から)



第1号溝跡 (②→から)

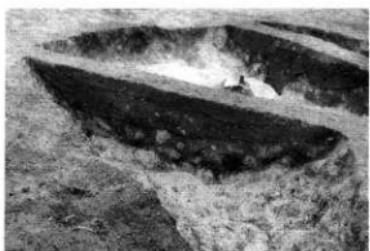


第1号溝跡 (③→から)

写真10 第7号竪穴住居跡及び関連遺構 (3)



第1号溝跡土層断面 (H-H')



第1号溝跡土層断面 (I-I')



第1号溝跡土層断面 (J-J')



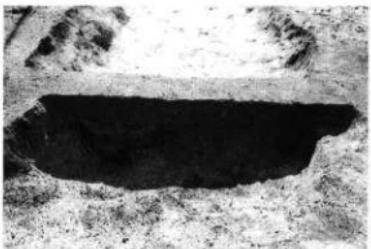
第1号溝跡土層断面 (K-K')



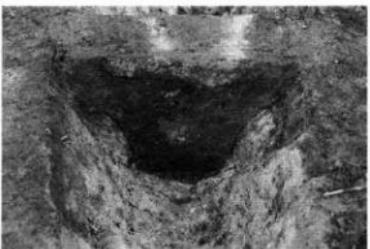
第1号溝跡土層断面 (L-L')



第1号溝跡土層断面 (M-M')



第1号溝跡土層断面 (N-N')



第1号溝跡土層断面 (O-O')

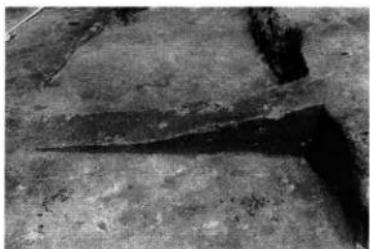
写真11 第7号竪穴住居跡及び関連遺構 (4)



第8号竪穴住居跡



第9号竪穴住居跡



第9号竪穴住居跡土層断面



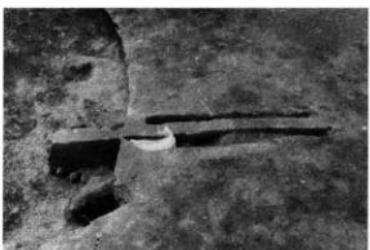
第10号竪穴住居跡



第10号竪穴住居跡土層断面



第10号竪穴住居跡カマド

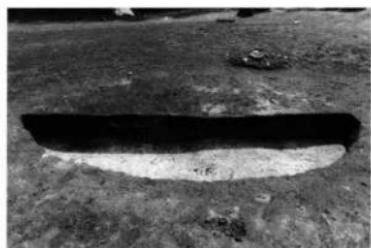


第10号竪穴住居跡カマド土層断面

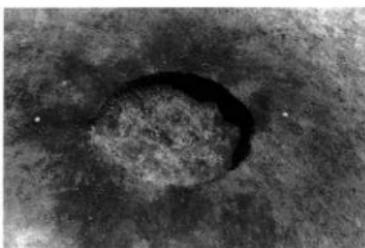


第10号竪穴住居跡掘り形

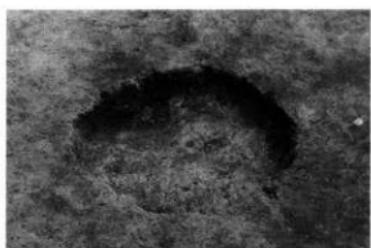
写真12 第8～10号竪穴住居跡



第1号土坑土层断面



第2号土坑



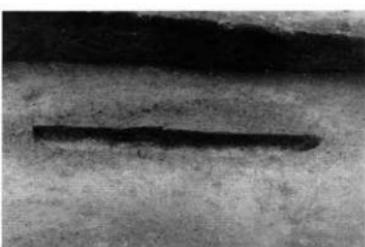
第3号土坑



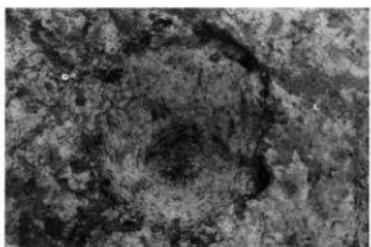
第3号土坑土层断面



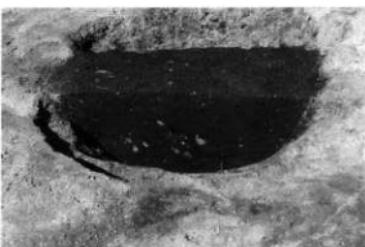
第4号土坑



第6号土坑土层断面

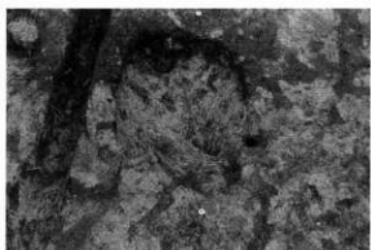


第7号土坑



第7号土坑土层断面

写真13 第1~4·6·7号土坑



第8号土坑



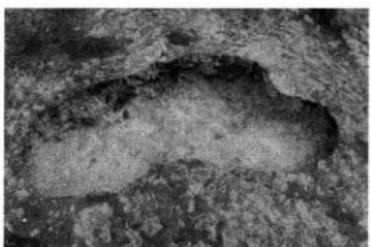
第8号土坑土層断面



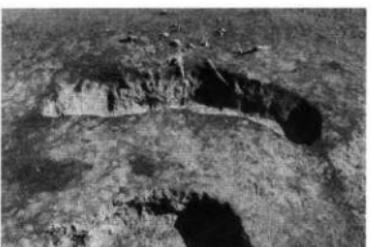
第9号土坑土層断面



第10号土坑土層断面



第9・10号土坑



第14号土坑

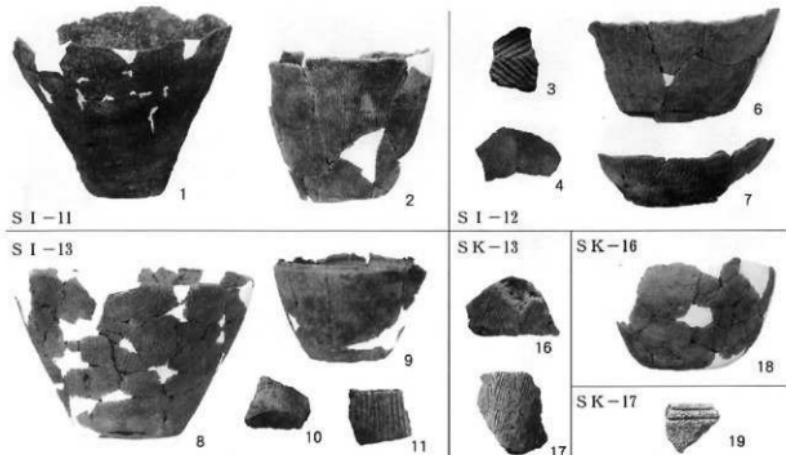


第15号土坑



第1号敷石遺構

写真14 第8～10・14・15号土坑・第1号敷石遺構



第I群土器



第II群土器

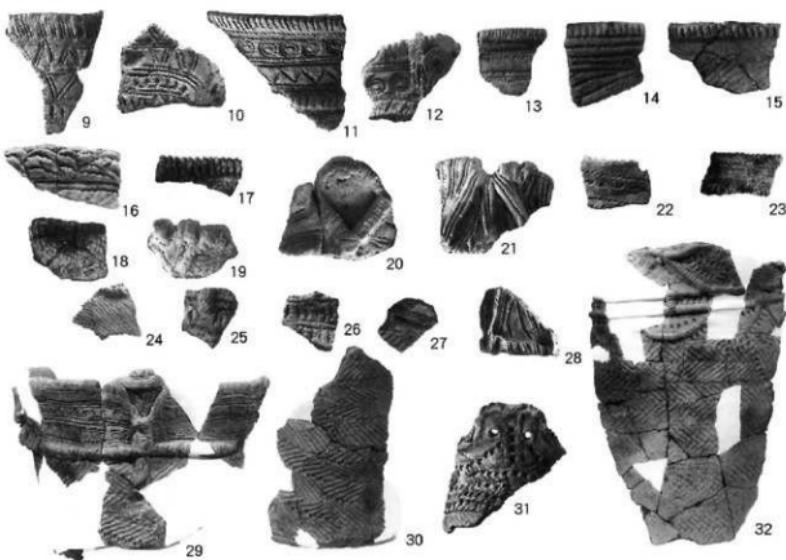
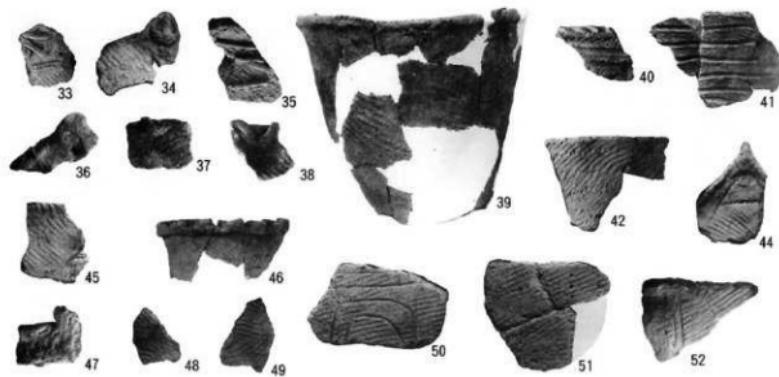
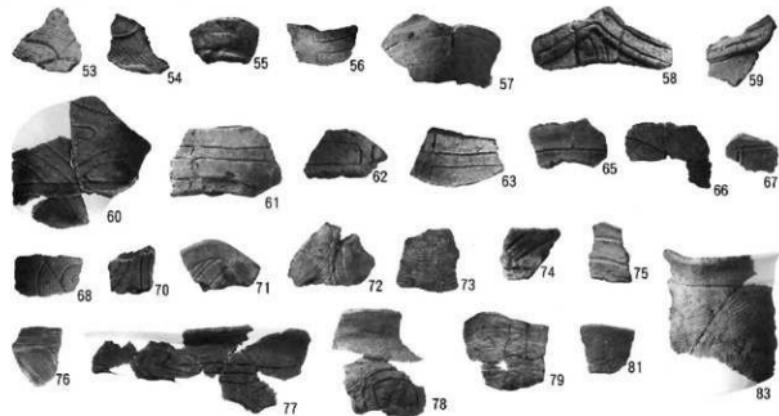


写真15 遺構内及び遺構外出土縄文時代土器



第三群土器



第四群土器

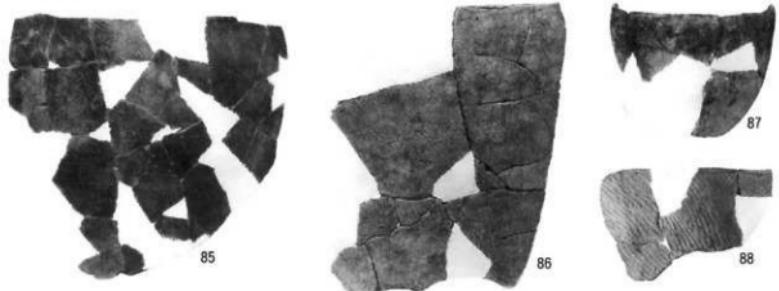
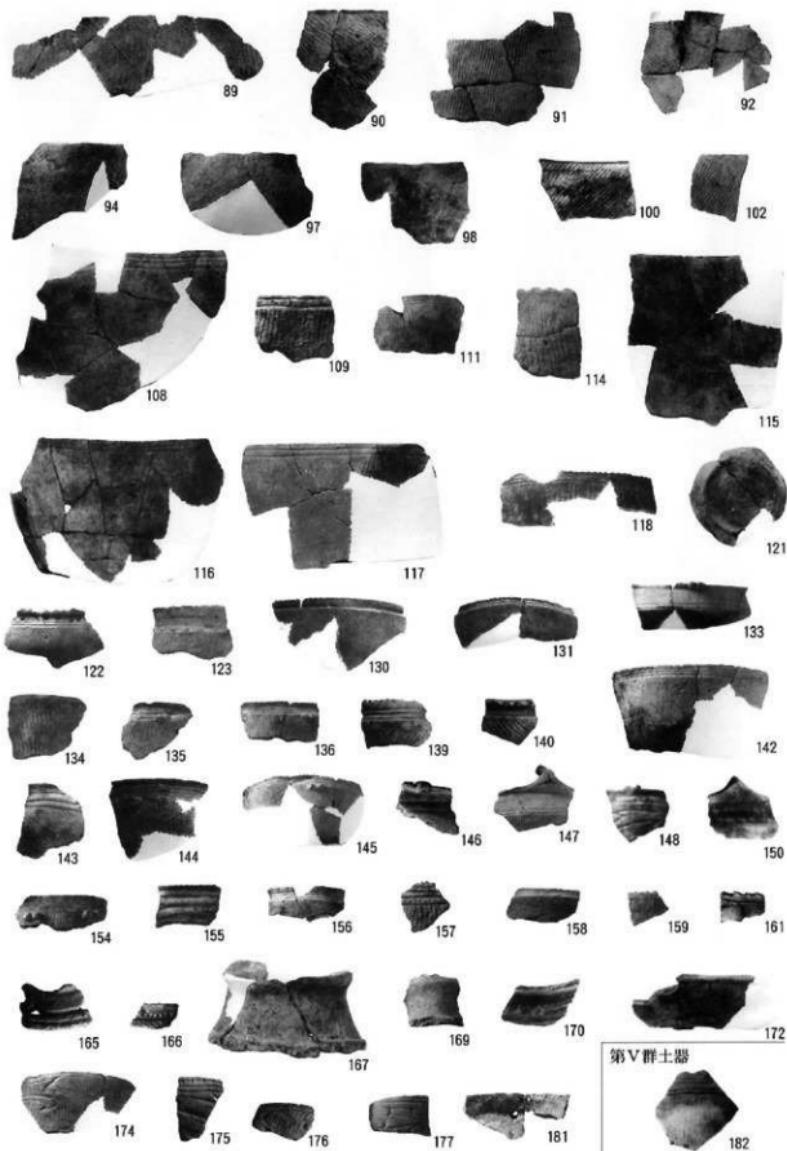


写真16 遺構外出土縄文時代土器



第V群土器



写真17 遺構外出土縄文時代・弥生時代土器



写真18 縄文時代石器

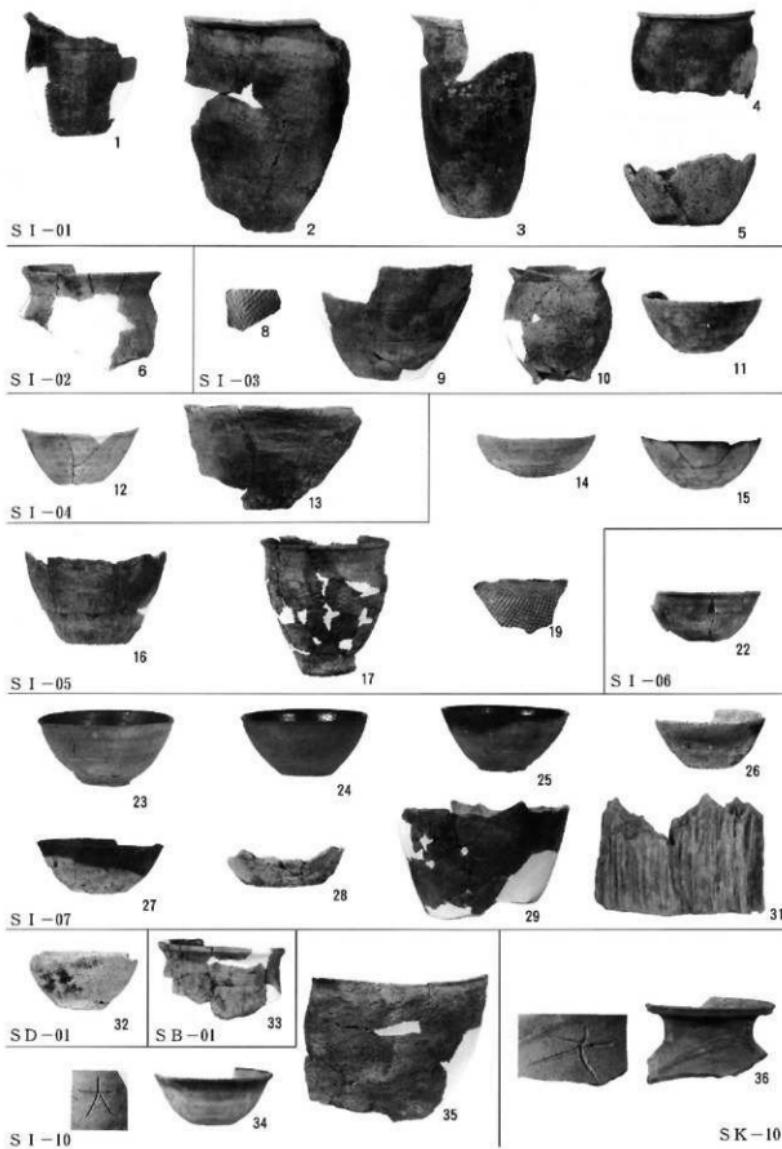


写真19 平安時代遺物

報告書抄録

りがな	いわたりこにかっこにいせき
書名	岩渡小谷(2)遺跡
著者	東北総貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告
卷	
シリアル番号	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第300集
編著者名	太田原 潤・齊藤 山美子・土岐 耕司
刊行機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒030-0042 青森市新城天田内152-15 Tel 017-788-5701
発行年月日	2001年3月30日

ふりがな 所収地名	所在地	コ		下	上	調査期間	調査員数	調査原因
		市町村	町字番地	緯	経			
いわたりこたに 岩渡小谷(2)	青森市大字 岩渡字小谷	02201	01300	40° 47' 58"	140° 41' 09"	19990420 ~ 19990917	8,500	東北総貫自動 卓道建設事業

既以遺跡名	種別	主な時代	土なまけ	主な遺物	特記事項
岩渡小谷(2)	散布地	繩文 弥生 平安	竪穴住居跡 12軒 土坑 17基 溝跡 1条 掘立柱建物跡 1棟	繩文土器・石器 弥生土器 土師器・須恵器 柱材	第7号住居跡（平安時代）の柱穴から柱材が出土した。

青森県埋蔵文化財調査報告書 第300集

岩渡小谷（2）遺跡

—東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2001年3月30日
発 行 青森県教育委員会
TEL 030-0801 青森市新町2丁目3番1号
電話 017-722-1111（代表）
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
TEL 038-0042 青森市新城字天田内152-15
電話 017-788-5701 FAX 017-788-5702
印 刷 所 青森相互印刷株式会社
TEL 038-0013 青森市久須志4丁目1-25
電話 017-766-5161 FAX 017-766-5162



活彩あおもり

—輝くあおもり新時代—